

---

# **魔法少女リリカルなのはStrikerS～龍の影を纏いし騎士～**

キラ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS～龍の影を纏いし騎士～

### 【NZコード】

N1868N

### 【作者名】

キラ

### 【あらすじ】

かつて、戦いの中に身を投げた男がいた。彼はその戦いの中で悩み、苦しみ、それでも前に進もうとした。やがてすべてが終わり、人々はすべてを忘れた。しかし、彼城戸真司の戦いは、再び始まる。今度は、異世界で。これは、一人の『馬鹿』が織りなす、新たな物語である。

この作品はユーザー登録をされていない方でも感想が書けるようになります。お気軽に寄せください。

## プロローグ 異世界からの誘い（前書き）

初めての方ははじめまして、そうでないかたはおはようございます、キラと申します。というわけで、1つ注意事項が。

最初に言っておく！この作品に、龍騎側は真司以外基本出ない！

それでもいいところ方はぜひ読んでみてください。

## プロローグ 異世界からの誘い

その昔、幾度も繰り返された戦いがあった。選ばれた人間が仮面ライダーとなり、最後の一人になるまで殺しあった。

何故、彼らは戦つたのか？

ある者は、愛する者のために。

ある者は、ライダーの頂点に立つために。

ある者は、永遠の命を得るために。

ある者は、戦いを止めるために。

ある者は、楽しく遊ぶために。

ある者は、ただ暴れるために。

ある者は、英雄になるために。

ある者は、ただ幸せになるために。

ある者は、超人的な力を得るために。

ある者は、姉の敵を討つために。

ある者は、完全な肉体を得るために。

誰もが、自分の欲望のために戦った。

そんな中、仮面ライダーとなつた一人の青年がいた。最初、彼は戦いを止めようとした。

だが、彼は知つてしまつた。ライダーには、どうしても叶えたい願いがあることを。そして、戦わなければ彼のよく知る人物が死んでしまうことを。

彼は悩んだ。苦しみ続けた。様々な思いを受け止めながら、それで

もあがわつけた。

……やうじて、やつやく願いを見つけた時、彼の命は終わりを告げた。

「やつばー！」のままじや遅刻だよーへつそー、なんでこいつの間にか田舎ましが壊れんのだ！？

戦いは終わった。すべてが元に戻り、死んだ者達は生き返った。同時に、皆が戦いの記憶を失った。

「おせよひゞやれこます！城戸真司、ただいま出勤しましたー！」

だが、ただ一人、彼の戦いはまだ終わっていなかつた。

「」おら真司！お前新人の分際で遅刻とはい度胸だなあ！」

OREジヤーナルの事務所に入った途端、城戸真司は編集長の大久保大介に首を絞められ頭をぐりぐり押さえつけられる。

「痛つ！？へ、編集長痛い、痛いっす！遅刻つて言つても三分くらいいじやないですか！？」

「三分でも一秒でも遅刻は遅刻なんだよ！大体お前この前の記事だつてなんだありや？あっちこちからクレーム来てるぞ！」

反論する真司だが、大久保は取りあおつとはせず、彼の頭をポカリと殴る。

「とにかく、とつとと仕事行つて来い！」

「は、はい！城戸真司、汚名挽回のために行つてまいります！」

ようやく首絞めから解放された真司は、荷物をまとめると敬礼して

事務所から出ていった。

「……それを言つなら逆を返上か名誉挽回でしょ」

事務所の稼ぎ頭である桃井玲子が記事をパソコンに打ち込みながら冷静にシシコむ。

「やつぱつ馬鹿ですね~」

「ちりもパソコンとにらめっこしながら、真司と同じく新人の浅野恵がつぶやく。

「むつ、むむむ……真司君の今日の運勢、最悪の最悪、何がどうなるかわからないですね~」

「つてお前も仕事しろー。」

どこから持ってきたのか、さりげなく水晶玉で占いをしている島田奈々子に大久保が怒鳴った。

「……それにしても、黄金のキノコとか絶対ハズレのネタだと思うんだけどなあ」

「ぶつぶつぶやきながら、森の中をうろついている真司。この辺りで金に光るキノコを見つけたとかいう噂があるらしく、調査に向いたわけだ。が、正直見つかるとは思っていない。

今田は骨折り損かとため息をついたとき。

「ん…………？」

真司の視界の奥の方に、鮮やかな光があった。まるで、黄金の何かが輝いているかのように。

「え？ ひょっとして当たり？ つしゃあーこれで馬鹿新人からは卒業だ！」

思わぬ展開につきつきしながら、真司は光の方へ走って行く。

……だが、そこで見たものは。

「な、何だよこれ…………？」

まさに、『光』そのものだつた。何かが輝いているのではなく、ただ光が浮かんでいたのだ。信じられない光景に、真司は驚くばかりだ。

「…………でも、これはこれでスクープだよな。よし、早速写真を

」

開き直つた真司がバッグからカメラを取りだそうとしたとき。

光が、輝きを増した。そして、真司を包みこんでいく。

「ちゅっ、ま、タンマタンマー。」

必死の叫びも虚しく、真司は完全に光に取りこまれ、その空間から『消滅した』。

「ん…………あ…………」

真司が目を覚ますと、そこは一面真っ白な世界だった。一体、何がどうなったのだろうか。

「…………」

「気がついた？ 真司君」

声のした方を振り向くと、そこには男性と女性が一人ずつ立っていた。

「どうして、俺の名前を……？」

真司は今しがた自分に声をかけたであろう女性の方へ尋ねる。

「時間がない。質問はするな」

すると男性の方がそれを制し、真司にあるものを手渡す。

「……これは……？」

黒い長方形の入れ物に、カードがたくさん入っている。そして、その入れ物には金色のマーク 龍であろうか が刻まれている。

「お前に力を『える。戦え』

「え？」

いきなりの発言に渋然とする真司。

「つてお兄ちゃんー違つでしょー。」

と、女性の方が男性にツッコむ。お兄ちゃんといつひとせ、おのれの  
人は兄妹なのかと考える真司。

「ああ、すまない。つい昔の癖で」

「まつたく……よく聞いて、真司君」

恥ずかしそうにうつむく男性。今度は女性の方が話すらしく。

「あなたは、これから異世界に行ってしまった」となったの

「…………は？あの、何を言ひて」

そりなる爆弾発言に混乱する真司をよそに、女性は話を続ける。

「何度も世界が繰り返されたことによって、空間にひずみが出来てしまつた。そして、あなたはそこに落ちてしまつた。…………」「めんな

「……そこ。私達のせいなの?、あなたが異世界に行くのを止める」けどが  
できない」

「……それ、本当の話?といつか異世界つて……」

「本当のこと。これからあなたが行く世界は、言つてしまえば危険  
なところなの。今渡したテツキは、身を守るためのもの。だから、  
無理に戦いの中へ飛び込む必要はないんだよ」

女性はそう語り終えると、小さく微笑む。

「……て言つても、きっと真司君はすぐに色々首を突っ込むんだろう  
うね」

その懐かしそうな顔を見て、真司の胸の奥から何かがこみ上げてくる。漠然としているが、前にこの人を見たことがあるような気がしてきただのだ。

「……ねえ、君は一体……どうして俺の名前を知ってるの?」

真司の言葉を聞いて、女性は少しだけ寂しそうな表情になる。

と、その瞬間、真司の体が光り始め、次第に消えていく。

「……もう時間みたいだね」

「そのようだな」

女性と男性がそつそつとやく。

「ちよっと待つてー君達は……」

「…………あなたは、もう私のことを思い出せないけれど……でも忘れないで。私は、ずっと真司君のことを覚えてるから。大切な友達だって思つてるから」

最後に聞こえた女性の言葉は、なぜかとても心に響いた。

「死なないで」

「…………！」

次の瞬間、真司の目に映ったのは、見たこともないような近未来的な都市だった。

## プロローグ 異世界からの誘い（後書き）

いかがだつたでしょうか。へたくそなのは仕様ですが、これでも精一杯書きました。

白い世界の男女はもちろん神崎兄妹です。最終回の描写はどうなつたのか微妙にわかりにくいのですが、この作品ではミラーワールドで真司達を見守つているという設定にしています。なんか色々強引ですが、よろしければこれからもお付き合いでいただけるととてもうれしいです。

## 第一話 理由なんでもいい（前書き）

い、いきなりお気に入り登録が10件以上…しかも評価してくださつた方まで！みなさん、本当にありがとうございます！  
感想などあれば気軽に寄せください。

## 第一話 理由なんでもいい

「……うへん」

気がついたら公園のベンチに座っていた真司は、とうとう街をうろついたながら、非常に困った顔つきをしてくる。

なぜなら、現在置かれている状況が完全に常識の範疇を振り切っているからだ。

よく周りの人から馬鹿だと言われる真司でも、周りの風景を見て明らかにわかることがひとつある。

「こりは、自分の知っている世界ではない」と。

建造物や道路など、様々なものが見たこともないような設計になってしまっており、技術も発展しているように思われるのだ。一目見て、こりが今まで自分がいた場所とはまったく違うとわかる。どうやら、あの不思議な兄妹が言っていた通りのようだ。

そんなわけで、今からどこへ向かおつかと考へる真司。さすがに手詰まりと言つにはまだ早いだろつ。

「……とりあえず、交番にでも行つてみるか。さすがに全世界共通であるよな、多分。… そうだ、ついでに日本のお金が使えるかどうか聞いてみよう…… 500円しか持つてないけど」

その後は、なんとか住み込みで働くところでも探そうかなと、己の懐の寒さを嘆きながらも珍しく社会人らしい堅実な思考をする真司。

……だが、こういう時に限つて、予想外の出来事が起きてうまくいかなくなるものだ。今回も、まさにそうだった。

ドガアアアアーン！－！

「つー？ な、なんだ？」

真司が交番の場所を聞こうと通行人を引きとめようとした瞬間、突如こうの方から爆発音が響いた。それを聞いた途端、周囲にいた人々が取り乱しながら音と逆方向へ急いで逃げ出す。

だが、いまいち状況が飲み込めていない真司だけは爆発音のあつた方へ走る。持ち前の好奇心と行動力が顔を覗かせた結果だ。

「すみません、ちょっと通して貰いたい、すみません」

必死で逃げてくる人々を押しのけ、流れに逆らいながら進んでいく。

「早く避難して貰いたい…早く…」

やがて、ひとりの少女が混乱している人々に避難を促している姿が見えた。年は真司より下のように見え、茶髪をツインテールにして、白を基調とした変わった服を着ている。

「つーそこで突っ立てる人…早く逃げて貰いたい…」

「え、俺？」

様子を探ろうとしている真司に気づいたその少女が大声で叫ぶ。

「なあ、ちょっと…一体なにが起じってるんだ？」

「どうやら事情を知ってるらしい少女に真司が呼び返すと。

「そんなこと説明してゐ暇はありません！危険ですか？とヒビ  
こかに行つてください！！」

さらに大きなボリュームで怒鳴り返された。なかなか逃げない真司  
にハイライドしているらしい。

そのとおり。

ドガアアアン！！

再び轟音が響き、同時に向ひの道の曲がり角から何かが飛んでき  
て店の壁に激突する。

「スバル！！」

少女が叫ぶ。よく見ると、今飛んできたのは……

「なつ……女の子……？」

あれだけの勢いでコンクリートの壁にぶつかったのに、その青髪の少女はまだ立ち上がる。たちこ、彼女の視線の先にあるものを田にして、真司は驚きのあまり声を失う。

「あ……あ……」

もはや何なのか想像もつかない、カプセルに似た円錐型の機械が複数、そこにあった。真司の中にわずかに残っている動物としての野生物の勘が告げる　アレはやばい、と。

「スバル！――くつ、とにかく、早く避難してください――！」

真司に対してもう告げると、茶髪の少女は機械の方へ向かっていく。あの青髪の少女の救援に行くらしい。そのものすごい身のこなしを見限り、彼女達は一般人ではないのだろう。

真司も未知のものへの恐怖と、このままで邪魔なだけだといつ気持ちから言われたとおり逃げようとする。

だが、その瞬間彼は見た。

自分と戦っている少女達の中間ほど、道路の隣に建つた店の入り口

でうすくまつて いる小さな女の子の姿を。目の前の事態に混乱しているのか、泣く仕草をしているだけで動く様子がない。そして、機械と戦う少女一人はそれに気づいていない。

「とにかく、早く逃がさないと！」

足は少しすくんでいるが、真司の決断は早かった。真っすぐに女子のもとへ走つて行く。

しかしそのとき、機械の内の一体の一部分が怪しく光る。次の瞬間、そこからレーザーが青髪の少女に向かつて撃ちだされた。

少女はそれをすんでのところでかわした。だが、レーザーはそのまま突き進んでいく　　泣いている女の子の方に向へ。

「……危ないっ！－！」

真司の体から冷たい汗が噴き出す。すでに彼は女の子に向かつて飛び込んでいた。

「おおおおおおおつーーー！」

必死の叫びの甲斐あって、真司の体はレーザーより先に女の子にぶつかり、ぎりぎりそれを回避した。人間、追い込まれると信じられない力を發揮するらしい。

「大丈夫！？とにかく一緒に逃げ……」

何が起こったのかわからないといった表情の女の子に呼び掛けているさなか、真司は飛び込んだ時にポケットから飛び出したものさつき渡されたカードケースを手にした。

「…………ねえ君、ひとりで逃げられる？」

真司がそう尋ねると、ようやく我に返った女の子は小さくうなづいて駆け出した。

「…………」

それを見届けると、真司はカードケースを拾い上げ、店のショーウィンドウの前に立つ。ウインドウに映る自分の姿を見て、考える。

(……どうして俺は、このケースの使い方を知っているんだ？)

不規則な息づかいをしながら、半ば無意識といった感じで、左手に持ったケースを前に出す。

すると、ショーウィンドウからベルトが飛び出し、真司の腰に巻きついた。

先ほどケースを見た瞬間、真司の頭に何かが流れ込んできた。……いや、正確には浮かんできたという方が適切だろうか。

ケースを見つめながら、真司は少しの間だけ目を閉じた。

(どうしてこんなものが存在するのか、どうして俺が使い方を知っているのか。理由は全然わからない)

だが、次に目を開けた瞬間、彼の瞳は決意の色に満ちていた。

(だけど、力があるのなら。何かを守れる力があるのなら、俺は迷わない!)

右腕を左斜め上に突き出し、真司は叫んだ。

「変身！！」

カードケースをベルトに差し込む。次の瞬間いくつもの影が現れ、真司の体でひとつになる。その影は色を帯び、強靭な装甲に変化していく。

「っしゃあー！」

氣合いの入った掛け声とともに、銀と赤で彩られた龍の騎士が今、異世界の地に誕生した。

## 第一話 理由なんでもいいでここ（後書き）

まず一言謝罪を。前回バトルやるとか言ひておきながら変身しかしてない……誠に申し訳ありません。なんか思つたより長くなつてしまつたのでここで一旦切ることになつてしまつました。次回は絶対バトルです。

ちなみに、なぜこの作品を始めようかと思つたか、最大の理由は同じく普通のヒーローとしての活躍をしてもらつたからです。いや、確かに本編でも大活躍でしたけど、やつぱり出る番組が龍騎じやなかつたら絶対もつと……だったと思つんです。もちろん、作者は龍騎のストーリーが大好きです。王蛇さんかけーです。ですが、だからこそひとつストレートな戦いならどうなるのか?と考えたわけです。

とこつわけで、よひしければ次回も読んでみてください。

## 第一話 行先は機動六課（前書き）

お氣に入り登録などしてくださった方、本当にありがとうございます。

感想などあれば、どんどん気軽に送っちゃってください。

## 第一話 行先は機動六課

「ティア、どうする?」

合計5体のガジェットを前にして、スバルはティアナに問いかける。

「……そうね、数が多いから、とりあえずは私の幻術で

「だあああつ……」

ティアナの作戦の説明は、ひとりの男の叫びとともに中断された。

「ティア、あれって一体……?」

「……私も知らないわよ、あんなの」

二人の言つ『あんなの』は、突然横からガジェットの一体に体当た  
りをかまし、そのままそれを押さえつける。

「ねえ、君達ー。」

「う、今の声、もしかしてわたくしの……」

全身を装甲で包んだその男の発した声を聞き、ティアナははつとす。

「話は後だーとにかく、この機械を倒せばいいんだよなー。」

「は、はい、そうですー。」

「じゅあ俺も手伝ひますー。」

ティアナの答えを聞いた男はガジェットを押さえこんでいた腕を放し、そのまま拳を叩きこむ。大きく後ずさつをするガジェット。どうやらかなり効いているらしい。

「す、すごい……ティア、の人と知り合いなの?」

攻撃の威力、そしてがむしゃらではあるが力強い動きを見て、スバルは感心する。

「さうき少し話しただけよ。それより、あんたここですかと突つ立つてるつもり?」

「あー、もうだたーよし、行こうトイアー!」

「ええー。」

そうして、一人の少女も戦闘を再開した。

左を一発。相手の反撃のレーザーを軽くかわして今度は右ストレート。

「うおりやああつー！」

最後に真司が渾身の力をこめた右足蹴りを食らわせると、機械は内部を破壊されその機能を停止した。

「しゃあー」

興奮して思わずガツッポーズをする真司。なぜかはわからないが、戦い方というものがなんとなく頭に浮かんでくるのだ。

「よし、次だ」

走って次の一体に一撃を加える真司。その際、向こうで先ほどの少女一人が見事なコンビネーションで戦っているのが見える。

しかし、その一瞬のすきを突かれ、近くにいた一体の機械のレーザーが真司の背中を直撃した。

「ぐわああつ！」

うつぶせに倒れこむ真司。だが、ダメージはそこまで大きくはなく、すばり立ち上がる。

「くそ、一体に手間取つてたらやられちゃうな……なら

そうつぶやくと、真司はケース カードテックから一枚のカードを取りだし、左腕に装備されている『龍召機甲ドラグバイザー』に差し込む。

## SWORD VENT

するとバイザーから電子音が流れ、同時に真司の右手に刀『ドラグセイバー』が装備される。

「はあっ！」

こちらへ撃ちだされるレーザーを避けたりドラグセイバーで弾いたりしながら機械の一体を斬ると、あまりの威力に一撃で相手の装甲が割れる。

「だああつーー！」

続いてとじめの一振りをお見舞いし、あつとこづいて機能を停止させる。少女達が相手にしているのを入れなければ、残りは田の前の一体のみだ。

「おひしゃああーーー！」

もう、勝敗はついたようなものだつた。先ほどと同じく強烈な切れ味を持つ斬撃を加え、機能を停止させる。

「はああ……ディバイイイン……バスター——！——！」

少女達の方を見ると、あちらも今戦闘が終了したところだつた。最後の青髪の子の強烈な拳の一撃を見て、真司は思わず少し身震いする。

「す、」「いなあ……女の子なの」「元の

そつそつぶやいてくると、向こうから少女達が駆け寄ってくる。

「あ、あのっ！」協力、ありがとうございました！――」

「あなたのおかげで、戦況を有利に運ぶことができました」

いきなりお礼を言ひながら頭を下げてきたので、真司は戸惑つ。

「いや、全然オッケーだから。というか俺が勝手に入つて来ただけだし、そんなにかしこまらなくていいって」

真司がそう言つと、一人はおもむろに頭を上げて、自己紹介を始める。

「私は時空管理局機動六課スターズ3、スバル・ナカジマといいます！」

「同じく機動六課スターズ4、ティアナ・ランスターです。…それで、あなたは一体何者なんですか？」

青髪の子がスバル、茶髪の子がティアナというらしい。そして、ティアナの方から質問を受ける真司。

……「これまで理由はわからないが、真司は今の自分の姿を表す名前を知っていた。

「龍騎。仮面ライダー龍騎だ。そして」

答えながら、真司はベルトからデッキを引き抜く。やがてすると装甲が消え、『仮面ライダー龍騎』は人間の姿へ戻った。

「本名は、城戸真司っていうんだ」

「おお～、すげー、本物のヘリコプターだ。俺乗るの生まれて初めてだよ。いや～、やっぱ生で見るとスケールが違うなあ」

先ほどの真面目な様子とは打って変わって子供のようにほしゃぐ真司を苦笑いして見るスバルと、無表情で眺めるティアナ。

あの後「ところどころはジクウカンリキヨクつてなにそれ？」などと真司が言いだしたため、先ほどの力のことも考え、彼は次元漂流者ではないかという結論がスバルとティアナの間で出た。そういうわけで、真司も連れて機動六課へ戻ることとなり、現在迎えのヘリが来ている場所まで移動したところだ。

「はじめまして、時空管理局機動六課スタートーズーの高町なのはです。あなたが城戸真司さんですね？」

ヘリに乗り込むと、ティアナよりも少し濃い茶色の髪をサイドボーダーにまとめた少女が、柔軟な笑顔で出迎えてきた。見た目から、ティアナやスバルよりは年上だろう。

「あ、ああ、うん。はじめまして」

席に座りながら真司が挨拶した少し後、ヘリは飛び立つて機動六課へ向かい始めた。

「先ほど何があつたかは一人から聞きました。私の部下の者を助けていただき、本当にありがとうございました」

「うわ～、やっぱり景色が全然違うなあ。まさに未来都市って感じ。そうだ、カメラで撮つとこ」

「こや、こやはは……詳しい話は、目的地に到着してからお聞きしますので」

聞こえていないだらうと思いつつ、窓に張り付いて景色を眺めている真司に向かつてそういう声がくるのははじめてだった。

なんやかんやで機動六課へ到着した真司は、途中でティアナやスバルとは離れ、なのはの案内で部隊長室へ向かうこととなつた。

「はじめまして。機動六課部隊長のハ神はやてです」

「同じく機動六課所属、ライトニングーのフロイト・T・ハラオウンです」

「私はライトニングーのハ神シグナムだ」

「スターズ2のハ神ヴィータだ」

部隊長室に入ると、早速色々な人から挨拶を受ける真司。ハ神という姓が多いが姉妹だろうか。それにしては似ていないうるような気がするが。

「いらっしゃいませ。はじめまして。俺は城戸真司。ジャーナリスト……っ  
て、この世界じゃただの無職だけだ」

まあ、そんな細かいことは置いといて、真司もとうあえず挨拶を返した。

「とうあえず、ここに来るまでの詳しい話を聞かせてもらひませんか？」

はやてがそう言つてきたので、真司は快くうなづく。

「もちろん。あ、でも話す前にひとつ。俺には敬語使わなくていいから、普通に話してくれないかな。堅苦しいのはあまり好きじゃないんだ」

「やあ、なら改めて。真司君、詳しい事情を説明してくれへん？」

「えっと、まずは口で

真司はここまでの大まかな出来事を説明した。

「なるほど。説明ありがとう、わかりやすかったわ」

「…まあ、あれだけ身振り手振りすりやあよくわかるよな

「その分よくわからない擬音語も入ってたけど。ビーンとかだーんとか」

はやての感想に、ヴィータヒフヒイトが小声でシッコむ。

「それで、俺は元の世界に帰れそうなのか？」

真司がそつ尋ねると、はやては小さく笑みを浮かべる。

「多分帰れると想ひ。今の話で出てきた地球の日本って、私たち住んだったところやからな」

「本当ー? よかつた~」

はやての答えを聞いてほっと胸をなでおろす真司だが、すぐに心にひっかかりを覚える。

あの白い世界の兄妹。あの一人の口ぶりから察すると、じいから元居た場所へはそう簡単には帰れないのではないだろうか？

(何か確かめる手段は……あつ)

そのとおり、真司は持つていてるバッグの中に入っているものを思って出した。

「はやて、ちよつと調べてほしこことがあるんだけど

「ん、何や?」

真司はバッグから取り出したものをはやてに渡す。

「それ、俺の名刺。隅の方に勤め先のOREジヤーナルってところの郵便番号と住所、電話番号が書いてあるだろ?はやて達の住んでた地球にそれがあるかどうか、確かめてもらえないかな」

はやはしづらかに名刺を眺めていたが、やがて顔つきを難しいものに変える。

「……いや、その必要は多分ないな。なのはちゃん、これ見てくれん」

「え？ 私？」

突然の指名に驚きながらも、なのははやての近くに移動して、真司の名刺を見る。そして、じりじりと急に顔色を変えた。

「これ、翠屋の郵便番号と電話番号だよ！」

なのはの言葉にはやて以外の全員が驚愕する。はやはやはぱりなところ表情だ。

「やつぱり違うものがあるのか？ 翠屋って一体……」

「翠屋っていうのは、なのはの『両親が経営している喫茶店の名前。もちろん、今も潰れたりせずに続いている』

真司の質問にフュイトが答える。

「ついでに言ひと、住所は全然違つとるんよ。翠屋は海鳴市にあるはずなのに、真司君の名刺に書かれてる住所には全く別の地名が書いてある。……郵便番号と電話番号が一致しているのに、住所は不一致。後で一応調べてはみるけど、まあ真司君の帰る場所は私たちの地球じゃないやうつな」

「私達の出身の地球以外で、『地球』って名称の世界は見つかっていないはずだし……今のところは元の世界へ戻る方法はわからないね」

「…………」

はやてとなののは言葉を聞いて、やはり簡単には帰れそうもないようだ、と真司は考える。

「まあ、氣落とさんでな。真司君の世界を見つけようと努力はするし、それまではさきうちとにかくで保護」

「あのや」

はやての言葉を途中で遮つて、真司は口を開く。

「俺も、はやて達に協力させてくれないか？今日みたいに役に立てるかもしれないし」

「…………え？」

真司のその言葉は予想外だつたらしく、はやては皿を丸くしている。

「真司君わかつとる？」この機動六課は危険な任務を請け負うことも多い。場合によつたら死ぬかもしれんのやで」

「……それでもだよ。俺さ、元々何でも首を突っ込まないと、気が済まないんだ。俺の力で誰かを守れるなら、それもいいんじゃないかつて」

真司はありのまま思つたことを告げる。そういうえば、白い世界の少女も同じようなことを言つていたような気がする。自分はすぐ首を突っ込む、と。

「せやけど、今日初めて戦つたんやろ？ そんな経験の浅い人間を使うわけにも」

「なら、私と城戸を戦わせてもらひませんか」

と、ここで名前を言つて以来一言も話していないシグナムが急に口を開いた。

「私といい勝負ができるほどであれば、経験を補うことのできる実力があると考えてもよろしいのではないですか、主はやて」

やつ詰るシグナムの皿はものすくべ燃えてくる。今すぐ戦いたくて「つかつかしてこらかのよつだ。

「……まつたぐ、しゃーないな。とつあべきみよかな

はやでもその熱意に折れて、肯定の意思を表した。

「とうわけだ、城戸。断りはしないだらうな。自分で協力すると書いた以上、怪我をかるのをことわりてこの返持ちはあるのだわい」

シグナムはまるで品定めをするような視線で真司を見る。

「……あの、もしかしてシグナムって

「お察しの通り、いわゆるバトルマーティセツナ

小声ではない元尋ねると、小声で返事が返ってきた。

「……

正直、シグナムの視線は結構怖いのだが、だからといってこの勝負、受けない理由はない。

「わかった、受けるよその勝負」

こうして、龍騎初の模擬戦が決まった。

## 第一話 行先は機動六課（後書き）

真司が馬鹿っぽく見えるのは仕様です。早くなのは達に真司がそういうやつだということを知つてもらいたいからです。

シグナムと模擬戦つてもはやテンプレなんじゃないかと思つほど多いパターンなんんですけど、この作品でもそういう流れになってしまいまいた。いやだつて未知の戦士と戦いたがらないシグナムなんてシグナムじゃないやい！

真司の他キャラへの呼称は悩んだのですが、もう一律呼び捨てでいいんじゃないかと考えました。真司は23歳なので。ただ、優衣はちゃんと付けで呼んでたんですね……でも「なのはちゃん」「スバルちゃん」「ティアナちゃん」てなんか嫌だ……ということです。何か意見があればよろしければ伝えてくれるとうれしいです。次回もよろしくお願ひします。

## 第三話 龍の騎士ＶＳ烈火の騎士（前書き）

模擬戦書く前に、とりあえず参考資料調べてたところ。  
Wのダブルエクストリーム… 80トン  
龍騎のドラゴンライダー キック… 300トン  
……え？

## 第三話 龍の騎士VS烈火の騎士

「どうしたんですか、八神部隊長？急に模擬戦場に来てだなんて」

はやての召集で模擬戦を観戦する場所に呼びだされたフォワード陣を代表してスバルが尋ねる。

「リインもお昼寝してたのに熙いです〜

はやてのゴービンクトバイス・リインフォース？は重そうなまぶたをこすりしている。

「何、おもしろい模擬戦が見られるから、みんなも呼んであげようかと思うてな

「模擬戦ですか？……でも、誰と誰が？」

「[J]にいなのはシグナム副隊長ですけど……」

はやての答えを聞いて、ヒリオとキャロは辺りを見回す。とそのとき、ティアナがあることに気づく。

「そういえば、さつきの城戸真司さんは……おなかー。」

「正解。今からやるのは、まあ入団テストみたいなもんやな」

はやてが悪戯っぽく微笑むと、フォワード陣は大いに驚く。

「い、いきなりシグナム副隊長と戦うんですか！？」

「しかも入団テストって……」

「城戸真司さんって、さつきスバルさんとティアさんが話してた……」

…

「……『仮面ライダー龍騎』というのに変身する人ですか？」

上からスバル、ティアナ、エリオ、キャロが言へ。

「あつ、一人とも出でてきたよ」

なのはが指さす方には、戦場に出てきた真司とシグナムの姿があつ

た。

「ま、お手並み拝見つてところだな

ヴィータが真司に視線を向けながらつぶやく。

「……でも真司、鏡貸してくれつてどいことなんだう

フェイトは、先ほど別れる前に真司が言つた言葉を思い出し、首をかしげていた。

「準備はいいか、城戸」

「ああ、多分ね」

向かい合う真司とシグナム。模擬戦とはいえ、互いの間にはピリピリとした空気が張り詰めている。

真司にとつては、機動六課に加えてもう一つためのテスト。

シグナムにとつては、未知の力を持つ相手との心躍る一戦。

譲れないものが、そこにあった。

「セットアップ」

シグナムの一聲とともに、彼女の体は甲冑に包まれ、レヴァンティ

ンは待機状態から騎士が持つ剣へ変化する。

「うわあ… すげえ強そう。でもいいで引こもるや男が廃るよな」

勇壮な姿のシグナムを見て、真司もフェイトから借りた手鏡を右手で持ち、それにカード「テッキ」を映す。そうすると、先ほどと同じようベルトが彼の腰に巻きつく。

手鏡をポケットに入れ、右手を左斜め上に突き出し、叫ぶ。

「変身…！」

「テッキ」をベルトに差し込み、真司はその姿を仮面ライダー龍騎へと変えた。

「ひしゃあー！」

気合いを入れる真司に、シグナムは好戦的な笑みを浮かべる。

「鏡を使つてとは不思議な変身だな。だが、そんなことよりもお前の強さに興味がある」

「……そつか。じゃあそろそろ」

『あ、ちよい待ち』

真司の言葉は、突然入ってきたはやての通信で遮られた。

『真司君、戦う前にビービーでも確認したことがあるんやけビ』

「え、何？」

『せつその腕をビックと伸ばすポーズには、なんか意味があるん？』

はやての質問の内容を聞いて、真司は首をかしげて頭を搔く。

「いや、特に意味はないんだけど、なんか気合いが入るかな～って思つて。結構かつこよくない?アレ』

『……ノリがいいんやな、真司君。質問は終わりや。始めてええよ』

何だか微妙な反応をして、はせでは通信を切った。

「…みし。では行くぞ、城戸！」

「ああー。」

^ SWORD VENT <

剣には剣だ。そう考え、ドラグバイザーにソードベントのカードを入れ、ドラグセイバーを構える真司。

「はあっー。」

「つおおつー。」

互いにに聞合ひを詰め、己の剣をぶつけ合へ。

キイン！キイン！

剣と剣が凄まじい勢いで交差する。両者相手の隙をついて一撃を与えようとするが、実力は拮抗しており、どちらも突破口を開けない

でいる。

ガキイインー！

力を込めた攻撃が激突し、剣のつばぜりあいとなつた。ここまで完全な互角。超一流の技量を持つた烈火の騎士に対して、龍の騎士は一步も引いていない。

「はあっー（……なるほど、いい動きだ。これで素人とはな……だがー）」

「ふつ……」

「おわつー？」

一回剣を引いたシグナムは、そのまま空中へと浮かびあがる。

「ちょっと待て！飛べるってずるくないー？」

真司は目の前の光景に啞然とし、思わず文句を言ひ。だが、シグナムはそれを氣にも留めない。

「レガランティンー」

「シゴランゲフォルム」

レヴァンティンがその形を剣から鞭のようなものに変へ、シグナムはそれを思い切り振りまわす。

「うわー、やばいーー！」

不規則に襲いかかってくる攻撃を必死に避ける真面。

「くっそ、あれ剣じゃなかつたのかよーー？」

どちらかのドラグセイバーには変形機能はない。やつなるといこのままでは真司の攻撃はシグナムに届かない。

「……なんとかしないと」

「……よつ避かとる。あれで戦つのが一回戻つてこつのが信じられへんな」

「まあ、空を飛ばれると辛いだろ？　ま、真司君は飛べないみたいだし。でも」

全員がその戦いで汗をかいていた中、フロイトがやけに汗をかいていた。

「……シグナムが押し始めたね」

なのはとはやてもそれぞれ感想を口にする。二人とも、真司の動きのよさに驚いているようだ。

「つてええー？城戸さんって戦いの経験の一回しかないんですね？」

何気なくはやでが言った言葉にスバルを始めフォワード陣はさらに驚愕する。当たり前だ。いくら見たこともないような力を使うとはいえ、素人のはずである人間が『あの』シグナムにここまで粘っているのだから。

「……だが、いくらなんでもそろそろ終わり……ん？」

「新しいカードを出しましたね」

真司が何かしようとしているのを見て、ヴィータとリイン・ガラフ言った。それを見て、場の全員が何となく感じる。

このままでは、終わらない。

^ GUARD VENT <

鞭となつたレヴァンティンが今にも真司に直撃するところを、電子音が鳴り響く。

次の瞬間。

「なつ……ーー！」

捉えた、と確信していたシグナムは田を見開いた。レヴァンティンは確かに直撃した。だがそれは突然真司の肩に装着された盾・ドラグシールドに、だつたのだ。その防御力に、レヴァンティンは空しく弾かれる。

だが、真司の反撃はまだ終わらない。

「よっしゃー！」

ドラグシールドに弾かれて勢いを失ったレヴァンティンを素手でつかむ。元は剣の刃だつたものだ、当然痛みは走るが、それくらい耐えなければこの勝負には勝てない。

「だありやあああ！……！」

渾身の力を込めて、真司はレヴァンティンを振りおろした。

「な、何つ……！」

鞭のようになれるレヴァンティンに振り回され、シグナムは地面へ叩きつけられそうになる。何とか力を込めて踏みどまるが、その位置はかなり地上に近い。

「うおおおおーーーー！」

そして、それこそが真司の狙いだった。重荷になるドラグシールドを捨てた後、ドラグセイバーを構え、体勢を整えきれていないシグナムに向かって真っすぐ跳ぶ。

「くつ……！」

それを見てレヴァンティンを剣の形に戻すシグナムだが、間に合わずに鞘で受け止める。

だが、苦し紛れの防御ではドラグセイバーの一撃は止められない。

「がああっ！」

強烈な衝撃によってシグナムは地面に背中から落ちる。数メートルの落下だが、それでもかなりの痛みが体に走る。

「今だー！」

それを見て、さうにたたみ込もうとする真司。

だつたが。

がつ

「あ、あれ……？」

真司は転んだ 何もないところで。要は足がもつれたのだ。なぜか非常にキレのいい体の動きに、頭が追いつかない弊害が今ここで出でてしまったのである。

そして、それを歴戦の戦士が見過ごすわけがない。シグナムは立ち上がり、チャンスとばかりに真司に突っ込んでくる。

「はああっー！」

「うわあ、ちよつ、くそー！」

真司もものすごい速度で復活すると、シグナムの猛攻を必死にしいで距離を取る。

「ふふ……面白い」

仕留めきれなかつたシグナムだが、その表情は心底楽しそうなものだ。

「自らが受けたダメージも省みないがむしゃらな攻撃……氣に入つたぞー私の必殺の一撃を撃とうー！」

そう言い終わると、シグナムはキツと今日一番の真剣な顔になる。それを見て、真司は本能的にやばいと感じじる。

「紫電……」

「（やばい、なんかでかいの来るぞー）」

今にも放たれそうなシグナムの大技に焦りながらも、真司はテッキからカードを一枚取り出し、ドラグバイザーに差し込む。

^ STRIKE VENT ^

真司の右手に、龍の頭を模した形のドラグクローナーが装着される。

「はああ…………」

真司が力を込めるにつれ、ドラグクローナーの口に炎がたまつていく。

「一閃……」

「おひや あああ……」

互いの技が同時に放たれた。凄まじい威力がぶつかり合い、二人ともじりじりと後ろに下がる。

そして。

「「うわああっ……」「

攻撃は相殺され、その余波で真司もシグナムも地面に叩きつけられた。

「　「　「　「　「　「　……」　」　」　」　」　」

観戦席では、あまりに白熱した真司とシグナムの戦いに全員が絶句していた。その間も、真司とシグナムは手をかすかに動かすだけで、なかなか立ち上がりがないようだ。

その様子を見て、はやてが言つ。

「両者ノックダウン……とこり」とせ、規定に従い先に立ちあがつて『優勝しちゃったもんね』と言つた方が勝者やな!」

「それ何の規定!? いつ決まったの!?」

「いや、ドーランつながりで、今

なのほのシックハリにも涼しい顔で答えるはやて。

「……テストなんだから、わざわざ勝敗をつける必要もないと思つけど」

フロイトがそう言つて、はやては笑いながら頭に手を当てる、

「はは、『冗談冗談。無理に一人を動かすような』とはせんつて。この勝負は引き分けや」

と言つた。

「す』い……シグナム副隊長と引き分けるなんて」

エリオが尊敬の眼差しで真司を見る。他のフォワードの人間も真司の戦いぶりに驚き、感心していた。

「あ～、シグナムに真司君？動けるよつになつたら夕食に行ひや

」

はやてがそう通信を入れると、一人とも手を挙げて「了解」の意を示した。

こうして、真司VSシグナムは引き分けに終わった。

## 第三話 龍の騎士VS烈火の騎士（後書き）

ふう……疲れたぜ……

読んでもらえればわかる通り、引き分けにしました。シグナムはリミッターかけるわけだし、真司も経験不足なんだし、これでちょうどいいんじゃないかと思います。今の真司は、戦いの記憶がありに体に残つており、それによつてうまく戦えているわけですが、それと戦いを思い出せない頭との間で違和感が生じて転んでしまつたという感じです。

さて、次回は真司が機動六課の仲間になれるかどうかの判定があります。まあ答えはもう出ているような気もしますが。

では、また次回。

## 第四話 改めてようじへー城戸真司です！

「おお……なんて豪華な料理なんだ…いただきまーす！」

スバル達に案内された真司は、現在食堂で夕食にありついている。周りの席にはスバルとティアナの他に、彼女達よりさらに年下に見える少年少女がひとりずつ座つていて、幸せそうにがつがつ食つている真司を見つめている。

「ところで、君達の名前は？」

それに気づいた真司が声をかけると、一人は緊張した様子で口を開く。

「は、はじめまして、ヒリオ・モンティアルです」

「キャロ・ル・ルシエです。それと……」

「キューーー。」

キャロと名乗った少女の後ろから小さな生き物が飛び出し、真司の方へ寄つていく。

「わたしの使役竜のフリードです」

フリードはうれしそうに真司の胸にくつこっている。

「く、くすぐったいぞ、かわいいなあここつ。ようじくな、エリオ、キヤロ、フローデ」

挨拶を終えると、真司は再び料理に手をつける。そのあまりの勢いに驚く四人。

「す、すいべおこしゃりに食べますね。言ひちや悪いですけど、この料理つて学食並ですよ」

ティアナが尋ねると、真司は少し照れて答える。

「いやあ、色々あつて朝も昼も食つてなかつたからさ。ところが、そもそもここしばらくまともな食事取つてなかつたからね。ほとんどインスタントだつたんだよ」

遅刻しけだつたために朝食を抜き、そろそろコンビニでお昼を買おうかなと思っていたところでミッドチルダに飛ばされた。そりで

そこから謎の機械 ガジェットというらしいが と戦い、その後シグナムと模擬戦。そういうわけで真司の空腹メーターはとっくに振り切っていたのだ。

「そりなんですか。でもそれならちゃんとした食事を取ればよかつたのに」

「そういうわけにも行かなかつたんだよ。金欠でアパートの家賃も滞納してたし、そろそろ追い出されるんじゃないかとびくびくしてたんだ。いやー、社会の厳しさが身に染みるよ」

「……大変でしたね」

大人の生活の辛さを聞かされ、同情するエリオ。

「でも、本当は無職だつたところを大学の先輩に拾われたんだからまだマシなんだけどね」

「へえー、優しい先輩ですね」

真司に負けじと料理にがつつきながらスバルがそう言つ。

「うーん、まあいい人なんだけど、ちょっと変わってるんだよね」

それから話は編集長である大久保や仕事仲間についてのものとなる。異世界なのをいいことに少々脚色したエピソードはフォワード陣に好評だった。少なくとも、シグナムとの模擬戦のことを聞こうと思っていたのを忘れてしまつほどには。こうして、真司はすっかり彼女達と打ち解けたのだった。

「さて、全員そろったところで、本題に入ろか」

夕食後、部隊長室に再び集まつたのは、フエイト、はやで、シグナム、ヴィータ。話す内容はもちろん、城戸真司についてだ。

「シャーリーの解析によると、先ほどの模擬戦で真司君 龍騎からは魔力反応はなし。あの力は魔法以外の何かで動いとるってことやな」

全員が黙つて聞いている中、はやは話続ける。

「そして、それを魔導師ランクで表現するならAAAクラス。さらに最後の一撃の時はAAA?にまで達したらしい。シグナム、戦つた感想は？」

「……強いですね。動きはまだまだ未熟な点も多いですが、十分に戦えるレベルです。戦力としては申し分ないと思いますが」

シグナムの言葉に、一同はうんとうんとうなずく。観戦していた側にも、真司の強さは伝わってきていた。

「戦闘能力に関しては問題なし。次に人間性についてやけど……のはちゃん、どう思う?」

とりあえず一番近くに立っているのはに尋ねるはやは。するとなのはは顎に手を当てながら答える。

「うへん、誠実そうで、いい人だと思つんだけじ……なんて言つ  
か……」

「なんて言つが、何や?」

「……ちよりと、おつかれさうい？」

素直になのはが思ったことを口にするとい、色々なところから賛同の声が。

「あ、それあたしも思った。なんかよくわからねえけど馬鹿だよな、あいつ」

「……確かに、ちょっと間が抜けたそつだね」

「私と戦っている時も突然何もなこと」で転んだからな。あれには驚いたぞ」

「私もなのはちやんと同意見やから……真司君=馬鹿、つてことで決定やな」

全会一致。本人が見たらもしかしながら絶対泣くだらつ。

「でもまあ、それもチャームポイントってことで。基本は信用でき  
そうな人やから、仲間に加えても問題ないと私は考えとるんやけど。  
誰か異議がある人はおらん?」

はやてがそう言つと、皆が彼女を見つめ、無言で賛成の意を示す。

「よし!決まりやな。真司君は民間協力者として、今から私達機動  
六課の一員や!」

これで少しだけ男女比が改善されたなどと考へながら、はやては宣  
言した。

一方その頃、話題の人物はと言つと。

「…「つ~ん、むにゅ~むにゅ……くか~」

部屋に案内され、とつぐに眠りに落ちていた。ちなみに、故郷の地

球を想つた時間、わずか9・8秒。余程疲れがたまっていたのか、それとも神経が図太いのか。

とにかく、じつじて城戸真司の異世界初日は終わりを告げた。

翌日。

「えへ、というわけで、訓練の前に今日から民間協力者として私達に協力してくれることになった、城戸真司君から一言じ挨拶をいただこうと思います」

フォワード陣の訓練前に、一同が集まって真司に注目している。

「えっと……改めて自己紹介しますが、城戸真司、23歳です。今

朝みんなの仲間として迎えてもらえたことを聞いた時は、とてもうれしかったです。こんなたくさんの美人に囲まれてるし

真司の発言に少し照れる女性陣。中には笑っていたり、無表情なものもいたが。

「ところわけで、これからよろしくお願ひします」

挨拶が終わると、ぱしづぱしづと皆から拍手が送られ、真司は照れる。

「よしひー・じやあ始めよ!つか!」

「　　「はいっ……」」

その後、なのはの言葉にフォワードの四人は元気に返事をして、これから訓練を始めるようだ。

「じゃあ俺は見学でも……」

「何を言つている城戸。お前は私と来るんだ」

「……へ？」

暢気にしていた真司に、突然シグナムから声がかかった。

「突然転んだりするのは鍛錬が足りない証拠だ。これから毎日、私がみつちり鍛えてやるからな。そしてまた本気の力をぶつけ合おう！」

シグナムの目は恐ろしいほど爛々と輝いている。真司と戦つのがそこまで楽しみなのだろうか。

「いやいや待つてー俺昨日までただの社会人で、鍛錬とか急に言われても……」

「その点はちやんと考えてある。安心しin、今日は控えめに……30kmマラソンだけで許してやる！」

「全然控えめじゃないんですけどーそんなことができない……って引っ張らないでうわあああ……」

ずるずるとシグナムに引っ張られていく真司。

「あ～あ、シグナム燃えとるなあ」

「剣も使ってたし、自分と同じパワー型の人と出会えてうれしいのかも」

真司の断末魔を聞きながらはやてとフロイトがつぶやく。

二人とも、全然真司を助けようとはしなかった。

#### 第四話 改めてよむつへー城下真司ですー（後書き）

真司のこれからが苦労が思いやられる……自分で書いたんですけどね。ちなみに時期的にはホテル・アグスタの警備のちょっとと前です。皆のトラウマ、白い魔王様の降臨を真司は防げるのか！？感想とか評価とかあれば気軽にお寄せください。ひとつでもくればとても喜びます。

では、また次回。

## 第五話 猛特訓と重なる影

「ふ〜、毎度毎度のことだけなのはさんの指導はきついな〜」

「…でも、基礎だけじゃなくて少しだけでも実戦向きのこととも教えてくれないかしら」

「キャロ、今日の動きよかつたよね」

「え？ そ、 そうかなあ。 ありがとう、 ハリオ君」

午前の訓練を終え、昼食を取つているフォワード一同。 口々に言いたいことを話しあつていて、ふらふらとこちらこちらにやつてくる男性がひとり。 精根尽き果てた様子のその男は、ぐつたりとハリオの隣の席に倒れ込むように座り、机に突つ伏した。

「…えつと、 真司さん？ 大丈夫……には見えないですね」

エリオがその男 城戸真司の顔を覗き込むように見ながら声をかけると、真司は首をガガガと機械のように動かして答える。

「…………死ぬ。 マジで死ぬ。 ジャーナリストは足が命だけどそういう

「うレベルじゃないよあんなの」

それはまさに消え入るような声で、それを聞いた者に彼の受けたダメージをわからせるには十分すぎるものだった。

「……確かに、シグナム副隊長に訓練を受けていたんですよ。なんか想像できるなあ、あの人の鬼特訓」

「……本当にひどいよあれは。ペースが落ちたら容赦なくしばいてくるんだぜ？もう食事ものぞに通らないよ…………」

スバルの言葉を聞いて、真司はさらに愚痴る。というか、初日から30km走れという無茶な注文をつけられた挙句、無理だと言うと「プロのマラソンランナーは女性でも42kmを3時間以内で走るんだ。なら一日かければお前にもできるはずだ」などという無茶な理論で返されるのだから、真司としてはたまつたもんじゃない。

そんな感じで、スバル達が食事を終えて食堂を出していくまでの間、真司はずっと机に顔を乗せてぐたりとなっていた。

「城戸、そろそろ行くぞ」

そして、シグナムからの地獄への誘いがやつて来る。

「……まだやるの? もう一〇km走ったんだし、今日せ」のくらいで……」

弱気な態度の真司に対し、シグナムははあ、とため息をつく。

「……なるほど。確かに、主はやての提案に従つた方がよさそうだな。城戸、走る前に少しだけフォワードの訓練を見学するぞ」

「え……?」

「……………」

真司は、田の前で繰り広げられる激しい訓練に田を疑つた。

「彼女達は毎日あの訓練をこなしている。それぞれの目標に向かつてな」

シグナムが真司に語りかけると、彼は彼女の方を振り返り、口づけ言つた。

「……自分より年下の子があんなに頑張つてるのに、俺がへこたれちゃ駄目だよな。やるよ、あと20ヶ月」

先ほどまでのやる気のない表情から、真剣な顔つきに変わっている。

「 な、行ぐぞ。ついて来い」

真司を従えて歩きながら、シグナムは改めて主である八神はやての的確なアドバイスに感心していた。

『 真司君みたいなタイプなり…………年下の子が頑張つてねといふも見せたらやる気出すと思ひけどな』

面食でのせかでのせこつより抜粋。またこその通りとなつた。

「 ……はあ、はあ、はあ、……は、走りきつたぞ……

もう夕方にならうかとこゝでよつやく30kmを走破した真司は、その場にぐつたりと倒れ込んだ。それを見て、シグナムは満足そうな表情をする。

「午後は精を出して頑張っていたな。明日からは走る距離を半分にする代わりに、私との組み手をするぞ」

「……はは、厳しそう。でもまあ、一応よろしく」

疲れ切つた様子で乱れた呼吸をしながらも、真司は笑顔でそう言った。

「…………その意気だ」

それを見て、シグナムも少しだけ微笑んだ。男性のそんな顔を見たことがなかつたので、少し戸惑つてはいたが。

「悪いね、俺の買い物の手伝いしてもらひやつて

多くの人々が道を行き交つ中、真司はスバルとティアナにお礼を言  
う。

「いえ、あたしは街に出るの好きですか？」

「上から命令なので仕方ありません」

スバルは楽しそうに、ティアナは素つ氣ない態度で答える。

どうしてこういう状況になつたかといつて、簡単にいえば真司の服  
の数が足りなかつたからである。ここに来た時の服と、機動六課に  
余っていたランニングシャツとジャージだけでは何かあつた時困る  
のではないかということで、はやての提案で服を買いに行くことに  
なつた。

真司はもちろん道などを知らないため、スバルとティアナが派遣さ  
れたらしきが、もしかすると毎日厳しい訓練をしている彼女達を休  
ませる意味もあつたのかもしれない。

「それにしても、ミッドチルダに来てから驚く」とばかりだよ。  
…これを記事にできたら大スクープなんだけどなあ」

「馬鹿新人から脱出できる、ですか？」

真司のつぶやきにスバルがそう返す。真司の仕事については、先日本人から聞いているのだ。

「でも、真司さんが怒られてる様子って想像できるような気がしますね。結構あっちょこちょいみたいだし」

「…え！？もしかして俺って会って数日の人に簡単に見破られるくらいわかりやすい馬鹿なのか？」

ティアナの言葉にショックを受ける真司。

「……まあ、そうですね」

「びつかとこうと馬鹿っぽく見えますね」

さらりと厳しい評価をするスバルとティアナだった。

「あ、着きましたよ。こじが『パートですから、大体のものはあるでしょ』

スバルを先頭にして『パートに入り、一同は男性用の服売り場へ向かう。ちなみにお金はそこそここの量を預かっている。

「いっぴあるな～。とりあえず色々見てみるか」

数分間その「一ナード」を歩いた後、真司はシャツとジャージを一着ずつ手に取る。スバルとティアナやそこらを歩く人の服装を見る限り、センスは日本とさほど変わらないようだ。

「これなんてどうかな?」

「あつ、いいんじゃないですか?似合ってうますよ」

「別に構わないんじゃないですか」

一人に尋ねるとO君が返ってきたので、真司はレジで会計を済ませる。

「二人も折角来たんだし、何か買つたらどうだ？」

「……ん~、それもそうですね。じゃあ新しい服でも買つちゃおつかな？」

真司の言葉にスバルが賛成したので、三人は続いて女性用のコーナーへ移動する。

「それでは行つてきまーす」

スバルは服を探しに行くが、ティアナの方は真司と一緒に立つたままだ。

「あれ？ティアナは行かないのか？」

「お金は計画的に使う主義なので」

にべもなく答えるティアナ。計画的というよりは、元々服とかはあまり買わないタイプなのかもしねり。

「ふうん……あ、俺ちょっとトイレ

そう言って、真司は走って行ってしまう。

「ああっ、トイレスは逆 行っちゃった」

やっぱりおっちょこちょいだなと感じながら、ティアナはそのまま立つて待っている。

数分後。

「ティア～～！」

スバルが服を買って帰ってきた。

「あれ？ 真司さんは？」

「ああ、あの人なら

「

「お待たせ～」

トイレに行つてたぶん迷子、と言おうとしたところで本人が戻ってきた。

「あ、真司さん…ちゃんとトイレには行け

」

「はいティアナ

唐突に何かが入った袋を差し出す真司。

「え? こ、これは……」

「ひとりだけ手ぶらで帰るつてのもあれだろ?だから、俺からのプレゼント

ティアナが中を見ると、白いワンピースが入っているのが見えた。驚いて真司の顔を見ると、彼はニカッと明るく笑っていた。

「ひーー。」

その笑顔を見て思わずはつとするティアナ。

「あ～！いいな～ティアだけ。真司さん、私の分は？」

「たはは、『じめん』じめん。ティアナの分買つたらお金無くなつちやつてさ」

スバルが文句を言ひ、真司は申し訳なさそうに頭を搔いている。

「えつと、それで、氣に入つてくれた？」

恐る恐る真司が尋ねてくる。選んだ服に自信がなかつたのだろうか。

「……も、まあ…ありがとうございます」

そつまを向いて、どもりながらティアナは答えた。それを見てにやにやするスバル。

「あ～、ティア照れてるー！」

「なつ……」

「えつ、やつの?」

たじろぐティアアナに追い討ちをかけるように無意識に質問する真向。

「ち、違こますよーまつたく、真向わざはやつぱり馬鹿ですー。そこのバカスバルと一緒にでー。」

「がーん!年下の女子に面と向かって馬鹿って言われた…………」

「どこつかあたしもまあやつこやのよひになじりねーる……ひどいよ~」

小さな子供のよひすねる真向とスバルを見てため息をつくティアナ。

「つたく……あんな人の笑顔が、ビ�して少しだけ重なったのかしら」

## 第五話 猛特訓と重なる影（後書き）

ティアナにフラグ……ではありますんが、何となくティーダと重なる要素が真司にあるということにしました。とはいっても、真司とティーダの性格は全然違うと思われますが。

## 仮面ライダー 龍騎設定

今夏休み明けの試験に備えて勉強中なので執筆ができません。なので、この際説明し忘れていた龍騎の設定について書いておこうと思います。

城戸真司……本編最終回後の戦いの記憶を失った状態。だが真司は真司なので、当然性格は本編の龍騎として戦った真司と同じである。24歳。

仮面ライダー 龍騎

基本能力は変わっていないので、所持カードのみ説明。

ADVENT……ドラグレッダーを召喚する。

SWORD VENT……ドラグセイバーを装備する。

GUARD VENT……ドラグシールドを装備する。

STRIKE VENT……ドラグクローラーを装備し、ドラグクローラー・ファイヤーを発動。

FINAL VENT……ドラゴンライダーキックを発動する。

STRANGE VENT……その場に最も適したカードに変化する。

## 白黒の絵のないカード×2

とりあえずこんな感じです。絵のないカードはまだ使えません。なんでカードが全部ないのかという疑問の答えとしては、時空の乱れが起きたのが突然だつたため、神埼の用意が間に合わなかつたら、ということにしています。今のところはノーマル龍騎のカードにストレンジベントが加わつただけですが、このカード相当使えるのでまあいいでしょう。

## 第六話 やれば生物物といつて当然の「」

「ん、いつかな……こや、ひょっとして「」……？」

通路を歩きながら、真司は首をかしげて腕を様々な方向に動かしてい。先ほどシグナムとの組み手での動きを思い返しているのだ。

すると、向かいのHツホとキャロが言葉を交わしながらやつて来るのに気づく。

「よひ、Hツホ、キャロ。訓練の帰り？」

「あ、真司さん。はい、いつものように「」かれできただといひです」

「真司さんも、シグナム副隊長との訓練が終わつたといひですか？」

真司の質問にHツホが答え、キャロが「」聞き返していく。

「ああ、「」ちも相変わらずの鬼特訓だよ。……ま、力がついてきてるのは確かだとは思ひけどね」

シグナムによる鍛錬も、今日でちょうど一週間。ここまで走り込みが中心だったが、明日からは実戦での動き方などに重きを置いて教えるらしい。この際剣技についても鍛えてもらおつかと考えている真司である。

「キノル——！」

「おねつー。」きなり飛び込んでくるなよフロー。せり、よしお

- - - - -

キヤロの周りを飛んでいたフリードが急に胸に突っ込んできて真司は驚くが、すぐに笑顔でその頭を優しくなで始める。

「ふふ。フリーードは真司さんが大好きみたいですね」

「いいな、僕なんて結構長い付き合いなのにそこまで好かれてないですよ……懐かれる秘訣とかあるんですか？」

エリオは羨ましげに真司とフリードのじやれあいを見つめている。

「うん、動物の好みとかはわかんないけどな」

真司が首をかしげるが、キャロはエリオの方を見て微笑む。

「真司さんはエリオ君にも懐かれていますからね。そういうオーラを持つてるのかもしませんよ？」

「そりなのかも……って僕はフリードと同格なの！？一応人間なんだけど……？」

キャロの言葉にすかさずツッコむエリオ。

「えっと……といつかエリオって俺に懐いてたの？」

全然知らなかつたというような表情をする真司。確かに食事の時によく話すが、それはスバル達も同じことだ。向こうが気を利かせて自分を輪の中に入れてくれているのだと考えていたのだが。

「それはそうですよ。最近のエリオ君の話の内容の40%が真司さんのことですから」

「あはは……だって、僕の周りは女人が多いから……」

エリオは照れくさそうに頭を搔ぐ。つまり、珍しく男の知り合いが

できとうれしかったところだとわい。

「なるほど、そういうことか。確かに女の子にばっかり囲まれてたらな。しかも勝気な娘が多いし。ま、男同士でしか話せないこともあるだろ？ その時はいつでも相談してくれよな」

真司はやつを聞いて、エリオの頭を軽くする。

「……まあ、はいっ、ありがとうございます」

すると、エリオはぱあっと笑顔になつてお礼を言った。

向こうに歩いてこへエリオとキャロの後ろ姿を見送りながら、真司は思つ。

「…………そうだよな。あの一人、日本じゃ小学校に通つているよつた年頃なんだよな…………俺も頑張らないと」

「はやて、いる？」

それから30分後、真司は部隊長室を訪れていた。思わず人物の登場に、椅子に座つてペン回しをしていたはやは驚いた拍子にそれを落とします。

「ああっ、折角新技が完成しつつあったのに……あああ……」

…

まるでこの世の終わつともいひきはずーんと沈み込むはやは。何故だか彼女の周りに土砂降りの映像が浮かび上がつていて、真司には見えた。

「あ、あの……なんか、空氣読めなくて！」めん

とつあえず真司が謝ると、机に突っ伏していたはやてもゆづくつと頭を上げる。

「……それで、わざわざこの絶妙のタイミングで来たつてことは、当然それなりに重要な話なんやろうな？」

氣のせいだらうか。はやは笑つているはずなのに、その背後にどう黒いオーラが漂つっているのは。

その雰囲氣に氣圧された真司は、思わず声が震えてしまつ。

「こやその、大した」とじやないんだけど……

「…大した」とじやない？ほへへ？

「つて違つ違う！大事な話なんだ。龍騎にも関係があることだぞ」

「龍騎？……話しあみ」

真司のその言葉を聞いた途端、はやての顔が真剣なものに変わる。

……さつきまでも違う意味で真剣だつたが。

それを見て少しおもひとした真司は、先ほどあつた出来事を話し始めた。

「ふうへ、せつぱりしたへ

トイレで小便を終えた真司が手を洗おうと洗面台の前に立つと、突然耳鳴りが襲ってきた。

「つーな、何だ……つて、お前は……！？」

目の前の鏡に、巨大な赤い龍の顔が映っていた。一瞬面喰つた真司だが、恐怖は感じなかつた。ずっと前から、この龍を知つてゐる気がしたのだ。

「ドラグ……レッダー、だっけ？」

真司がやつ言ひと、龍は首を小ちく縦に振る。じつやひ匂こじらかし  
い。

「……それで、何か用か？」

そう聞いたといふ、ドラグレッダーは無言で、微動だにせずにちら  
を見つめる。

すのと、向となく真司こな言ひたことが分かつたよつた気がした。

「 腹が減つた、だつてさ」

ズテン、とはやてが椅子から落ちる。

「ちよい待ちーこきなり謎の龍が出でてきておどりなると期待させ  
とこてそのオチはないやうー?」

「いや、オチとか言われても…別に事実を話してるだけだし」

はやてのたたみかけのよつなシッコリ困惑の真司。はやてははあ、  
とため息をついて彼に尋ねる。

「大体、そのドラグレッダーって何者や?それに餌は何やればいい  
ん?」

「ああ、それは今から話すよ。ドラグレッダーっていうのは、簡単  
に言ひと龍騎の力を『えぐ』てくれる契約モンスターなんだ」

「……そなものがおるつて…やつぱり龍騎絡みは謎だらけやな

真司の話に素直な感想を述べるはやて。

「それで、餌についてなんだけど……魔力が欲しいらしいんだ。だからその……分けてくれないかな」

手を合わせてお願いする真司。それを見て、はやはては少しだけ考えて答えた。

「ま、とりあえず必要な量を調べてみんとな。今から私が魔力をあげるから……と言つても、どうやって鏡の向こうのドラグレッダーに届ければ……」

「ああ、それなら」

真司はポケットからカードデッキを取り出し、はやはてに差し出す。

「ここに流し込んでくれればいいってや」

「わうなん？じゃあ早速やつてみるわ」

「あつがとう、助かるよ」

真司がそう言つと、はやはてはカードデッキを持った右手に魔力を込め、それをデッキに注ぎ始めた。その手とデッキが光る神秘的な様

子を、真司はじつと見つめる。

と、じぱりへした後、部屋にあつた手鏡から耳鳴りが聞こえてくる。

「あ、はやて、もうこいつでさ。これをたまにやつてくれたら十分なんだけ……大丈夫?」

真司が聞くと、はやては少し笑つて答えた。

「ここのくらいでええんなら、またく問題ナッシングや。私、魔力の量だけなら馬鹿でかいから」

「やつか、じやあこれからもよひしへ頼むよ」

「その代わり、シグナムの特訓頑張つてな。鍛えがいのあるやつが来たつて喜んでるから」

「やつがそういふと、真司は苦笑いをしながらもつねづね。

「はは、まあ期待に応えられたみたいであるよ。それじゃ、ありがとうな」

セツヒに残して、真司は部隊長室を出て行った。

ひとりになつたはやでは、小さくしぶやく。

「…………元気やな、真司君。こきなり異世界に放り出されたつてい  
うのに、前向きに頑張れるなんて。…………私も負けられない。と  
りあえず、この書類の山を片づけるとしますか」

ペンを手に取り、やる気を出して仕事に取りかかるはやでだった。

## 第六話 それは生き物として眞然の「」と（後書き）

明日テストなのに書いてしまった……これから地獄です。でも来週からのオーズに期待を込めてそれを糧に頑張ります、多分。

今回ドラグレッダーの餌の問題を解決しました。とりあえずこれでいいと思います。次回はおそらくホテル・アグスターの話に入れると思っていますので、よろしくお願ひします。

感想などあれば、気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第七話 ホテル・アグスタ前篇（前書き）

ここからようやく原作の話に入ります。

## 第七話 ホテル・アグスタ前篇

「はあ……」

『ホテル・アグスタ』という日本でたとえるならロイヤルなんとかと名前がつくような大きなホテルの近くで、真司はため息をつく。

今回の、そして真司にとっては初となる機動六課の任務は、このホテルで出世をされる『ロストロギア』なるものの保護らしい。

ロストロギアといふのは……失われた世界の技術だとか何だとかで、下手をすれば世界ひとつ滅ぼせる……要するにヤバいものだ、と真司は認識している。本当はもっと詳しくはやってから説明を受けたのだが、難しくて忘れてしまった。

そういうわけで、真司となのは、フェイト、はやてがホテルの中に潜入り、残りのメンバーが外の警備を行うことになったのだが。

「……やっぱりこりこりのは慣れないな」

黒のスーツを堅苦しそうに身に附けている真司。ため息の原因はこれだ。彼の生活および性格上、こんな真面目な服装はお手上げなのである。

それでも、任務ならば仕方がない。何とか身だしなみを整え、ホテルのロビーに入る真司。確かにここでなのは達がいるはずだが……

「あつ、真司君。」つちだよ~

「あ、そっちか。」めん、ちょっと手間取っちゃっておおう

……

後ろからなのはの声が聞こえたので振り返った瞬間、真司の動きが止まつた。

目に入ったのは、もともと端正な顔つきをしている少女達が、綺麗なドレスを身にまとっている姿。

たら~と、鼻から口に何かが垂れる。

「真司、鼻血出してるよ~

「う~あ、いや、これはその……」

フュイトの指摘で顔を真っ赤にした真司は、あわててティッシュを取り出して鼻を押さえる。

「あはは、真司君つぶやな～」

そんな彼の様子を見てはやでが面白そうに微笑み。一応真司の方が年上なのだが、彼女が彼をからかつたりするのもよくあることだ。

「だ、だつてさ、3人ともあんまり綺麗だから、思わず見とれちゃつて……俺の体は正直なんだよ」

「……なんか、やつストレートと言わると少しつらくな

「いやはは……ありがと」

「……真司も、似合つてるよ」

が、今回は真司の無意識なカウンターが決まつたらしい。はやてもなのはもフュイトも、彼氏などというものは持つたことがないため、いつも言葉は効果できめんなのだ。

しばらく後、4人は一手に分かれ、オーラクションの警備を始める。真司はフェイトとともにあわいひらを徘徊中だ。

「もう、六課の生活には慣れた?」

「ああ、訓練の方も大変だけど充実してるし、みんなとも仲良くなつていけると思つし、いまのところは問題ないよ」

真司の返答を聞いて、フェイトは安心する。新しい仲間は、この場所に順調に溶け込んでいるようだ。

「シグナムの指導ってどんな感じなの?」

「鬼だけど、丁寧に教えてくれる」とは確かだなあ。……たまーに

めちゃくちゃな根性論を叩きだしていく」とあるけれど、「

「やつなんだ、あはは……（それってもしかして……）」

先日、はやてが笑みを浮かべてシグナムに渡していた『熱血一男の鍛え方とは』とかいうタイトルの本を思い出し、苦笑いするフード。

今だからわかる。あの時はやての笑みは『黒』だった。

「あ、やつやつ。おとどにはザフイーラと一緒に朝まで飲み明かしだんだよ。男同士、すっかり意気投合しちゃってさー。ザフイーラは一日酔いしちゃったみたいだけぞ」

「昨日ザフイーラが気持ち悪そうにしてたのはそれが原因だつたんだね……」

どうりで理由を聞いてもあいまいな返事しかしなかったわけだ。酒を飲みすぎたなどとは恥ずかしくて言えなかつたのだつ。

といつも、真司はいつの間にザフイーラが人間の姿になれると思つたのだろうとフロイトは疑問を覚える。

「それにしても、ヒリオとキャラつて仲いいよな。将来結婚しちゃつたりして」

「それは私も思つた。本当にこつも一緒に感じだよね」

楽しそうな表情で語る真司にうなづいて、フェイトも自然と笑顔になる。

普段、真司はフォワード陣と一緒に食事をとつたりしているため、フェイトはあまり彼と話す機会がなかった。一対一で話したのは、今日が初めてだ。

それで、改めて感じたことがある。それは、真司が本当に気さくだということだ。これなら、10日ほどでみんなと仲良くなっているのも当然かもしれない。

「ミニュニケーションがあまり得意ではないフェイトとしては、城戸真司という人間のすごさを見たような感じがしたのだった。」

ホテルの外の警備に当たっているティアナ・ランスターは、機動六課の人間のことを考えていた。

高町なのはは、時空管理局のエース・オブ・エースの異名を持つ実力者。フェイト・T・ハラオウンは、魔導師としての実力もさることながら、執務官としての仕事も上手にこなしている。八神はやは、SSランクの上、4人の守護騎士まで従えている。

自分と同じフォワード陣に目を向けてみると、スバル・ナカジマは訓練校を首席で卒業。エリオ・モンディアルは幼いにも関わらず陸戦Bランクで、キャロ・ル・ルシエは竜操ることができたアスキルを持っている。

そして、少し前にやつてきた、次元漂流者の城戸真司。

謎の道具で『仮面ライダー龍騎』なるものに変身し、戦闘2回目にもかかわらずシグナムと模擬戦で引き分けるほどの実力の持ち主。

しかも、ひとりで異世界に迷い込むなんて心細いはずなのに、この10日でどんどん六課のメンバーと親交を深めている。

自分を含むフォワードのメンバーとはよく一緒にいて話している。なのはとは、よく喫茶店とか料理とかの話をしている。はやてにはよくからかわれているようだが、それも仲がいい証だらう。

シグナムとはいつも訓練をしてもらっていることもあって会話が多く、その鬼訓練によつてできる傷を治療してもらう関係でシャマルともよく会うらしい。ヴィータとはこの前なぜかアイスクリームを取り合つて大乱闘を繰り広げていたし、ザフィーラとも一緒に酒を飲む仲のようだ。

なぜこんなに詳しいのかといふと、スバル達がそういう情報をたくさん持つてくるからだ。なので、嫌でも耳に入ってしまう。

そういうわけで、ティアナは真司に他人にはない何かを感じてい

た。普段は馬鹿っぽい言動が目立つのに、戦闘になると実力は確かなのだ。

「ここまで考えて、気づく。

結局、何も取り柄がないのは自分だけなのだ、と。

「（……でも、そんなこと関係ない。私は今まで通り、私の……兄さんの力を証明するだけよー！）

拳を握りしめる力を強めながら、ティアナはそう強く想つのだった。

## 第七話 ホテル・アグスタ前篇（後書き）

オーブ！オーブ！オーブ！オーブ！  
やべえ、映司かつこいいよ映司。真つすぐすぎるよ。4話でもまた  
熱いセリフが聞けそうです。今回のキックもかつこよかつたですし  
(不発だっただけど……)

さて、いよいよホテル・アグスタの話に入りました。ティアナの苦  
惱、そして彼女を教える立場のなのは、真司には何ができるのでし  
ょうか。とりあえず次回は龍騎がいつぱいカードを使います。

感想とか評価とかあれば、いつでも気軽に寄せください。ひとつ  
でももらえばヤツフーーーーです。  
なんかいつのまにかはやてのキャラが変な方向に進みつつあります  
が、大丈夫でしょうか……なんて考えながら、次回に続きます。

## 第八話 ホテル・アグスタ後篇

真司達がおしゃべりしながらもホテル・アグスタを警備している時。

そこから少し離れたところに、大柄な男と小さな少女がいた。

少女の周りには、小さな虫が飛び回っていて

さうしてその向こうで、たくさんの機械　　ガジェットの群れがいた。

戦いが、始まる。

ホテルの周辺に、大量のガジェットが出現した。

外ではすでに戦闘が開始しているという情報が、ホテル内にいる真司達にも入ってくる。

「フェイト、オークションの方は頼む！俺は外に行くから！」

こういう時、助けに行かずにいられないのが城戸真司という人間だ。

「わかった、お願ひね！」

フェイトも彼の真剣な眼を見て、強くうなずいた。それを確認して、真司はホテルの外へ駆け出していく。

人目につかないところまで来て、ビルの窓にカードテッキをかざす。

「変身ー。」

いつものポーズを取つてから、トッシュキをベルトに差し込み、真司はその姿を龍騎へと変える。

「うしゃあー。」

向ひを見ると、すでにスバルとティアナがガジェットとな戦中だ。

^ SWORD VENT <

ドラグセイバーを構えながら、真司はそこへ向かって一直線に走る。

「シグナムから教わった剣技、見せてやるー。」

「だりやあつーー。」

大きなかけ声とともに戦いに入ってきた真司を見たティアナは、彼の動きが以前よりよくなっていることに気づく。

流麗な、それでいて激しさを持つ剣の扱い方は、まさにシグナムのそれと非常に似ている。確実に、レベルアップしているのだ。

「（つー弱気になるな！私はただ、力を証明するだけ…………。）

頭の中の雜念を振り払い、ティアナはクロスミラージュのカートリッジをいくつも消費し、それを構える。

それは無謀な行為で、通信でなのはから制止の言葉が入ってくるが、ティアナは止めようとはしない。

「クロスファイヤー・ショートーー。」

クロスミラージュから大量の弾丸が撃ちだされ、狙い澄ましたよう

に次々とガジェットを破壊していく。

だが。

一発だけ弾道が逸れ、真っすぐにウイングロードの上を走るスバルへ向かつて突き進む。

「え……？」

スバルはティアナに背を向けていたため、それに反応しきれない。

さらに援護に駆けつけたヴィータが弾丸を弾き飛ばそうとするが、それも間に合わない。

「くわっ……！」

『あの時と同じか』と、仲間を助けられない自分のふがいなさをヴィータが痛感した時。

「ハアッ！！」

その場にいた全員が、自分の目を疑つた　　城戸真司を除いては。

「大丈夫か、スバル！」

電子音が2回聞こえてから、地上にいたはずの真司が空中のウイングロード上のスバルのところに現れ、弾丸をはじき返すまで、まさに一瞬の出来事だった。

今しがた真司が使用したのは、『ストレンジベント』というカードだ。これは特殊なカードで、使うとその場に最も適したカードに変化し、その効果を發揮するというものである。

今回は、空中のスバルにまで弾丸より先にたどり着くためのカード  
一瞬だけの超高速移動を可能にする『アクセルベント』に変化したというわけだ。

まだ隠されていた龍騎の力を見たヴィータは少しの間呆気にとられ

ていたが、やがて我を取り戻し、怒りをあらわにする。

「ティアナ、この馬鹿」

だが、真司が彼女の前に手をかざし、制止のポーズを取つたことで、ヴィータは思わず言葉を途中で引つめる。

「今は叱つてる場合じゃない。もう向こうからガジュットがどんどんやって来てる」

迫りくる敵の方を見ながら、静かに言つ真司。仮面に覆われたその顔は、きっといつもの馬鹿面からは想像できないものになつているのだろうとヴィータは感じる。

ちらつとティアナの方を見ると、彼女は手を小刻みに震わせていた。今、それにわざわざ追い討ちをかける必要もないだろう。

「……ああ、そうだな。言い忘れてたけど、スバルを助けてくれてありがとうございます」

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

ヴィータとスバルが礼を言つて対し、大したことではないといつふつに軽く返す真司。彼は続いて、彼女達にある提案をする。

「みんな、できるだけガジェットを一箇所に固めるように戦つてく  
れないのでかな？」

地上のティアナにも聞こえるよつ、大きな声で真司はそつと言つた。

「なんか策があるのか？」

「まあ、ちょっと取つておきがね。それで、頼める？」

「……まだ隠し技があんのかよ」

龍騎の引き出しの深さに驚くやうなため息をつくやうした後、ヴィータはガジェットの方を見据える。

「スバル、ティアナ！ 真司の言つた通り、ガジェットを一箇所に集中させろーーいいな！」

「はいー。」

「……はー」

ヴィータの命令にスバルが反応し、一テンポ遅れてティアナも返事をして動き始める。それを見て、真司とヴィータもガジェットの群れに向かっていく。

^ GUARD VENT <

「おつやああー。」

ドラグシールドを身につけ、ガジェットの反撃を受けながらも真司は強引にそれらを決まった地点に追い込んでいく。精神的に危うい状態のティアナの負担をできるだけ減らすためにも、この作戦を成功させる必要がある。

他の脚も次々とガジェットを追い詰めていく、やがてガジェットが「めりきゅうひしめき合ひ」光景が出来上がった。

「つしゃあ、行くぜー。」

今だ、と思った真司は、『テッキから一枚のカードを取りだす。

カードに描かれているのは、『テッキと同じ龍の紋章。

その『龍騎最大の切り札』を、ドラグバイザーに挿入する。

>FINAL EVENT <

電子音が鳴り響いた瞬間。

「ウオオオオオオン！！！」

「つーな、なんだあれは！？」

ヴィータを始め、スバルもティアナも息をのむ。彼女達を視線の先にあるのは　　巨大な紅の龍が、ホテル・アグスターの窓から雄たけびを上げて飛び出す姿だった。

その龍　　ドラグレッダーは真司のところまで移動し、彼の周りを包むように回り始める。

「はああああ…………！」

それに応じるよつて、真司も独特的のポーズを取りながら力を集中させていく。

「たあつー！」

真司は空高く飛びあがり、ドラグレッダーが飛びまわる空中を回転し、そして蹴りの姿勢になる。

「はあああああーーー！」

狙いはもちろんガジェットの群れ。向こうもレーザーで反撃していくが、勢いのついた真司とドラグレッダーは止まらない。

「だああああああーーーー！」

巨大な爆発音とともに、龍騎の必殺技『ドラゴンライダーキック』が、すべてのガジェットを破壊した。

「……す、すいこ…………」

「……あれが、真司さんの力……」

そのあまりの威力に、スバルとティアナは放心状態だ。

「おい真司！今の龍は一体……」

ただひとり、ヴィータだけが変身を解除した真司に詰め寄る。ドラグレッダーは、ドラゴンライダーキックの直後に消えてしまった。

真司はその問いにつーんと数秒唸つた後、

「ドラグレッダーっていつ、俺の相棒みたいなものかな

と答えた。

その後、皆が今回の事件の後始末をしている中、ティアナはひとりベンチに座つてうつむいていた。

ぺたつ

「ウル！」

そうしていたとき、突然頬にヒヤッとした冷たい感覚が伝わってく  
る。

「おっす。炭酸と『一ノ瀬』、どちらがいい?」

顔を上げると、笑いながらそつ尋ねてくる真向の姿があつた。右手には炭酸、左手には「コーヒー。おそらく今の冷たい感覚は炭酸を頬に当たられたのだろう。

「……………おや、ハーハーで」

「おっ、大人だな」

そう言いながらコーヒーを渡し、ティアナの隣に座る真司。

「ピールもいいけど、炭酸にも違つた味わいがあるよなあ」

「……私、未成年なんですけど」

「あ、そうだった。『めん』『めん』

飲酒の話を振つてしまつたことを謝る真司。

しかし、その表情は急に真剣なものに変わる。

「ティアナ……何かあつたのか？」

「…………『めん』こと聞くんですか？」

コーヒーを飲むのを止め、ティアナはそう聞く返す。

「いや、なんていうか、ティアナっていつも落ち着いてるのに、今日はなんか焦つてたかな～って思つてさ。何か理由があるんじゃないか？」

ティアナの方を真つすぐ見て話す真司。対してティアナは、彼の顔を見ようとせず、ずっと前を向いている。

「あっ、もちろん、話したくなきゃ話となくいいんだ。誰にだって秘密のひとつやつくらいはあるこ」

真司が付け加えるよつこにして言ひ。

「……私の兄は、フェイト隊長と同じ執務官でした

しかし、ティアナはぽつぽつと昔話を始めた。何となく、答えない気になれなかつたのだ。

「私は、そんな兄が誇りで、尊敬してました。でも……ある時兄さんは、違法魔導師を取り逃がして、殺されてしまったんです

話してこねつたり過去を思い出し、自然と涙がにじんでこく。

「そして、上層部は兄さんを『役立たず』と言つた……だから、私は証明したいんです。私が強くなつて、執務官になつて、兄さんは役立たずなんかじゃなかつたつて！」

真司は、黙つてその話を聞いていた。そして、ティアナが言葉を終えて何も言わなかつた。

しばらくの間、静寂が訪れる。

「……私、みんなのところに行きます」

コーヒーを飲み終えたティアナは、そう言つてベンチから腰を上げ、去つて行つた。

「……

真司は、ティアナが去った後もベンチに座つたままだつた。炭酸の量は全く減つていない。

ティアナに、かける言葉が見つかなかつた。彼女が抱えているものは、およそ自分が経験したこともない、少女が背負うにはあまりに大きすぎるもので。

「…どうすればいいんだ？」

真司の小さなつぶやきは、誰にも聞かれることなく虚空に消えていく。

自分は、彼女に何ができるのだろう？

## 第八話 ホテル・アグスタ後篇（後書き）

普通の世界で、普通に生きてきた真司が、ティアナの普通でない過去を知る。龍騎本編の真司なら何か言えたのかもしませんが、この真司は最後の平和な世界の真司なので、こんな暗い話と向き合つるのは初めてなのです。だから戸惑う結果になりました。

話は変わつて戦闘の方ですが、今回初めてストレンジベント、そしてファイナルベントを使用。一部のメンバーにドラグレッダーの姿が明らかになりました。

アクセルベントはオルタナティブしか使ってませんでしたが、たぶんイケると思って使わせました。てかストレンジベントってなかなかチートなカードですよね……

次回はいよいよ模擬戦！……ではなく、真司がその前にいろいろ頑張つてみる話です。次回の彼のバカに期待（えあ……）

感想や評価などあれば、お気軽に寄せください。目標は仮面ライダー龍騎でタグ検索した時にトップに来ることです！（できるかなあ……）

では、また次回。

## 第九話 僕に出来る!Jリ

「よし、午前の訓練はここまでだ。昼食にじみつ

ホテル・アグスタでの戦闘の翌日。いつもより、真司はシグナムの訓練を受けていた。

「あ、シグナム。フォワード達の訓練も、そろそろ一段落ついてるかな?」

シグナムが昼食の時間を告げた後、真司は彼女にそつ尋ねる。

「だと思つが……どうかしたのか?」

「うふ。ちゅうとなほに話があつてね

「なのは、ちよつといいかな」

「あ、真司君。何かな?」

割と簡単に通路でなのはを発見した真司は、彼女を呼び止める。用件はもちらり。

「ティアナのことなんだけじゃ。訓練の様子とか、どんな感じ?」

昨日聞いた彼女の過去。真司はそのことをずっと考えていたのだ。

「うふ~ティアナ? どんな感じって、ちゃんと真面目に頑張ってくれてるよ」

それがどうかしたの、という表情のなのは。いまいち真司の言葉の意図がつかめないよつだ。

「本當?なんか不満そつにしてるとか、ない?」

念を押して真剣に聞くと、なのはは何かを思い出したよつだ。

「……そつこえば、最近たまに訓練中に暗い顔する時があるの。特に失敗したとかそういうわけでもないんだけど……」

やつぱりか、と真司は感じる。昨日のマスから考へても間違いない。

「多分、ティアナは焦つてるんだ」

「…焦つてる?」

「ああ。早く強くなりたいって、そつ思つてるんだ」

真司の話を聞いて、なのははつーんと数秒唸る。

「……ひょっとして、私が基礎の分野しか教えていないからかな」

「え、 そつなの？」

魔法のことについてはまったくの素人である真司は、当然そのあたりのことはよくわからぬ。

「うふ。 少し、 基礎を固める期間が長いって感じてるのかもしだい」

答えらしきものに行きついたらしいのは、 真司も何となく理解し、 少しほつとす。

「 だつたら、 そろそろ応用を

「それは無理だよ」

その瞬間、 なのはの雰囲気が変わった。 今までとは明らかに違う、 まるで何か暗いものにとらわれているかのよつな……

「大きな怪我をしないように、 もうとちゃんと基礎を固めないうち  
は、 駄目だよ」

なのはの言葉から、有無を言わざぬものが伝わってくる。真司の知つている温和な彼女からは想像もできない、はつきりとした拒絕だ。

「なのは……」

「……食堂に行こつか。今日は、私と食べる?..」

「あ、ああ……」

話を無理やり切り上げられ、真司はそれ以上尋ねることができなかつた。

数時間経ち、すっかり日も暮れたころ。

「あれは……」

たまたま通りがかった真司が見たのは、訓練が終わった後、ティアナがひとり残って居残り特訓をしている姿。

「おーい、ティアナ

少し大きめの声を出すと、向こうもこちらの存在に気づいたようで、ちらりと真司の方を見る。

そのまま彼女の方へ歩み寄ると、真司はティアナの息遣いが激しく乱れているのに気づく。素人目にも無理をしているのがわかる。

「ひょっとして、毎日残つて訓練してゐるのか？」

「……ええ、まあ」

「べもなく答えるティアナ。当然、なのはに許可を取つてゐるわけではないのだわい。

「……あんまり無理するなよ。怪我しちゃうかもしれないから」

軽く諭すやうに囁いた真司だが、ティアナはそれを聞こへむべ。

「……強て真司さんには、私の気持ちなんてわかりませんよ」

「へーおこおこ、俺が強いつて……それは龍騎のカードテックがあるからだ」

「せうだとしても、龍騎の力を手に入れて、それを使いこなしていくこと自体がすごいこんですよ。違いますか？」

語調を強めて囁つティアナ。囁葉の陰には苛立ちが見える。

「そ、それは……」

「私はただの凡人なんです。だから、多少無理をしたって、努力しないと駄目なんですよ」

真司を睨むようにして、ティアナは強く捲し立てる。

「……それは、やうかもしれないけど。でも、お前が無理してるの見ると俺は心配だし、あ、でも別にお前の夢を追いつ気持ちを否定してるわけじゃなくて、その、あの……」

しどりもどりに気持ちを伝えようとする真司だが、うまく言葉にならない。よく考えれば当たり前のことだ。

「…………何か言つつもりなら、せめて考え方整理してからにしてください」

そもそも、気持ちがまとまつていないのでから。

ティアナは立ちあがると、真司の方を見ないですたすたと歩き去つて行つた。

「はあ……」

ふらふらと歩き、気がつけば自動販売機の前。折角だから何か飲もうかと思つた真司は、とりあえずお金を入れる。

が、再び思考の迷宮に入りこんでしまって、しばしそこに立ちつくす。

「…………俺は…………」

「真司?」

「うわい！」

急に声をかけられたので振り返ると、そこにはフュイトがいた。

「ひどいよ、やべ、真司は自分が自販機を使う人の邪魔になつていることに気がつく。

「ああ、『めんどくさん』と一緒にじしてた

あわててそう言いながら、テキトーにボタンを押す真司。

「……え、真司、それ飲むの？」

それを見て、フュイトは眉をひそめる。

「へ？」

何を押したのだろうかと、真司は出てきた缶を拾い上げる。そこに書かれていた文字は

「（ううわー、なんだこれ。嫌な予感しかしないぞ……）

とはいって、このまま捨てるのももったいない気がするので、とりあえずベンチに座り、缶を開ける。

「本当に飲むの？」

そうしてみると、「コーヒーを置いたフロイトが心配そうにこちらを見やきこんでくる。彼女のこの様子、おそらく結構な評判となつているのだろう。

「ま、まあね。ちょっと冒険してみようかな～みたいな

まあそれでも、飲めないことはないだろ？」、真司は缶を傾け口に中身を流し込んだ

まず、どろりとした重たい感触が舌を包み込む。そして、メイントリのこちく、そして味噌、じゃがいも、こんにゃく、がんもどきなどなどが複雑に混ざつ合つた非常に濃厚な味が口の中全体に広がつてしま

「...」

結論。思わず吹き出すほどにまずい。

「ゴホツ、ガホツ」

「だ、大丈夫！？」

せき込む真面を見て心配するフロイト。あまりの反応に驚いている  
よつだ。

「と、とつあえず、水……」

一気に体力を奪われた体を引きずり、500mlペットボトル入りの水を買う真司。まさにいちじおでんは無駄遣いとなつてしまつた。

「ぐくと水を飲み、ぱはーと息をつく。

「ふー、やっと落ち着いた」

「……そつか、よかつた」

そんな真司の様子を見て、フロイトはまほりと胸をなでめりす。

それにしても、どうしてあんなまづいものが売つているんだと真司は考えるが、よく考えればここはいろんな世界の人人が集まる世界、ああいうのを好む人もいるのかもしれないと思い直した。

「おでんについての思考が終わると、再びティアナ、そしてなのはのことが思い起しあれ、真司は深く考え込む。

「はあ……」

「真司、何か悩み」ともあるの?」

「え?……どうしてわかるの?」

そんなにわかりやすい表情をしていただらうかと考える真司。

「……うーん、普段元気だから、ちょっとわかりやすいのかもしれない

「……そんなもんかなあ」

「それで、何を悩んでいるの？」

フュードがこなりを覗き込んでくる。単純に興味があるのか、それとも心配してくれてこらのか。

「……実はや」

いざれにせよ、誰かに話してもいいかなと思った真司は、先ほどから考え込んでいる事柄について語つた。

「……やつ。そんなことになつてたの」

真司の話（一応ティアナの居残り特訓は秘密にしておいた）を聞いて、フュードはやつづぶやく。そして、真司は続いて自分の本心を話し始めた。

「少しでも早く夢を叶えるために頑張ろつとするティアナの気持ちも、まだ子供なフォワードのみんなに怪我をさせないために基礎を

重視するなのはの気持ちも、どっちもなんとなくわかるんだよ。…  
だから、どっちかの味方するつてわけにもいかなくて」

それぞれの考えることの奥には、きっと譲れない想いが潜んでいるのだろう。ティアナは兄のことだし、なのはについても何かあるといつことは先ほどの彼女の様子でわかる。

そこじまで言つて、真司は再び大きくため息をつく。

「……とかなんとか考えてるけど、さつきティアナにはうつとうしがられちゃつたし……俺、おせつかいなのかな？」

ひょっとすると、これは自分なんかが介入する問題ではないのか。そんな思いが、真司の頭をかすめていた時。

「……真司は、それでいいんじゃないかな」

「え？」

いきなり口を開いたフェイドの言葉に、真司は一瞬戸惑つ。

「私は、真司のやうこいつと一緒に、真司らしくしていくこと思つたがな。だって、それ、みんなに出来る」とじやないから」

フェイントはそのまま、真司に優しく語りかける。

「何事にも首突つ込まないと、気が済まないんでしょう？」

それは、真司が六課に協力することを願い出た時に言つたセリフ。

フェイントの言葉を聞いて、真司の心が固まつていく。

「（……そうだ、そうだよ。もともと考へるのは得意じゃないんだ）

「

もちろん、考へることも大切だ。だけど、行動が伴わなければ意味がない。

「（とにかく進むーやうしないと、何も変わりはしないんだー）」

今までの人生だって、そつやつて生きてきたのだ。ちょっと暗い話を聞いたからって、それを変える必要なんてこれっぽっちもない。

「やうと決まれば行動あるのみーありがとうフロイト、俺ティアナの部屋に行つてくるよー。」

勢いよく立ちあがり、水を一気に飲み干して『ハリ』箱に捨て、そのままダッシュする真同。

「あー、真同、ちよつヒー。」

あわてた様子でフロイトが呼びとめる。

「え、なに?」

「ティアナの部屋は逆方向だよー。」

「あつやつやー。」

どうしてこの肝心なところでミスをするのかと自分で自分に苦笑いしながら、真同は再びフロイトの前まで戻り、

「んじゃ、今度こそ行つてきまーすー。」

今度は正しい方向へ走つて行つた。

残つたフュイットは、ノーハーをゆづくつ飲みながらつぶやく。

「少しおつりなさいよいだけ……真つすぐだよね、真同は

その顔には、小さな笑みが浮かんでいた。

## 第九話 僕に出来ること（後書き）

いやおでんの元ネタはなのはでもライダーでもありません。とあるラノベからの引用です。アニメ一期やるのはうれしいけど、ゲームは対戦じゃなくてギャルゲ風にしてほしいなあ……っと、脱線しましたね。

悩む真司はフェイトと会話。そして吹っ切れました。本編でも編集長をはじめとして真司は周りに助けられて成長していくので、やっぱり今回もこんな感じになりました。

感想や評価などあれば、いつでもお寄せください。

では、また次回。

## 第十話 ティアナと真司と始まる模擬戦

パンパン

「ティアナ、いるか？城戸だけど」

訓練の疲れを癒すため、すぐにでも眠ろうと思っていたティアナは、自分の部屋のドアがノックされる音を聞く。

まだ何か言つつもりなのかと、ティアナはけだるそうに立ち上がりてドアに向かう。たまたま疲労も手伝って、かなりイライラしている状態だ。

「…何でしようか、大した用じゃないんだつたら

そつ言いながらドアを開けるや否や。

「ティアナ！一緒に特訓しよう！」

「…………は？」

いきなりの真司の言葉に面食らつティアナ。真司はそれに構わず話し続ける。

「ほら、俺魔法に関して全然知らないど素人だから、色々知りたくて。それに、ティアナも他の人の意見もあつた方がいいんじゃないかな～って」

「ちょ、ちょっと……いきなり捲し立てないでください」

「というか、ひとりより2人の方がいいに決まってるしな！」

言葉を返そうとしたティアナだが、真司が笑顔でそう言ったのを聞いて、はっとしたように押し黙ってしまう。

「…………兄さん」

「ん? 何か言つた?」

「つーい、いいえ、何も言つてません。… そうですね、確かに真司さんみたいなタイプの人への意見は欲しいかもしません。だから……いいですよ。明日からは、一緒に残つて訓練しましょう」

一瞬焦つたティアナだが、何とか調子を戻して真司に返事をした。  
実際、自分とは違う接近戦タイプの人間の考え方も参考になるかも  
しない。

「本当ー？ よつしゃ！ ありがとな、じゃあお休み」

ティアナのOKの答えをもらつてガツツポーズを取つた真司は、挨拶をすると元気よく帰つて行つた。

その後ろ姿をしばらく眺めてから、ティアナは部屋のドアを閉め、ベッドに倒れ込む。

「……あ～～もう、なんで重なるのよー全然違つじやない！」

うつぶせになつて枕に向かつて言葉をぶつける。彼女の心は戸惑つていた。

真司が見せる笑顔が、まれに兄のティーダの笑顔に似ていると感じてしまうのだ。もちろん、彼ら2人の顔が似ているわけではない。ただ、何となく笑顔の雰囲気が似通つてゐるというか

ティーダと真司は全く違う人間だ。ティーダの方は、ティアナが尊敬するような真面目な人間だ。それに対して真司は、よくドジなことをするし、ひょうきんな性格の持ち主である。

それなのに、重なってしまう。

「……ほんとに、変な人」

仰向けになり、寝る姿勢に入ったティアナは、最後に天井に向かつてそつぶやいた。

「へえ、幻術って厄介だな。全然見切れないや。気配とかでわかるもんなのかな？」

「よほど熟練した魔導師なら可能かもしませんが、そう簡単にはいかないでしょうね」

翌日。約束通り、真司はシグナムにしてもらった後、ティアナと居残り訓練を行っている。

「やつぱり、俺みたいな人間に一番困る攻め方は

「

「……なるほど、そういう考え方もありましたか」

しばらく動き、その後色々話し合いを行う。魔法の詳しい効果についてや、ティアナの動き方についてなど、お互いが思ったことをこと細かに言い合つ。

幻術など、わからぬことがたくさんある真司にとっては当然プラ

スになるし、ティアナにとつても真司の意見は役に立つているようだ。意外と素人による考え方というのが功を奏しているのかもしない。

「だから……」

「（…よし、いい感じだ）」

ティアナの言葉に耳を傾けながら、真司は心の中で喜ぶ。

話し合いに時間を割いているため、疲れた体をあまり動かさずに済んでいる。その証拠に、真司もティアナも特に息遣いが乱れているところではない。

ティアナにできるだけ無理をさせない、それが真司の目的だ。彼女があくまで居残り訓練をやめるつもりがないなら、せめて自分が加わって見てこよう、そう考えて昨日あんなことを言つたわけだ。

「…真司さん、ちゃんと聞いてますか？」

「ん、ああ、もうひるん」

「 もうですか？ 今日が明後日の方に向ひましてたけれど」

「 あ、あはは……すみません」

「 こんな感じで訓練および話し合には続いていった。」

「…………あひやー。やつあやつたな」

「……思わず話に熱中しききましたね」

食堂の中に入り、2人は困ったため息をつく。時間が経つのも忘れて話しあっていた結果、気がつけば食堂のおばちゃん達の勤務時間 vượtしてしまっていたのだ。

ぐ～～

「お、ティアナ、お腹の虫が鳴ってるわ

「……っ！？」と、とりあえず、コンビニで何か買こましょい、そうしまじょい

真司に向かってことを指摘され、赤面するティアナ。顔を見られなことよつこそつぽを向いてくる。

「それなり、悪いけど俺のぶんもテキターに買つてくれ。その間にちよっと厨房拌借してるから

「え？ 真司さん何か作るんですか？」

「今度使おうと思ってた食材が部屋にあるんだ。折角だからティアナにもおすそわけ。だから、ちょっと少なめに買って来て欲しいな」

首をかしげるティアナに説明する真司。料理はある分野だけなら自信があるので。

「それで、その作るもののは……」

「それは後のお楽しみ」

そうほがらかして、真司は厨房に入った。ティアナもコンビニへと向かう。

「完成！城戸真司特製餃子だ！」

「…餃子ですか」

「あれ？もしかして嫌いだった？」

「いえ、別に好きでも嫌いでもあります」

コンビニで弁当を買つて戻ってきたティアナがしばらく待つた後見たのは、自信満々に真司が持つてきた餃子だった。まあ、短時間でそう手の込んだものは作れないでの、この辺りが限界だろう。

「や、食べてみてよ」

箸を手渡し、にこにこ笑つて真司が言つ。こういう笑顔には、兄の影はさっぱりない。

「…ありがとうございます。じゃあひとつだけ

」

皿に盛つてある6個の餃子のうちひとつを箸でつかみ、口に運ぶテイアナ。

「…………」

だが、なんどこう氣もなく食べたそれは、予想をはるかに超える

「…………おこじこ」

とさでもなに一つもれを持っていた。なんどこうかまつ、空腹なものも相重なつて、表現できなにほじゆいしい。

「す、おこじこめへーの、この餃子ー！」

「だら？ 餃子には血があるんだよ俺。どうぞ食べていいからなー。」

ひとつだけとこう言葉はどこへやら、テイアナはそのまま次の餃子へ箸を伸ばす。真司も自分の料理をあこじいと呟つてもうらえて喜んでこりよつだ。

ぱくぱくぱく。

「…………あ」

『気がついたら、餃子は残り1個。うつかり5個も食べてしまつたことを申し訳なく思つティアナ。

「『』、『』めんなさ』。『』…………」

「いじんだよ、むしろそれだけ喜んで食べてもらえたんなら『』ち  
もつれしいから」

真司は特に『』にも留めず、笑顔で許してくれた。

「…………それに、ティアナの見たことない顔もお目にかかれたし」

「え……？」

真司の放った言葉に困惑するティアナ。

「普段俺より大人びてるティアナも、腹の虫鳴らして恥ずかしがつたり、うまいもんに思わず夢中になつたり、普通のかわいい女の子なんだなって」

「…………ふえ？…な、な何を言つてるんですか！私帰ります、『ち  
そつそまでした！』

なんで顔を赤くしてるんだと自分に叱つても、一向に火照つたままだ。なので、このままとつとと帰ることにしたティアナは立ち上がり、食堂を疋早に去り立つとする。

「あ、ティアナ！」

その時、真司が彼女を呼び止める。

「これは真面目な話なんだけど、俺、ティアナは絶対凄いと思うよ。だって、幻術とか使って、いつも自分にできる」とを冷静に考えられるんだから！」

「…………

その言葉には何も返さず、ティアナはそのまま食堂から出でていった。

その後も2人の居残り訓練は続いて、数日後、スバルとティアナの模擬戦が行われた。相手は、普段指導しているなのはだ。

真司は、フェイトやヴィータ、エリオ、キャロとの様子を観戦していたのだが。

「……まずい！」

ティアナとスバルが無茶して突っ込んだ瞬間、なのはの雰囲気が変わった。それは、先日真司が見た『あの』なのはと同じだ。

「真司さんー?」

エリオの呼びとめる声も聞かずに、真司はその辺の建物の窓に向かつてテッキを構える。

「変身ー!」

「誰も傷ついて欲しくないからー誰も死なせたくないからー私は…強くなりたいんですーー!」

「……少し、頭冷やそつか」

涙を流して叫びながらクロスミラージュを構えるティアナに向けて、右手に魔力を集中させるなのは。

「クロスファイヤーシュート」

無表情で放たれた魔力弾は、真っすぐティアナに向かって飛んで行き

「うおおおおおお！」

その瞬間、龍騎に変身した真司がティアナに飛びつき、魔力弾を回避した。そのままティアナを守るように背中で着地する真司を見て、バインドで縛られた状態のスバルが駆け寄ってくる。

「ティア！」

「スバル、ティアナと一緒に離れてる」

バインドを引きちぎった真司はそれだけ言つと、こちらを冷たい目で見つめているなのはの方に向き直る。

「真司君……私が指導してたんだよ、邪魔しないでくれるかな？」

その皿は、どうまでも暗くて、やはり何かあったのだと真司は確信を得る。

「……俺は」

ティアナとなのは。2人の考えは違っているけど、どちらの気持ちも真司には理解できる。だから、はっきりした答えは全然出ていないけれど。

「こんなやり方、認めるわけにはいかない」

だけど、これだけは言える。ただ傷つけるだけじゃ、絶対に駄目だ。互いに歩み寄りつつもしなこいつか、こんなことじつといはずがない。

真司は、そう強く感じていた。

「……真司君も、少し頭冷やそつか」

なのはが戦闘態勢に入る。向こうは空を飛べる上、遠距離攻撃が主流。普通に戦えば真司が圧倒的に不利だ。

「……人相手に、龍騎の力を本気で使いたくはないけど……」

だが、真司には一枚、まだ使っていないカードがある。

> A D V E N T <

「それでも、この勝負だけは負けられないんだ」

「ウオオオオオオオオン！――！」

息をのんで真司となのはのやり取りを見つめていたフェイト達は、突如ビルの窓から出現した龍に驚愕する。

「な、なんだあれ！？」

「フリードよりも大きい……」

エリオとキャロが言葉を発し、フロイトが無言で紅の龍に手を奪わ  
れている中、かつてそれを見たことのあるヴィータだけは多少落ち  
着いた様子でいる。

「……ドラグレッダー。真司の相棒みたいなもんだぞや」

ドラグレッダーは空を飛び、真司の後ろに陣どり、なのはを睨みつ  
ける。

「ドラグ、レッダー……」

真司 龍騎の姿を見て、フロイトは少くともやこした。

「……まさに、龍を従えし騎士

## 第十話 ティアナと真司と始まる模擬戦（後書き）

あああ～、ついに始まっちゃいましたよ模擬戦。真司も頑張りましたが、魔王降臨を避けることはできませんでした。でも、その努力が無駄だというわけでは決してなく、後々生きてきます。

さて、次はいよいよ真司ＶＳなのは。ついにアドベントを使用した真司に勝機はあるのか！？

感想や評価などあれば、お気軽に寄せください。

では、また次回。

## 第十一話 龍騎ＶＳエースオブエース（前書き）

スランプの中何とか投稿……激しく不安です。

## 第十一話 龍騎ＶＳＨースオブエース

街中を模した模擬戦場の中、互いに向き合つて一つの人影。

時空漂流者・仮面ライダー龍騎と、時空管理局のHースオブエース・高町なのは。

空には、龍騎が契約している巨大龍・ドラグレッダー。

どちらが、いつ動くのか。どうであれ、ひとたび場が動けば熾烈な戦闘が始まるのは間違いない。

「…ひょっとして、真司さんとのはさみ、このまま戦つつもりなんでしょうか……？」

緊張した面持ちでエリオが周りに尋ねる。ただの模擬戦だったはずが、とんでもないことになりそうなのだ。

「馬鹿野郎、そんなことさせるか！あたしが止めてくる！」

そう言って模擬戦場に向かおうとする、ヴィータ。

だが。

「つー? 何すんだよフュイトー.」

彼女の行く道を手で遮るフュイト。ヴィータが怒鳴るが、フュイトも真剣な表情で彼女の顔を見つめ返す。

「……今は、真司に任せてもみよう」

「はあ! ? 何馬鹿な! ?」と言つてんだ、大体あいつはなのはの過去を知らねえんだろ! ?

「多分、そうだね」

「だつたら

「でも」

普段おとなしいフュイトの強い調子の言葉で、ヴィータは思わず黙ってしまう。

「何かあつたつてことくらいは、わかってると思う。それに……真司は一生懸命だった。あの事故に責任を感じて手を出そうとしなかつた私達と違つて、本気でなのはとティアナのこと、何とかしようとしてた。だから……賭けてみたいんだ」

ここ数日、真司がティアナと一緒に訓練している光景を、フェイトは目にしていた。ティアナのことについて話した後、気になったのでこつそり彼の様子をうかがっていたのだ。

出会つてそれほど経つていない人間に、そこまでする人間はそういうないと思う。

だから、彼の思つとおりに行動させるべきだ。フェイトはそう考えていた。

「…………くそつ、わかつたよ」

渋々ながらヴィータが彼女の意見を受け入れた時、模擬戦場に目を向けていたエリオとキヤロが声をあげる。

「あつ、真司さんが龍の上に乗つた！」

「二人とも、動き始めた……！」

「ドラグレッダー！」

ドラグレッダーに飛び乗った真司が叫んだ瞬間、止まっていた空気が一気に動き出す。

「アクセルシユーター」

空中に浮かんだのは、すぐさま攻めに入ってくる。いくつもの魔力弾が形成され、真司とドラグレッダーを囲むように位置どられる。

「シユート」

先手必勝とばかりに降り注いでくる桃色のエネルギー体。

だが、真司とて無警戒なわけではない。

^ GUARD VENT <

真司がドラグシールドを装備する一方、ドラグレッダーは猛スピードで魔力弾の包囲網を突っ切る。

「…ふう、ギリギリか」

ほつとしたようにつぶやく真司。体が大きいドラグレッダーには多少当たってしまったが、さすがはモンスターというべきか、ダメージを受けている様子はない。

「…さすがに」のくらには平気みたいだね

品定めするよつこちらを見るなのは。今のが撃は牽制で、ドラグレッダーの実力を測るためにものだったのだろう。

真司も真司で、これから取るべき行動を思い浮かべる。頭の出来を褒められたことは一度としてないが、それでも今はフル回転させるしかない。

だが、いつまでもボーッとしているわけにもいかない。

「ドラグレッダー、頼むぞ」

「ウオオオオオン！！」

今度は真司の方から仕掛ける。ドラグレッダーの口から火炎弾が何発も発射される。大きさはなのほのものといい勝負か、あるいはそれ以上だ。

対してなのはさして焦った様子も見せず、回避行動を取りながら、避けきれないものは、

「オーバルプロテクション」

彼女を包み込むようにして張られたバリアによつて防ぐ。必要最低限の魔力しか使用しない。自分の力を過信せず、かといって信じな

いわけでもない。理想的な動きと言つて相違ないだろ？。

「やば……」

「ティバインショーター」

なのはの流麗な動きに内心びびっていた真司に、不規則な弾丸が襲いかかる。重いドラグシールドを装備したままでは対処が厳しいと判断した真司は、すぐにカードを取りだす。

^ SWORD VENT <

「だりやつー」

あちこちから飛んでくる魔力弾を弾き飛ばす真司。その間にドラグレッダーはなのはに向かつて火炎弾を打ち出すが、なのはの対処も速く、有効打は『えられない。

「す、すごい闘いだ……」

一方、離れた場所で戦況を見守る4人。エリオがつぶやいた言葉に、一同うなづく。

「真司さん、シグナム副隊長と闘つたときよつもすつと……」

「強くなってるな。剣さばきもそつだけど、なのはの攻撃に対する動きに迷いがねえ」

キヤロとヴィーダが素直に驚く中、フロイトは無言で遠くの真司を見つめる。

先ほどの、『ティバインショーター』を剣ではね返した場面。なのはが呪文を唱えると、真司は魔力弾が打ち出される前から、すでにカードを一枚取り出していた。

だが、ディバインシューターの不規則に動くという特性を知つていなければ、そのまま盾で防げうとしたはずだ。つまりそれは、真司がある程度術の知識を頭に入れているということ。

シグナムは剣の訓練をしているだけだから、どこで情報を仕入れたかの答えはひとつ。

「多分、そこまで深くは考えてなかつたんだろ？けど……」

ティアナが無茶しないように一緒に訓練したことで、自分も大きく成長した。そういうことだらう。

そう考えて、フェイトは小さくつづく。今はもう、彼女の胸に心配の気持ちはない。

真司は、なのはは止めることができる。

そんな彼女の想いに応えるように、真司は次の瞬間大きく動いた。

「ウオオオオン！！」

「つー」

ドラグレッダーの今までで最も大きな咆哮を聞き、なのはは身構える。現在の互いの位置は、なのはが地上3m、真司とドラグレッダーがそれより4mほど高い。

瞬間、ドラグレッダーが連続で火炎弾を打ち出す。防御魔法を展開しようとするなのはだが

「つ、これは……！？」

火炎弾は次々と降り注いでくる　　すべてなのはを避けるよう。

標的は、彼女の周りの地面、そしてビルの数々。

真司の狙いは、視界を奪うこと。そうなのはが気づいた時には、すでに彼女の周りは土煙に覆われていた。

まんまとはめられた形となつたが、相手の姿が見えないのはあちらも同じ。真司が仕掛けた作戦だが、同時になのはにとっても大きなチャンスとなり得る状況。

「（次の一手で、決める）」

レイジングハートを強く握りしめ、なのはは感覚を研ぎ澄ませる。

^ STRANGE VENT <

> TRICK VENT <

「つーー！」

砲撃の体勢に入るが、なのははその動きを一度止める。今聞こえてきた電子音は初めてのものだからだ。

「（今までの傾向から考えて、カードの効果はストレートに英語になつてゐるはず！だとすると、ストレンジは…奇妙、トリックは…そのままトリック）」

なのはが一瞬思考の海に入つたそのとき。

「うおおつーー！」

土煙の中から人影が飛び出してきた。雄たけびをあげながらその影龍騎は、一直線にこちらに走つて来て、飛び蹴りの体勢に入る。

一見、どにも変わりがないように見えるが、迎えうつより他に選択肢はない。レイジングハートを迫りくる真司に向ける。

「ディバイイン……バスター！」

大技である砲撃を繰り出した。桃色の光線は、そのまま真司を呑み込んで行く。

「（勝つた！）」

だが。

^STRIKE VENT ^

「え……………？」

別の方向から電子音が聞こえたかと思うと、デイバインバスターが捕らえていた真司の姿が蜃気楼のように消え失せた。

「だああっ！」

直後、大きなかけ声とともに背後からエネルギーを圧縮した強力な火炎弾が飛んできたのに気づくも、もう遅い。

「プロ

」

防御魔法も間に合わず、火炎弾はレイジングハートに直撃、それを十数メートル彼方に吹き飛ばした。

「うーー！」

火炎弾のあおりを受けて尻餅をついたのは、それでもレイジングハートのもとに向かおうとするが。

「う…………！」

その方向には、待ち構えるように空中に浮かんでいる巨大な紅の龍。

後ろを振り向けば、凛として立つ龍の影を纏いし騎士。

「（やられた…………）」

トリックベントは、幻影を作りだすカードだったのだ。その幻影を囮にし、それに向かって放つたディバインバスターの光によつて土煙の中のなのはの位置を掴み、必殺の一撃を放つたということだろう。

すべてを理解し、真司を見上げるなのはに対し、彼は

「立てる?」

そう言って尻餅をついているなのはに右手を差し伸べてきた。

「…………え? ど、どうして……攻撃してこないの?」

そんな真司の意図がつかめず、困惑するなのは。

「…当たり前だろ。俺は君を傷つけるためじゃなくて、君を止めるために戦つたんだ。これ以上は必要ない」

その答えを聞いて、なのはは黙つて真司の顔を見つめる。

「なのはに昔何があつたのか、俺は知らない。そりやそうだ、まだ会つて半月くらいだもんな。……だけど、何かとでも辛いことがあつた、それくらいはわかるさ」

「」

「なのはがどうしてティアナ達に基礎しか教えないのか。それにはきっとちゃんとした理由があるんだと思ひ。でも、まだそのことを話していないんだろう?」

「……うん」

優しく語りかける真司に、なのはは素直にうなずく。

「だったら、伝えればいいんだよ。なのはの気持ちを伝えて、ティアナの気持ちも伝えてもらつて。お互いがお互いの想いを受け入れて。その結果、どうなるかはわからないけど……これだけは言える。ひとりで背負い込む必要はないんだ。なのはにはフェイトやはやてや、たくさんの友達がいる。……頼りないだろ？ けど、俺もいる。だから、な？」

真司の発する一言一言が、なのはの胸に染みわたり、つつかえていたものが取り除かれるように感じられた。

仮面越しに、彼の笑顔が見えたような気がして。

「……うん。ありがと……」

目から何かが流れ落ちるのを感じながら、なのはも小さく笑い返した。

## 第十一話 龍騎ＶＳヒースオブエース（後書き）

苦しみながらも書きあげましたが、いかがだったでしょうか。戦闘描写は苦手で、決してうまく書けたとは思いませんが、とりあえず気持ちはこめました。

まあ、それはおいといて。何とか真司が勝利、トリックベントによる不意打ちでした。レイジングハートだけを弾き飛ばしたのも、なのはにできるだけ傷をつけないためです。

幻術と言えばティアナの得意技。それも踏まえてこのような展開にしました。特訓の中で彼女に教わったことも活かしたおかげで勝てたので、決して真司ひとりの力によるものではないと、まあそういうことです。

後、複数の方からサバイブについて質問が来ていましたが、もちろん出します。ただ、まだ先の話です。出そうなポイントのひとつとしてはこの模擬戦だったでしょうが、リミッターも解除していないのはにサバイブ使つちやうと……と思つたので。

次回はいよいよティアナ篇（？）完結。その後はギャグも交えたほのぼの話です。今まで忘れてた真司の特徴も思い出しましたし。そして「仮面ライダー龍騎」で検索した結果総合評価が一番上に…！本当にありがとうございます！

感想や評価などあれば、気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第十一話　たこせつな！」と（前書き）

なんか」の前からポイントの伸びが異常なんですが、一体どうなっているんでしょ？……もう400間近だし。お仮に入り登録とかしてくださっているみなさん、本当にありがとうございます！

## 第十一話 たいせつなこと

「シャマル先生」

医務室に入ったのは、ベッドの横に置いたある椅子に腰かけて  
いるシャマルに声をかける。

「なのはじゅん。…ティアナなら、それから歸つたまよ

ベッドの上であつあつと寝息を立ててこる少女を見つめながら、シ  
ヤマルは呟つぶやく。

「……」

「……あなたといつて立つてなつて、いつに来たたら、」  
淹れよしがり

入口のあたりで立ちつくしてなかなか動かさないのは、シ  
ヤマルが優しく呼び掛ける。

「……お願ひします」

「心配しないでね。ティアナの体に、特に大きなダメージなどは見受けられないわ。ただ、ちょっと疲れがたまっていたみたいね。スバルの話だと、模擬戦場からここに来る途中で急に眠り始めちゃつたらしいわ」

「そうですか……」

コーヒーをゆっくり飲みながら、なのははシャマルの話を聞く。

「疲れが、溜まつてた……」

数日前、真司がティアナについて尋ねてきたことを思い出す。

考えてみれば、ティアナの様子が少しおかしいということは、あの時からわかっていたのだった。

なのに、自分は彼女に対して何のフォローもしてあげなかつた。拳句の果てには、他の人から諭される始末だ。

「黙目ですね、私……ティアナの近くにいると思ひこんで、実際は全然あの子のこと、わかつてなかつた。……ついで、わからうとしてなかつた。真司君に、いっぱい言われちやいました」

うつむくなのはに対し、シャマルは一呼吸置いて、静かに彼女に語りかける。

「……なのはちゃんは、強くて、優しい子よ。だから今まで、フエイトちゃんやはやってちゃん、私達を助けてくれた。……でも、だからこそ、ひとりで何でも抱え込んでしまつといふがあるのも確か

か

はつと顔をあげてシャマルを見つめるなのはに、彼女ははつきりと言つた。

「……忘れないで。あなたが誰かを助けたいと思つてゐるよう、あなたを助けたいと思っている人がいることを。そして、誰かが傷ついた時にあなたが悲しむように、あなたが傷つけば、悲しむ人がたくさんいることを」

医務室から出たのは、自販機のあるところまで向かい、そこにあるベンチに座つて、真向やシャマルに言われたことの意味をゆっくりと咀みしめる。

「 なのは」

その時、彼女の前に現れたのは。

「 真司郎……」

「うむ、ちゅうと腹壊しあがつて、トイレ行つてた」

「…大丈夫なの？」

「へーきへーき。やつきのなのはが怖い顔してたから、ちょっとび  
びつて腹の調子がおかしくなつただけだから」

……その言われ方は、少し傷つく。

「…………」

「あつーー」「めん。別に今のなのはは怖くないからな。……やつ  
ぱ俺つてデリカシーないなあ」

いつも通りの態度で話す真司だが、やはり2人を包む空気はどうか  
がいられない。

「ティアナ、あの後すぐに眠っちゃつたらしくて、まだ起きてない  
の」

「……そつか」

そう言いながら、真司はなのはの隣に座り、そのまま虚空を眺める。

彼の方から話しかけてくる雰囲気はない。なのはが何か言つのを待つてゐるようだ。

「……真司は、自分とティアナのために一生懸命やつてくれた。彼がいなければ、自分が持つてている問題にも気づかずついだつただろう。

「……」「めんね、真司君」

結局、口から出た言葉はそれだけだった。頭の中がいろいろ混乱していく、「つまく言葉を紡ぐことができなかつたのだ。

それを聞くと、真司ははあ、と息をつき、なのはの方を振り向く。

「あのや。ジャーナリストって、色々取材したりするのが仕事だからさ、マリマニケーションって大事なんだよね」

「…………え？」

「うひでじひでジャーナリストの話が出てくるのだれつて思つたのは。だが、それには構わず真司は言葉を続ける。

「やつこいつわけで、俺が編集長に教わったことがあるんだ

そこで一呼吸置くと、真司は笑顔になつてこう言つた。

「やつこいつ時は『『』めん』じゃなくて、『ありがとう』って言つんだつてさ」

「あ……

その言葉と笑顔につられて、なのはの表情も少し緩む。

「やうだね。じゃあもう一回。…ありがとうございます。真司君。ティアナが田を覚ましたら、フォワードの皆に話すよ。私の過去と、今の気持ちを

「ああ、頑張れよ

幾分柔らかくなつた空氣の中、なのはは真司の顔をじっと見つめる。

彼に教えてもらつた。何でも一人で背負い込むのではなく、時には周りを頼つていいくのだと。

だから、早速だけど少し頼りなせてもいいおひ。

「ねえ、真司君」

「ん、何？」

「……皆に話す前に、あなたに聞いて欲しいんだけど……いいかな？」

「え？…ああ、リハーサルってこと？…こよ、俺でなければ

迷いつともなく承諾する真司。……もつとも、なのはが先に彼に話そうとした理由は別にあるのだが。

「あっがとう。…じゃあ、話すよ」

すいーっと深呼吸をしてから、なのはの『お話』が始まった。

9歳の時に、偶然魔法少女になり、事情によつフロイトと戦つたこ

と。

糸余曲折の末、なのはの願いが叶い、2人が『友達』になれたこと。

半年後、はやてやシグナム達が大きく関わった『闇の書』事件の際にも、当時安全性が危うかつた『カートリッジシステム』の使用により、辛くも危機をぐぐり抜け、彼女たちとも親しくなったこと。

……だが、幼いころから高威力の魔法を使つてきた彼女の体には、当然ながら見えない疲労が蓄積していく。

時空管理局に入つて2年目、その疲労のせいで少しだけ動きが鈍り、重傷を負つてしまつたこと。地獄のよつなりハビリを経て、今のようすに空を飛べるようになったこと。

フォワードの箇には、自分と同じ思いをさせたくない。だから、多少しつこいくらいに思えて、怪我をしないように基礎をしつかり固めておきたい、ということ。

「……以上、高町なのはの失敗談でした」

なのはは冗談を言つよう話題を締めくくつたが、それを聞き終えた

真司は、しばらぐの間何も言えなかつた。

ティアナと同じく、彼女の抱えているものは、自分より年下の少女が背負うにはあまりに大きすぎるものに違いない。

「（シリアルスだ……本当に、シリアルスだ）」

『大変だつたんだな』などという言葉では、とても彼女に対しても彼女に抱えていたものが不適格だ。そんな陳腐な表現で、自分の気持ちを伝えられるとは思えない。

だから。

「……決めたよ」

自分の決意を、真っすぐ語ることにした。

「俺は、普通に生きてきた一般人だから、他人がなかなか味わうことのないような苦しみとかを感じたことはない。……だけど、そんな俺でも、周りの人の支えになることくらいはできるはずだ。こっちの世界に来てから、皆に色々お世話になつててる代わりに、俺がなのはや、六課の皆を精一杯支えていくよ」

セイツヒー、なのはの顔を見つめる真司。

「……うん。じゃあ、これからもよろしくねー。」

そう答えたなのはの頬は、なぜだか少し赤く染まっていた。

「…………ん」

「田が覚めたようね」

まず視界に入ってきたのは天井。続いてティアナが声のした方を向くと、そこには安心した表情のシャマルが立っている。

しばしの間、寝起きでぼーっとしていたティアナだが、壁にかかっている時計を見て、一気に意識が覚醒する。

「えー…もう9時つって……一体、あの後何が……」

「なのはなちゃんは、真司君が必死になつて止めたそうよ」

「つー…真司さんが…？ 実力勝負で、ですかー…？」

シャマルの言葉を聞いたティアナは驚きを隠せない。

「……詳しい話は知らないわ。だけど、その辺はじきこなのはなちゃんが直接話してくれると思つから。今は、多分心の準備中かな

「心の、準備……？」

「そりゃ。彼女だってまだ19歳。悩んだり、間違つたりすることだってあるのよ」

シャマルの言葉の真意がいまいち呑み込めず、ティアナは首をかし

げるしかなかつた。

だが、数時間後。機動六課のメンバーは、事件を告げる警報を聞くこととなつた。

ティアナを除く残りのフォワード陣と一緒にいた真司は、彼女達とともにヘリポートへと向かつた。

今この場にいるのは、なのはとフェイト、ヴィータ、シグナム、ヘルリの中に入るヴァイス、フォワードのみなんだ。ティアナも、明らかに元気はないがきちんと集合している。

「今日は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の

3人」

「みんなはロビーで、出動待機ね」

「やつちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

なのはとフロイト、ヴィータが今回の任務の説明をして、

「　　「　　はいーー.」　」

スバル達が引きしまつた返事をするのだが。

「はい……」

ティアナの返事だけ、他の3人よりもワンテンポ遅れた、霸氣のないものとなる。

そんな彼女の様子を、一同は黙つて見つめている。

「なのは」

だが、ここに真司が口を挟んできた。みんなの視線が彼に移る。

「俺がなのはの代わつて出る、てこりのじゅ黙目かな

「え……？」

「やんなきやいけないことがあるだろ？心配しなくても、ドラグレッダーと協力すれば、空戦だって何とかでできるよ」

驚くなのは、真司はべもなくうつむかせる。今の彼女には、みなと向き合つ時間が必要なのだ。

「確かに戦えるだろ？ナビよ、今更メンバー変更つて、ちやんとはやてに許可取らねえと」

「だったら、今から聞いてみてくれないか。俺となのはの交換が〇×かどつか

ヴィータの渋る言葉にもすぐれず返す真司。それを見て、ヴィータも彼が本気だとこうことを語る。

「わかった、今から聞いてやるよ。はさて、聞こえるか。急な頼

みで悪いけど、出撃メンバーからなのはを降ろして、代わりに真司を入れてもいいか？」

はやてとの念話を始めるヴィータ。真司はそれを神妙な面持ちで見せる。

なんやでー？何で急にそういう案が出てきたんやー？

そう言われてもな…ほら、色々あるんだ。色々

……はあ、ちょっと私が田を離したすきこえりい話が進んでいるよ。まったく、これやから部隊長なんて立場は……ま、ええよ。その代わり、後でちやんと話はしてな

ああ、サンキュー

念話を終え、ヴィータは真司の方に向き直る。

「オッケーだ。やうと決まればさつと行へば」

「ひ、ああーありがとなー」

「せつてすぐに、真司とヴィータ、フロイトを乗せたヘリが飛び立つた。

それを見届けた後、なのははフォワード陣を見て、一呼吸止めた。

「みんな。ちよつと話があるんだけど、いいかな」

一方、一ぱいはヘリの中。戦闘態勢を整えながら、ヴィータは真司に尋ねる。

「なあ真司。お前、なのはの過去……」

「せつて聞いたよ。だから、後はティアナ達が教えてもらひただけだ」

「やうか……」

しばしの沈黙。誰もしゃべらない時間が流れ続ける。

やがて、その沈黙を破つたのはフュイトだった。

「真司、本当にありがとう」

「うへあへー！それはあたしが先に言おうとしてたのにーー！」

なかなか言葉を切りだせなかつたヴィータが悔しそうにフュイトを睨む。

「え？ なんで2人が俺に礼を言つことになるの？」

そして、感謝される側は状況を理解できていなかつたりする。

「当たり前だろ。お前はあたしらの大切な友達を止めてくれたんだ」

「私達ができなかつたことをせつてくれた。それだけで、感謝の理由にせなるよ」

「…………せつか

バイータとフォイトの言葉を受け、真向もみづかは納得しただけだ。

が。

「それにしても、お前すぐーよな。コラッターがあつたとほこえ、なのはに勝つちまつなんて」

「…………へ？」

次の瞬間、信じられないことじこつたような表情になる真向。たった今、聞き捨てならない言葉を耳にしたよくな……

「あれ？お前知らなかつたのか？あたしらは普段事情があつてリミッターをかけるんだ。なのはの場合、そのせいで魔力量だけで考えりや初めて魔法を使つたときよりも低いんだぞ」

「…………おひそひしー」

想像もつかない、なのはをはじめとする皆の『本気』に、真司はそういうふやくことしかできなかつた。

「……わてと」

やつ置いて、なのはは隣にいるティアナの方に顔を向ける。

なのはによる昔話と、彼女の気持ちが語られた後。なのはは、ティアナひとりを呼び出した。2人きりで話がしたかったからだ。

……まあ、なのはとティアナは気づいていないが、少し離れたところで茂みに隠れるスバル、エリオ、キャロ、フリード、そしてシャ

ーリーがいるため、全然2人きりではないのだが。

「…私が色々お話したから、今度はティアナの気持ち、聞かせてく  
れないかな」

大切なのは、互いの気持ち受け止めること。だからなのはは、ティ  
アナの想いを知りうと、彼女に語りかける。

ティアナも、先ほどなのはの教導の意味を知ったため、素直に問  
いに答える。

「私は……やっぱり、一刻も早く執務官になるつていう夢を叶えた  
いと思つています。そのために、とにかくがむしゃらに前に進みた  
いという気持ちがある」とは、確かに

「…そう。でも、私のみんなに無茶をさせたくないって気持ちも本  
物なんだ」

「それは、もちろんわかつてます。なのはさんが、私たちのことを  
想つて、基礎を固めようとしてくれていたこと……だから、今日は  
本当にすみませんでした！」

勢いよく頭を下げるティアナ。だが、なのはもそれに対し、深く頭

を下げる。

「私も、本当に」「めんね。ティアナや他のみんなと、しつかり向き合おうとしたしなくて」

「いえ、私の方が悪いです！」

「いやいや、私も……って、こんな譲り合いはやめた方がいいね」

謝罪合戦というわけのわからないものになりそうだったところを、なのはが強制的にストップさせた。

そして、2人は無意識に空を見上げ、星を眺める。現在交戦中であるメンバーは、つまくやっているだろうか。

そんなことを少し考えた後、なのはは再び口を開く。

「でも、一応は考えていたんだよね」

「え？」

「クロス//ラージュ、貸してくれない？」

「は、はー……」

言われるままにクロス//ラージュを渡すティアナ。それを受け取ると、なのははそれに呼び掛かる。

「システムリミッター、トストモードリース

Y e s

「命令してみて。モード?って

クロス//ラージュを返してもいたティアナは、よくわからなってまことに迷つ。

「モード?……」

S e t u p D a g g e r m o d e

「う…………」

直後、ティアナは起こったことに絶句する。

クロスマリージュから魔力で造られた剣先が出現し、接近戦用に変化したのだ。

「……執務官志望のティアナは、いずれここを出て行けば、個人戦も当然多くなる。そう思って、用意だけはしておいたんだ」

そう言いながら、なのははティアナに向かって微笑んだ。

「……うわああああ…………！」

そこで、ティアナの感情が爆発した。泣きじゃくる彼女を、なのはは優しく抱きしめ続けた。

10分ほど経つと、ティアナはようやく泣きやんだ。

「落ち着いた？」

「……は、はい。すみません、取り乱しちゃって……」

恥ずかしそうに顔をうつむけるティアナ。

「いいんだよ、そんなこと。誰だって、周りの人には甘えたつていいんだよ。……これ、真司君の受け売りなんだけどね」

「真司さん…………？」

その名を聞いた途端、ティアナははつと顔をあげる。

「うん。真司君がいたから、私は大事なことに気づけたんだ」

「……私も。真司さんのおかげで、あまり無茶をしすぎるともあ  
りませんでした。ここ数日、ずっと見守ってくれて……」

「……優しいよね」

「料理も上手ですし」

「大切なこと、教えてくれるし」

「こやつて時には本当に頼りになるし」

「「なんか、素敵だなあ～……」」

言い終わった後、互いのセリフが彼た二人に残り、なのほどトイ  
アナは互いを見つめあつ。

「これは……ちょっと負けられないかな?」

「魔法に関してはまだまだ敵いませんが……」口にに関しては、譲  
るつもりはありませんよ」

そんな火花バチバチの様子を見ている野次馬達は。

「うわあ……なんだか予想外の展開に……」

「いや、でも逆に予想通りだったような気も……」

「お、大人の恋……なのかな？」

「ど、どうなっちゃうのかな……」

「きゅ～……」

スバル、シャーリー、エリオ、キャロ、フリーードと、それぞれが困惑しながら言葉を発する。

だが全員、何だかんだでこの展開をおもしろがっている節もあったとか、なかつたとか。

## 第十一話 たいせつなこと（後書き）

結論：「ライダーは助け合いでしょ！」てことですかね。互いが互いを支えること。本編Striker's 9話を見て一番ひつかつたのは、「あれ？結局なのはひとりが無茶することになるんじゃね？」ことですし。つーか今回僕にとっては史上最長の文字数だったので、もう限界です……詰め込み過ぎた。本当は真司とティアナの会話も入れる予定だったのですが、次回に回します。

そんな次回は真面目じゃない展開です。いわば夏の井上脚本です。つて、W以降これなくなっちゃったんだっけか……まあいいや。

では、また次回。

## 第十二話 欲望渦巻く戦い・前篇（前書き）

大変長らくお待たせしました。ようやくと続ხです。

## 第十二話 欲望渦巻く戦い・前篇

「…………」

城戸真司が気づいた時、彼は人ごみの真っただ中にいた。せわしなく歩いて行く人々。周囲には見慣れた建物の数々

「…………元の、俺のいた世界！？」

まさか、という期待感が一瞬頭をよぎったが、それはすぐに混乱へと変わる。

「つー？ 体が動かない…………」

どこにどれだけ力を加えても、棒立ちのまま体が言うことを全く聞かない。まるで見えない糸にがんじがらめにされているかのようだ。

「くそ、夢なら早く覚めて

「

と、その時。

少し向こうに立っている人間の瞳が、じつとこちらを見つめていることに真司は気づく。10秒、20秒経つてもまったく視線をはずさず、ふりも見せず、ただ、まっすぐに。

「……君は」

瞳の主は、ひとりの少女だった。なのはより少し低いくらいの背丈に、黒髪はティアナのようにツツツツツツにされている。いわゆるシンテールという髪型だ。

そして何より特徴的なのが、右目につけられた白の眼帯。なぜだか真司は、その隠された瞳に引き込まれるような感覚を覚える。

「君は、一体……」

真司の声は、届いているのかそうでないのか。少女は小さく笑うと、ゆっくりとこちらに歩み寄って来る。

一步、また一步。体の動かない真司は、そんな彼女の動きをじつと見つめている。

そして、真司の目の前で足を止めた少女は、その手をゆっくりと上げ、真司の顔に

「ハツ」

ベッドの上で辺りを見回す。間違いなく機動六課の宿舎の自分の部屋の中で、午前3時半を示した時計が目に入った。

「……夢か」

会った覚えもない少女が夢に出てくるなんて変だなと思いつつも、真司はもう一度眠ろうと布団をかぶる。

ちゃんと睡眠を取つておかないと、シグナムの鬼訓練に耐えられそうもない。

「…………うだべ、疲れたあ」

よつやつと訓練が終わり、夕食にあつつくために食堂に向かつ真司の足取りは、いつも以上に重い。

夜中に起きてしまったのは、おそれく直接の原因ではない。問題だつたのは

『城戸、今日はこれをつけヒランニングだ』

『…………あの、シグナム？俺の田<sup>ミ</sup>がおかしくないんだとしたら、君が指さしてこられるのはよくあることありますから、あいつそいつな亀の甲羅なんだけど』

『まつ、見ただけでもよく重をまでわかったな。主はやでがお前のため用意してくれた。ありがたく使わせてもらつんだな』

『はやて達のいた地球にも超有名漫画はあるんだな……』

ところの会話の後、本当にこの甲羅を背負って走らされたのだった。これから毎日こんなことが続くなどとこいつことは、考えただけでぞつとする。

「どうか、これは明らかにはやてが漫画のネタを面白半分でやらせてるだけだな……シグナムさん。少しほんの言ひひとを疑つてくれだれ」……

「部隊長が、何やつ?」

「いや、だから……ついつわあー…はやて、いつの間にー?」

まったく気づかないうちに隣を歩いていた機動六課部隊長に驚き、すっとんきゅうな声を上げる真司。

「ふつふつふ。部隊長には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わってるんやで?」

「何それ…………てか、シグナムに滅茶苦茶なこと吹き込むのやめてくれよ。俺は別に天下一武道会に出る気はないんだぞ?」

「…あれ、迷惑やつた？」

「当たり前だ！」

呆れたよつて言つた真司だが。

「……そつか。すまんすまん、ちょっと悪乗りしちゃあたわ」

そのときやての顔つきが急に暗いものに変わる。

「……私、小さい頃足が不自由でな。その時読んだ漫画に出てくる、大空を縦横無尽に駆け巡る無敵の主人公ってやつに憧れとったんや。せやから、今もその気持ちが残つてしまつて、つい……な」

なぜか哀愁たっぷりのBGMが流れているような感覚を覚えつつ、真司ははやての言葉を聞き

「や、そつか……大変だったんだな。そういう事情があつたなんて知らずに、頭！」なしに文句言つちやつて、「めんな」

「別に真司君が謝ることやあらへんよ（ふつ、じゅうじきゅう） やな）」

ちやつかり彼女の言葉に踊らされてしまつのであった。

「あつー…そつそう、言い忘れとつた。夕食が終わつたら、真司君の部屋にみんな集まるから準備しといてや～」

「…………え？」

「とゆーわけでー!これより第一回『集え歴戦の猛者たち!人生ゲーム at 城戸真司の部屋』を開催しまーす!!」

「　　」

「あれ、どうしたんみんな？まるで『ツッコミ部』が多すぎて何言えばいいのかわからない』て思つとるような顔して」

「わかつてんじゃん……」

他の人間を置いてきぼりにしたはやての突然の宣言に対し、よつやく真司が口を開く。

現在地は真司に『えられた個室の中。はやてが言つた通り、結構な人数が狭い室内に集合している状態である。

既に名前の出た2人を除くと、なのは、フェイド、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ヴィータ、シグナムといった面子だ。

「それで、これからみんなで何をするの？さつき人生ゲームって言つてたみたいだけど」

なのはの質問に、はやてが待つてましたとばかりに説明を始める。

「その通りや。今からここに集まつてもらつた10人で人生ゲーム

をプレイする。…」の中で人生ゲームがわからんって人はおる?」

「……えっと、ルーレットを回して結婚とかいろいろ通してお金を見貯めるボードゲーム、で合ってる?」

果たして異世界でも同じ代物なのかと不安を抱きつつ尋ねた真司の言葉にうなずくはやべ。

「正解や。やっぱり違う地球でもそこそこ共通じるところがあるんやな。ドクターボールネタも伝わったし」

真司の他にルールに不安を持っている者がいないことを確認し、はやては説明を続ける。

「せやけど、もちろんただ人生ゲームで遊ぶためだけにわざわざみんなを呼んだわけやない。……ズバリ、この勝負で1位になつた人は、ゲームの参加者ひとりに好きなことを命令できるっていうのはどうやー?」

はやての提案にざわめく一同。当然だつ。勝てば文句なしに得をすることがでくるが、2位以下になればどんな命令をやれる可能性があるのであるのだから。

「おもしろいがひじやねえか。その勝負乗つた

一番に名乗りを上げたのは、いかにも好戦的な表情になつてゐるヴィータだ。彼女が勝つて命令しようとしている内容は

「お前も参加しろ真司！あたしが勝つてギョーザアイスを作らせいやるぜ！」

「何そのいかがわしい食べ物！？……でも、アイスで思いだしたぞ」

そり、あれはホテル・アグスタの警備よりも前の日のこと。

「あ、真司君。やつと見つけたよ～」

「ん、何か用、なのは？」

食堂でたむろしていた真司になのはが駆け寄ってきたかと思つて、彼女はひんやりとした感触がするものを手渡す。

「アイスクリーム……？」

「有名なところが作ってる高級品がたまたま安く売つてたからって、シャマル先生がみんなにひとつずつ買っててくれたんだ。真司君で最後の1個だよ」

「本当に……うわあ～、太つ腹だなあシャマル先生。今度会つたらお礼言わないと」

「こやははは、そうだね。じゃあ、私行くところがあるから…」

「わざわざ届けてくれてありがとな～」

走り去るなのはの背中を見送つた後、真司は食堂の椅子に座り、しばらく高級バニラアイスクリームをつゝとり眺める。

「…………」うのうの食べるの生まれて初めてだから、緊張するな、はは…

ややあつて、そろそろ食べようかと机の上のアイスクリームに手を伸ばそうとした瞬間。

ひょいと誰かの腕が伸びたかと思つと、机の上のアイスが忽然と消えていた。

「…………え？」

腕が出てきた方を振り向くと、そこにはアイスを持って澄ました顔ですたすた歩いて行く、ヴィータの姿が。

「つひおいイ！？ちょっと待てえ！」

あまりに自然な動きだつたため一瞬呆けた真司だつたが、すぐに椅子から腰をあげ、ヴィータの元へ走る。

「…………何だよ。先に言つておくけど、このアイスは食堂の机の上に落ちたのを拾つただけなんだからな」

「俺が置いてたの！だからこれは俺の物」

ひょいと真司がヴィータの手からアイスをかすめ取る。

「あつ！？何すんだテメエそれはあたしのもんだ！！」

ヴィータが真司の手からアイスを奪い返す。

「いや、だから俺のアイスだって」

真司が取り返す。

「いーや、あたしが拾つたんだからあたしのだ

ヴィータが奪い返す。

「だーもうーだから違うって言つてるだろー子供かー」

「うるせえーアイスはあたしの大好物なんだーしかもこんな高級モノ、ひとつ食つただけじゃ物足りねえ！」

そう言いながら真司の手をはねのけ、ヴィータは逃走を始める。

「あー、待てヴィータ！！

真司も走り始め、追いかけっこの開始だ。

「待てて、言つて待つ馬鹿はいねえよー。」

「（）で待たない方が精神的に馬鹿だよー。」

ぐるぐる食堂の中を回り続ける二人。その表情は必死そのものだ。

「 ねえエリオ君。真司さんと、ヴィータ副隊長、何してるんだ  
る？」

「……まあ、ものすごい形相で追いかけてるナビ

そんな中食堂に立ち寄ったエリオとキャラロ、田の前で繰り広げられる謎の光景にぽかーっと突っ立つてことしかできなかつたのだった。

「あ。ヴィータ副隊長が転んだ。真司さんが追いついたぞ」

「…ひて、今度はヴィータ副隊長が真司さんをひつ張つて転ばせた

「……あ、眞司さんのお腹ですか」パンチが……

「あの時に結局奪われてしまったアイスクリーム……人生ゲームで勝つておじつでもううござ、ヴィーター！」

「上等だ…やれるもんならちつとみなー！」

「お～、早くも2人がノリノリやなあ～。さあ、他のみんなも、勝つたり何でも言つと聞こてもうえんこやで？」

はやてのやの言葉にびくじと反応したのは

「……わかりました。私も参加します」

先ほどからひらひら眞司の方を見ているティアナだった。

「あ～、ティアが参加するなら私も～！」

「オッケー、ティアナとスバルやな。他には？」

「……じゃあ、私もやるうかな」

今度はなのはが、ティアナの顔を一度見てから参加宣言。

「よつしゃ、なのはちゃんも参加つと。後残つとんのは……シグナム。シグナムは参加せんの？」

先ほどから黙つたままのシグナムにはやてが気づき、声をかける。

「……私は、いついたものはあまり得意では

「ほつ、では逃げると」

「いえ、逃げるとかそういうことでは

「

「アカンなあシグナム。本当に強い人間は、人生ゲームやろうが何やろうが、絶対逃げたりはせんのやで。……シグナムはええんか？ 強くなれんままでええんか？」

「… もうこのものですか。それなら、参加させていただきますよ」

はやての口車に乗せられ、シグナムも参加決定。

「……………わ、フロイトちゃんは

「わ、私は遠慮せてもいいおつかな」

はやてが何か言つ前に回避しようと、フロイトが先に断つの言葉を入れる。

入れたのだが。

「…………なんやで～このタイミングでやらんって…………楽しみにことこのこと、まだ小さなヒリオとキャラが残念がるで」

「……いや、2人とも真司とヴィータのやり取りにむしろ引いてたようだな」

フロイトがそう言しながらヒリオとキャラの方を振り向くと。

「う、うわあー、人生ゲームって楽しそうだね、キャロ（棒読み）」

「そ、そうだねー、わくわくするよー」ヒリオ君（棒読み）

「ほり、やる気満々やろ?..」

「……明らかに周りから威圧されてるだけに見えるんだけど

「そんなことあらへんよ~」

「……参加します」

結局根負けしたフヨイトは、深く深くため息をついた。

## 第十二話 欲望渦巻く戦い・前篇（後書き）

といつわけではやて大暴走回でした。ライセンス云々のセリフは中の人つながりです。久しぶりに更新したと思ったら完全ギャグ回で申し訳ありません。

ですがまあ、一応冒頭の真司の夢は大きな伏線です。夢の中の少女ももちろんオリジナルキャラです。うまくストーリーを開拓できるかが勝負ですね。

次回は人生ゲームプレイです。それぞれが叶えたい願いにも注目。感想や評価などあれば、お気軽に寄せください。

では、また次回。

## アンケートと雑談（前書き）

本編はまだ投稿できません。すみませんが、もうしばらくお待ちください。

## アンケートと雑談

あー、最近寒い……これからまだまだ気温が下がると想つとぞつとしますね。

クライマックスヒーローズオーブは楽しいです。ちびちびラグナロクモードを進めて、もう少しで橘さんが出せそうです！何かもずくに浸かってた時の状態らしいけどまあいいやーてか剣崎のセリフに「俺は今、無性に腹が立つてやる！」とかあるあたり、スタッフは狙っているのか……？一方龍騎はドラゴンナイトのおかげで全ライダー参戦、しかも超必ありの優遇っぷり！え、オルタナティブ？だってあれはライダーじゃないし……

まあ、雑談はこのくらいにして。

実は、2つばかりアンケートがあるので、よろしければお答えいただけだと嬉しいです。

1つ目はこの作品の恋愛についてです。現在なのはとティアナにフラグが立つており、これからも増えるかもしれません（もちろんオリキャラも含む）。そこでお聞きしたいのですが、最終的に真司と誰かがくっつくのはアリなのか、そうであれば誰がいいのでしょうか？ちょっと迷っているので、よろしければご意見を頂きたいです。

2つ目はこの作品とは関係ないのですが……今完結に向けてスパートをかけている作品が終わったら、オリジナル作品を始めようかな、という気持ちが少しあります。2つ候補があつて、概要は以下の通りです。

1つ目：何かよくわからないうちに全然知らない赤の他人の体に魂

が入りこんでしまった主人公が繰り広げる、学園「メディー + 能力バトルもの。ヒロインは「クール系のバトル少女」・「活発な同級生」「ませた口リキキャラ」を予定しています。

2つ目：特にこれといった特徴もない男子高校生である主人公の日常を描く完全学園コメディーもの。ヒロインは「小難しいことを言うちょっと一般女子からずれた女の子」「主人公にやたら厳しい体育会系委員長」「優しくて気が利く眼鏡っ子」の予定です。

仮に始めるとしたらどちらがいいでしょうか？この質問は活動報告にも書いたのですが、よく考えたら僕の活動報告なんて読んでる人はそういうことには気づきました……

アンケートは以上です。「ご回答をいただけると、これから励みになります。気が向いたらでいいのでよろしくお願ひします。

## 第十四話 欲望渦巻く戦い・中篇（前書き）

ミッドチルダの通貨がわからなかつたので、人生ゲーム内でのお金は単位なしです。」了承ください。

それともうひとつ、今回は史上最大のカオス具合です。

## 第十四話 欲望渦巻く戦い・中篇

そんなこんなで始まることとなつた人生ゲーム。

以下、参加者の心内状況。

「ふふふ……なぜフェイトちゃんとシグナムを強引に参加させたか。それはこの勝負に勝つてどっちかの胸を存分に揉ませてもらうためやー！」 BY 機動六課部隊長

「必ずギヨーザアイスを作らせてやる…楽しみだなあ、真司ー！」 BY 幼そうに見えて意外と頭の切れる守護騎士

「今こそリベンジーヴィータに敗者の屈辱を味わわせてやるぞー！」 BY 迷子の民間協力者

「…勝つて強者に一步近づく」 BY 主に忠実なバトルマニア

「なんか異常に気合いが入ってる人たちがいるけど、私はとりあえず真司さんの餃子を口指して頑張りつゝヒー！」 BY フォワード陣一の元気娘

「……ここで勝つて、罰ゲームとして真司君と一緒に出かけて……負けられないね」B Y管理局のエースオブエース

「…どなのはさんは考へてゐるはず。だけどその作戦は私が実現させん!」B Yフォワード陣の頭脳

「…み、みんな怖い……」B Y純真無垢な年少ズ

「……もひりでモなれつてとこかな」B Y音速の執務官

「とまあこんな感じで、やる氣のある人もいれば怯えている人、既に諦めている人もいる状況ですが、皆さん頑張つてください!実況は私リインフォース?がお送りいたします!」

『じつ もよーセき』と乱雑に書かれた段ボールの上で叫ぶリイン。じつじつことに関してノリがいいのは主に似たのか。

「解説にはなんと!あのX Y級艦船『クラウディア』の艦長であるクロノ・ララオウン提督にお越ししていただいています!クロノ提督、今日はよろしくお願ひします」

「ああ、よひしく……つて違ひー僕は噂の『龍騎』がどんな人物か  
を見に来ただけなのに、どうしてこんな状況になつているんだ！？」

「まあまあ、いいじゃないですか～。ほら、妹さんも楽しそうです  
よ～」

「いや、むしろ一瞬やる気無さそうに見える

「おつヒールーレットを回す順番が決まつたよつです。いよいよ激  
戦の火蓋が切つて落とされます！」

クロノの言葉をあつさりスルーし、ラインが試合開始を宣言する。

「ちなみにスローガンは『その欲望、解放しろ』です！」

「もつとまじなスローガンにはならないのか……」

兄妹そろつて振り回されているハラオウン家だつた。

「というわけでプレイする順番を決めようと思つたやうだ……今日の夜カレー食べた人ある？」

「え？ あ、はい……」

はやての一見脈絡のないその質問に、戸惑いながらも、今晚カレーライスを食べたキャロがそろそろと手を上げる。

「あ、じゃあキャロから時計回り順で決まりや」

「ううえええーーーどう決め方なんですかそれーー？」

驚くキャロだが、最初にルーレットを回すのは多分有利だろうと思いまおし、素直にプレイを始める。まわりに気圧されてはいるが、始めた以上は一番を目指してみようと考えてはいるのだ。

「私は専門職コースに進みますね。えいっ」

カラカラとルーレットが回る。その様子をじっと見つめる一同。

ルーレットが動きを止め、指した数字は『6』。それに従い、キャラロは『専門職コース』へ駒を進める。

人生ゲームは、最初の10マスほどが2つの道にわかれている。『ビジネスコース』では初期の職業はサラリーマン（月給8000）に固定され、一方『専門職コース』では止まつたマスに応じて様々な職業になることができる。それらの職業はどれもほとんどサラリーマンより優秀なのが、ほかのプレイヤーが先にその職業になってしまつていたり、大きすぎる数字をルーレットで出してしまえば、フリーター（ルーレットを回してでた数×1000）になってしまふため、順番が後ろの人間にとつてはリスクが高い選択となるわけだ。当然、どちらのコースに進むかはルーレットを回す前に決めることになっている。

キャラロは一番手だったので迷わず専門職コースに進み、『プログラマー（月給15000）』の職業をゲット。

「うーん…まあまあかな」

「じゃあ次は私の番だね。専門職コースで行くよ

2番手はフロイト。いちいち早く順番なので、特に思慮せずにコースを選び、ルーレットを回す。

が。

「……10?」

駒を10マス進めると、そこは『給料日』マス。……つまり、職業獲得マスをぶつち合ってしまったわけである。

「あーっとフロイト選手ーー10%のアンラッキーを引いてしまった、これは痛ーい!」

「早めに職を取らないと危険だな……どん差が開いてしまう

実況席ではリインとクロノが誰に向けて発しているのかわからない実況および解説を行っている。クロノも渋々ながら役を引き受けたらしい。

「……まあ、絶対1位にならなきゃいけないわけじゃないし、まだまだいけるよね」

気を取り直して自分に言い聞かせるフロイト。他のプレイヤーが本気のガツンポーズを連発していても、気にしない気にしない……

その後も続々とルーレットを回して行き、とりあえず一巡が終了。

「さて、一巡目が終了して全員の職業が決定しました。一番手のキヤロ選手がプログラマー、二番手のフロイト選手がフリーター、三番手のなのは選手が先生（月給12000）、四番手のはやて選手が政治家（月給30000）、五番手の真司選手がスポーツ選手（年俸1200000、職を変えない限り月給なし）、6番手のシグナム選手がサラリーマン、7番手のティアナ選手が医者（月給25000）、8番手のスバル選手がサラリーマン、9番手のヴィータ選手がタレント（月給がルーレットを回して出した数×5000）、10番手のエリオ選手がサラリーマンとなりました。解説のクロノ提督、これをおど思ひますか」

「やはり後半の人間はリスクを恐れてサラリーマンを選んだ者が多いた。その中で高月給の医者とタレントを引き当たた2人はなかなか幸運だと言えるだろう。現時点では有利なのはこの2人に加えて、はやてと次点で城戸君といったところかな」

すっかり冷静に解説しているクロノ。というのも、昔フェイトがハラオウン家の養子に来た直後のころに兄としてどう接していいかわからなかつたためにたまたま母が買ってきた人生ゲームをやりまくつていたという背景があるため、このゲーム自体にはかなり精通しているからだ。

……その時から気づいていたことなのだが。

「よつしゃ、大食い大会優勝で200000ゲットだぜー！」

ヒヴィータが歓喜すれば。

「スリにあつて200000損失、か……」

その傍らでフェイトはただでさえ少ない所持金をさらりとすり減らし。

「おつ、株価がアップで1枚ごとに100000の利益や！ 儲け儲け

」

とはやでガツツポーズを取った次の番では。

「火災で自宅が全焼……全財産を失う。お金がなかつたから火災保

険にも入ってないし……折角わざわざサワコーマンになれたのになあ

フェイドが完全な一文無しになっていた。

「……何かを賭けている時のフェイドの勝負運のなさは、まさしく  
マジックだ……！」

戦慄の表情を浮かべるクロノ。最初のやる気のなさはビックリ行って  
しまったのだらうか。

「おおっと、ここで兄から衝撃的な事実が明かされたー！ もはや勝  
利は絶望的なのか、フェイド選手ー！」

実況席はフェイドのことでも勝手に盛り上がっていたのだが、その頃  
ルーレットを握る手に汗がにじんでいる者がひとり。

「…………（ハク）」

「どうしたのティア？早く回しなよ」

いつまでたっても動かないティアナを気にして、スバルが声をかける。

「……ええ。今、回すわ」

現在の状況……ティアナの駒は、いわゆる『ギャンブルマス』に止まっている。

内容は、『10000支払った後ルーレットを回し、7が出たら所持金の5倍の金額をもらえる』といつもの。

「（）で7を出せば、圧倒的優位に立つことができる。勝利に向けて、大きな一歩を踏み出せる……（）」

ティアナが思い出すのは、数日前の真司との会話。

なのはと和解し、直後に宣戦布告する」ととなつた日の翌日のこと。

「あっ…真司さん…」

「ティアナ。どうしたの？ やけに真面目な顔して」

通路を歩いていた真司をティアナが呼びとめると、彼は不思議そうな顔をしてそう尋ねてきた。どうやら無意識の内に顔が強張つていたらしい。

「……本当に、本当にありがとうございました！ なんてお礼を言つたらいいか…」

勢いよく頭を下げるが、真司はあわてて首を横に振る。

「わわ、ちよ、ちょっと待つてよ。そんな風に頭下げてもうつとうなことした覚えはないよ。ティアナが大事なことに気づいたのは、なのはと話しあつたからだろ？」

「…確かにそうかもしれません。だけど、そこまでの道を作つてくれたのは真司さんです。私なんかのために毎日特訓に付き合つてくれ

れて、私のことをなのはさん伝えてくれて…… 真司さんがいなかつたら、私はまだ悩んでるままだったに違いないです」

感謝の思いを伝えようと熱心に話したところ、ようやく真司も自分のやつたことの重要さを認めたらしい、照れが混じった表情でうなずく。

「まあ、とにかくティアナが元気になってくれてよかったです。これからは、困ったことがあつたらどんどん言つてくれよな」

「あっ……」

彼の笑顔に、再び兄の面影を見つけるティアナ。

その時、ようやく彼女は理解した。

城戸真司は、兄に似ていて、かつ兄とまったく異なる人格の持ち主なのだ。守りうとする強さと、時に相手を無警戒にするその雰囲気いい意味で、『馬鹿』なのだ。

「あの、真司さん……」

「ん？」

「」の先の言葉を口にしそうになると、緊張が体全体を支配する。頬が火照り、あまりの熱さに今すぐまわれ右したくなってしまうだ。

「（……それでも、言わなきゃ）」

気づいた気持ち。なのさとともに確認し合つた想いを、田の前に立つてこる青年に伝える。

「私、真司さんの」と……

ティアナ・ランスターは、城戸真司のことを

「馬鹿だと思いまー！」

間違えてとんでもないセリフを口にしてしまった。

「（つて違う〜〜〜〜〜確かに真司さんのことはす”）”いい意味での馬鹿だと思つてゐるけど、こんな風に言つたらただの罵倒になっちゃ

「ひじじゃない！」

「そ、そんなん……こきなりそんなことをぶつちやけないでも……」

「予想通りに落ち込んでるし…真司さん違うんです、今の言葉はですね」

「

心に深い傷を負った真司に対して、ティアナが弁解しようとしたその時。

「真司さん…餃子作るのが上手ってティアに聞いたけど本当ですか！」

大食い少女・スバルが目を輝かせて勢いよく乱入してきた。

あの後結局真司との会話はいつもやになり、ついでにスバルを通し

て機動六課全体に真司の餃子のことが広まつたのだった。

「（あの時は失敗してしまい、それ以来恥ずかしさが先行して真司さんには気持ちを伝えられずじまい。だからこそ、この勝負に勝つてデータに説いて、何とかタイミングをつかむのよー。）

そのために、この人生ゲームには絶対に負けられないのだ。

「おっとこれは！テイアナ選手、なんと回想戦法を使つてきました！」

「…なんだそれは」

「回想戦法……それは今までの出来事を思い出すことによって負けられない理由を提示し、勝利を呼び込む高等な技なのですー。」

クロノの質問に丁寧に解説するリイン。本当にそれは戦法と言えるのだろうか。

「……私は、負けない！」

そんな中、ついにティアナがルーレットを回す。

「す、すごい回転……！これは……」

スバルが驚くように、渾身の力が込められたルーレットは、ティアナの思いの強さを表すかのようにものすごい回転数で回り続ける。

やがて、ルーレットが回転を止め、指した数字は

「…6、ですって……？そんな、馬鹿な……」

打ちひしがれるティアナ。神は思いを聞きいれてくれなかつたようだ。

「……まあ、はつきり言つて回転数は関係ないしな

今更な感じのクロノのシッ ハニガ、空しく宙に響いた。

「はい、といつわけで今回はここまでです！さあ、次回はいつたい  
どのよつた展開が待ち受けているのでしょうか！」

「ま、待て！まさか」の話を次回まで引つ張るつもりか

「？ちりですよ～、何か問題でも？」

「……大丈夫だらうか」

## 第十四話 欲望渦巻く戦い・中篇（後書き）

とこりわけで終わる気配すら見せずに次回に続くことになってしまった。なんでこんな力オスになつたんだろう……不思議です。さて、まあさすがに次回で終わらせますが、果たして勝者は誰になるのでしょうか。後々につながる伏線も入れようと思つていますので、物語の本筋の方にも期待しておいてください……一応。

感想や評価などあれば、気軽に寄せください。作者が大喜びします。

では、また次回。

……年を越せなかつたガメルとメズールに黙祷。

## 第十五話 欲望渦巻く戦い・後篇（前書き）

新年あけましておめでとうございますー今年もよろしくお願ひします！

## 第十五話 欲望渦巻く戦い・後篇

「まあ、ゲームが中間あたりにさしかかったところで、現在の状況を確認しておきたいと思います！」

というわけで、リアルの人生に影響を与えるかしない人生ゲームの実況が再開される。

「まず1位を走っているのはこの勝負を提案した八神はやて選手！やはり政治家という職業が効果的に働いているのでしょう。しかし駒が一番進んでいるのはヴィータ選手！最も高価な家を購入しており、どちらが有利かは判断しがたい状況です！」

「2人以外の選手も引き離されないようなんとかついて行っている。まだ半分終わっただけだ、逆転の芽は十分残っていると言えるだろう……」

と、なぜかそこで意味深に言葉を切るクロノ。彼の視線の先には

「……未知の管理外世界で遭難だつて。あはは……」

ひとりだけ借金を作り、おまけに駒も完全に遅れているフロイトの

姿が。…あまりの不運ぶりに自嘲の笑いまで出でている。

「……ひとりを除いては、だが

「おおっとーーー」で解説のクロノ提督がフェイト選手の負けを確信しました！ですが私リインフォース？はあえて彼女に賭けてみたい！舞台は整った、今が逆転の時だーーー！」

一方「ひらは選手サイド。

「（ふつふつふ……）まではとりあえずアシスタントや。フェイトちゃんは早くも脱落確定やし、他のみんなも引き離してやるでーーー」 B ゆ邪悪な笑みを浮かべる部隊長

「（2位だが下地は）ちらが有利！ フェイトの不幸ぶりには同情するけど、勝つのはこのあたしだ！」 B ゆ好戦的な目つきの守護騎士

「（3位か……でも最後まで勝負がわからぬからこのゲームは人気なんだ。それを今から見せてやる……）」 B ゆ首をかしげる民間協力者

「（9位……私もまだまだということか。テスタロッサはそれ以上  
のようだが……）」B Y何かを勘違いしているバトルマニア

「（6位だけじ、まだまだ優勝を狙える位置だ！頑張るぞ～）」B  
Y周りの殺氣などどこ吹く風の元気娘

「（4位があ。でも、私には負けられない理由があるからね）」B  
Y静かに闘志を燃やすエースオブエース

「（ぐつ……5位はなかなか厳しいけれど、諦めたらそこで闘いは終  
わりよ！絶対真司さんと………）」B Y欲むき出しのフォワード陣  
の頭脳

「「（……フュイトさん、大丈夫かな）」」B Y上司の心配をする  
年少ズ

「（あ、あはは……これは、ちょっと予想以上だなあ……）」B Y  
笑うしかない執務官

若干例外はあるが、まだまだ皆やる気満々である。

「 5か……はい、次はフロイトさんの番ですよ」

「うん……」

キヤロに声をかけられ、おもむろにルーレットを回すフロイト。もはやぶつちぎりのズシリが確定的になつた状況で、一体何のために駒を進めるのか？そんな感じで心が折れそうになりながらも、一度始めたからには最後までやるのがルールだと思いなおし、彼女はプレーを続行する。

……そう、彼女は自身のゲーム運のなさに絶望していたのだが。

「……あ、サラリーマンの平社員から部長に昇進だ」

「よかつたな～フロイトちゃん（せやけじ、時既に遅しやで。もうフロイトちゃんと私の間にには越えられない壁ができあがつとるからな）」

給料アップを喜ぶフロイトに対し、まったく危機感を抱かないはやて。

次の周回。

「あ、宝くじが当たって80000獲得。やっと風向きがよくなつてきたかな」

「（ほう、なかなかやるやないか。でも今更80000手に入れたつて、所持金7000000の私には到底……）」

もう一回周回が進み。

「臨時ボーナスで50000獲得だ」

「ルーレットを当てて100000プレゼント。やつた」

「偶然油田を掘り出して2000000の利益……むじい」

「フロイト選手またも大金ゲット！現在第5位、これは勝負がわからなくなつてきました！！」

「…し、信じられない。あのフロイトが……まるで、今まで溜めていたゲーム運を一気に吐き出しこそみつだ」

大いに盛り上がる実況席。

「……おこはやで。なんかまずくないか、これ」

「やうやな……こつの間にか差が大幅に縮まつとる」

一方、上位陣はまさかの猛追に気が気がしない。ヴィータとはやでせ、ひそひそとフロイドの危険性を語り合っている。

「す、す、す、すよフロイドさん！ 勝てるんじやないですか？」

「……うん、自分でびっくりだよ」

興奮して声をかけてくるヒリオに、フロイドは多少照れが入った返事をする。

「……とにかくや。ホールまではあと少し、くまをせんかつたら追いつかれる」とは多分ない！」

追い上げられてくるとはいえ、まだ差はそこそこ残っている。こち

らが大幅に金額ダウンしない限り、負けはないはず  
気を取り直してルーレットを回す。

はやては

……だが、彼女は失念していた。

その思考は、負ける人間が頭に浮かべるものだということを。

「……は？」大地震発生。自分を含め、前後10マスのプレイヤー  
は100000失つ……嘘やろ」

「つて俺達も巻き添えかよ！？」

「何してくれてんだはやてー！」

とんでもない地雷マスを踏んだはやて。ほとんどの駒が固まっているため、真司やヴィータなど、大多数のプレイヤーに被害が及ぶ。

「……はあ～、よかつた」 11マス後ろ

「つ、やられた……管理外世界で遭難したのも、ここで損失を免れるための伏線だつたんだ……」

ティアナの解説が入り、そんな馬鹿など打ちひしがれる上位陣。

そんな中、ひとり奮起してルーレットを回す真司。

「くっ、でもまだ終わっていないぞーここからいいマスを踏めば、俺  
の『大地震発生』……嘘だろ」

結果。

「なんとなんと、まさかまさか！あれほどぶつかりで最下位を走  
つていたフェイト選手、大逆転勝利です～～！」

「…いい試合だった」

リインとクロノの拍手が部屋に響き渡る。それを聞き、さらに負け

た事実を痛感するはやて達。

「……えーと、それでは見事1位になつたフェイトちゃん。あなたの望みはなんでしょうか」

「……本当にここのかな」

戸惑いを見せるフェイトだが、彼女に對してはやてを始め、一同が首を縦に振る。勝負は勝負、潔く負けを認めるのが筋といつものなのだ。

「えっと、それじゃあ……」

フェイトも誰かにお願いをすることを決めたより、ぐるっとまわりを見渡し

「……よかつたら、今度買い物につきあつてくれないかな……真司」

申し訳なさそうに頼み込んだ。

「へ？俺？」

「「ちゅう……むぐむぐ」」

フロイドの「『指名』に驚く真同」。一方、思わず立ち上がりついになつたなのはトトロアナは、口をせせやてに塞がれる。

「うん。ちょっと匂う物について聞いたことがあるんだね……いいかな」

「そんなんでいいんだつたり全然OKだよ」

「あつがとい。やつまつても「りえ」と助かるよ」

とこいつの感じで、覗ゲーム（？）は真同に決定。

「あー、となると……そもそも彼に血口紹介させてもいいかも……かな」

「あれ?クロノ君、いつからいたんだ?」

「絶対氣づいていただろ?」

真司の前に歩きこてきたクロノは、はやてのからかいの言葉が飛んでくる。

「『クラウド・ティア』といへ、時空を移動する船の艦長をしてこるクロノ・ハラホウンだ。よろしく」

「うー寧に、ビリサ。俺は城下真司つて言こます。うーひーひーより  
しぐお願こします、クロノさん」

「敬語はよじてくれ。せやてからいの報告によれば、君と僕は同年代  
のようだから」

何かすゞしそうな役職の人だと思つて丁寧な言葉づかいをした真司だが、どうやらそれは杞憂に終わつたようだ。

「じゅあ改めて…これからよろしく。なのは達から聞いてたよ、フ  
ライトには頼りになる兄さんがいるって」

「……そんなことはない」

そう答えるクロノの顔は、若干照れているように真司には見えた。

光あるところには、必ず影がある。それは世の中の摂理だ。

機動六課が人生ゲームに興じていたその頃。

誰も寄りつかないような廃ビルの地下に作られた大きな部屋に、  
人の男がいた。

「…おい、奴の『同期』はどうなった」

「うん?…ああ、失敗したと思つよ」

片方の長髪の男の質問に、もう一方の短髪の男は軽い調子で答える。

「……なぜわかる

「なぜって……いつも言つてゐるだろ?『俺の占いは当たる』……それがいつが不機嫌そうな顔して出て行くも見たしね」

「そういうのは『根拠のある推測』というんだ」

「あらやう

長髪の男の呆れたような調子の言葉にも、短髪の男は動じない。

「……まあ、急ぐ必要はない。今の段階では、『龍騎』は泳がせておいても構わないからな」

「悪役みたいなセリフだな。しかもそんな悪そうな笑みまで浮かべちゃつて」

「当然だ。……待ち望んでいた大願成就の時が、着々と近づいているのだからな。ふ、ふふ……」

闇は、着実に動き始めていた。

## 第十五話 欲望渦巻く戦い・後篇（後書き）

ギャグ回の最後に思いいつきり重要なシーンを入れる……まるでカブトの黒包丁回のようですね。

予想していた方もいたとおりフェイトが勝利、真司とお出かけする約束を取り付けました。彼女はまだなのはティアナの気持ちに気づいていません。おかげでこんなことになりました。

感想や評価などあれば、どんどん送っちゃってください。

では、また次回。

P・S・真司の年齢について補足です。といつのも、以前書いた設定で23歳と僕が言っていたんですが、すみません、あれ間違いです。ちょっと勘違いしていました。

確かに龍騎本編では真司は23歳ですが、実は最終回の「少しだけ幸せになつた世界」での新聞の日付が1年進んでいるんです。おそらく北岡先生の病気が治つたということを示すためなのでしょうが、これによりあの場面での真司は24歳ということになるのです。よつてクロノと同じ年。Q・E・D（ちょっとかつけてみた）

第十六話 シグナムのシグナムによる真向のための特訓（前書き）

柏原さんマジ化け物。

## 第十六話 シグナムのシグナムによる真司のための特訓

様々な思いが交錯した人生ゲームから数日後。

「……さて、お前を鍛え始めて3週間ほどになる」

いつものように開始するかと思われたシグナムによる真司の訓練だが、今日はなんだか様子が違った。

「今まで下半身の強化を中心に行つてきたが、正直に言うと少し厳しくやりすぎたような気もある。よく着いてきたな、城戸」

「俺も心からそう思つよ……結局亀甲羅を背負つたまま走る羽田になつたし」

ジャーナリストとしてあちこち走り回つたりはしていたものの、毎日毎日本格的な走り込みをさせられて、真司としてもそろそろ体にガタが来るんじゃないだろうかと本気で心配していたのだ。

「身体の基礎はできあがつただろう。…だから、ここからは実戦のための訓練に移る」

「よーーさんと来ーー。」

それでもやせぬ氣せあるひーへ、真司は威勢よく返事をする。シグナムも心なしか表情が緩むが、すぐに真剣な顔つきに戻り、口を開く。

「城戸。……お前が今最も苦戦するであらつ敵は、どんなタイプだと感づいて？」

「く~苦戦つて……やつやこつぱこあるだらへ……」

「一んと考ふ込む真司を見て、シグナムは

ヒロノシ

「わーーい、いきなつ向するんだよ」

いきなり鼻先数ミリのところに拳を突き出され驚く真司だが。

「……反応できなかつたな。私が敵だつたら、お前は殴り飛ばされていた」

シグナムの言わんとする「」と理解し、そしてハッとする。

「それってつまり……速さが足りない?」

「といつよつ、速い敵に対する対処ができない。そう言つた方が適切だ」

拳を引っ込めたシグナムは、そのまま説明に入つて話を続ける。

「『龍騎』が使えるカードは、どれも高い効果を持っている。実体のある分身を作りだす。一時的に高速状態になる。龍 ドラグ レッダーと言つたな 奴を呼び出す。……だがその反面、カードを使う戦法には大きな欠点がある」

「……同じカードは、一度しか使えない」

真司の回答に頷くシグナム。

「そうだ。連戦になればなるほど、お前はどんどん不利になつていく。特に危険なのが、スピードのある相手だ。パワーで分があるとしても、圧倒的なスピードの差の前では無意味に等しい。カードがなければ勝ち目はないだろ?」

「」の欠点は、真司も薄々感じていたことだつた。1対1なら、シグナムともなのはともい勝負ができた。なぜなら、カードを温存する必要がなかつたからだ。

だが実戦となればそつはいかないだろう。いつ新たな敵が襲つてくるかわからない 素人である真司でもそれくらいはわかる。

「もちろん、常にお前ひとりで戦場に乗り込むわけではないが……できるだけカードを使わないので勝つに越したことはないだろう」

「……そうだな。よし、『』教授お願いします、師匠！」

「……その呼び方はやめないか」

じさくさに紛れて試してみた新しい呼び名は速攻で却下された。

「で、具体的にはどうすればいいんだ？」

「氣を取り直して講義が再開される。

「スピードのある者　ひいては攻撃を専門に扱う者全般に有効な対処法……そうなると、やはりカウンターといつてになる」

「カウンターかあ。何かカツコ良さそうだな」

憧れるような仕草を見せる真司に対して、シグナムは目を細める。

「…何を想像しているのかは知らないが、カウンター 자체はお前もやつていただろう」

「え、俺が？……うつ？」

覚えていないのか、とため息をつきながらも、シグナムはそれを説明する。

「相手の攻撃の隙をついて強烈な一撃を加える。これがカウンター

の基本だ。……まず1回目は私との模擬戦の時。空中を移動できる私に対し、お前は盾で防いだ後にレヴァンティンをつかみ、私を強引に地上に落とした。……2回目は高町を止めようとした時だ。あいつのディバインバスターが分身を攻撃している間に、お前はレイジングハートをはね飛ばした。やや特殊はあるが、これも十分力ウンターと呼べるものだ

「なるほど。……でも、両方ともカード使つてるな」

やつぱ駄目か、と呟く真司。そして、シグナムはまとめの言葉を口にする。

「カウンターの本来の形は、当然『攻撃を受ける前に相手の勢いを利用して叩く』だ。そのためには相手の動きを目に捉え、次の動きを予測する必要がある。お前にはこれからその力を鍛えてもらひつ

「なんか難しそうだな……」

「後ろ向きに考える前に実践だ。うつてつけの相手が来てくれる」とになつている

シグナムがそう言った直後。

「『』めん。ひょっと仕事があつて来るのが遅れひやつた

「……フェイント？」

訓練場に謝りながら入ってきたのは、フェイント・T・ハラオウンだつた。

「テスターは機動六課最速のスピードを持つている。リミッタ一がかかるといふことはいえ、十分お前を混乱させることができるのはずだ」

「…といつわけらしきから、今日はようじくね、真司」

「あ、ああ……よひしく」

「では早速、2人とも戦闘態勢に入ってくれ」

「どうあえず現在の状態は掴めただろう。今日の感触を忘れるな

「そんなことないよ。結構惜しい攻撃もあつたし、訓練を積めばすぐこっちたるよ」  
「ううん、今日はこの辺で終わらじょ」

まさにスピード地獄だった。フロイトの動きを田で追うのがやつとだつた真司は、結局一撃も打てられずじまいだったのだ。

「……参ったな。全然着いていけないぞ……」

シグナムの言葉により、フロイトは動きを止め、真司は変身を解除してその場に座り込む。

「……今日はこの辺で終わらじょ」

これからまた厳しくなりそうだと感じながら、気を引き締める真司であった。

「ふう、今日も疲れたな……」

休憩所でジュースを買いながら、真司はひとり呟く。

「ここれは部屋で飲もうかな」

そう思い、自分の部屋に戻つてゐる途中。

「……あれ、なんか落ちてるや」

ふと通路に落ちてゐる紙に田がとまり、真司はそれを拾い上げる。

「……内容はわかんないけど、書類みたいだな」

このまま放つておくわけにもいかないだらうと思ひ、真司ははやてのこりであらう部隊長室に向かつ。とりあえず一番偉い人に渡しておけばここではないかといつ思考の結果だ。

そんなわけで部隊長室の前まで移動した真司は、書類を手に持つて部屋に入る。

「せやん、ちょっとこわ見てくれるか

」

が、真司の言葉は最後まで続かなかつた。なぜなら、

「……あ、う、あ、う、……」

声をかけようとした相手が、机を枕にして椅子に座つたまま眠つていたからだ。

「……可愛い寝顔だな」

普段はよくからかわれているから忘れがちだが、いつもして寝息を立てているのを見ると、間違いなくはやても年下の少女なのだと感じる。

……同時に、そんな少女が背負っているものの大きさも思い出される。

「（……軍隊の部隊ひとつとのトップにこなれりつなもんなんだよな。普段は元気にしてるけど、わざとこうの氣勘定だつてあるはずだ。そりや作業の途中で眠つやすりうはずだよな……）」

こんな場所で眠つたまゝにさせとおへのもよくないが、気持ちよさそうに眠つてゐる姿を見ると、起こすのもなんだか憚られる。

「とりあえず……俺の部屋から毛布でも持つてくるか」

チュンチュンチュン

「…………あれ、私…………」

八神はやがて目を覚ますと、目に入ってきたのは作業机で、自らは椅子に座っている。

「……つて小鳥ねえすうとるじー？完全に朝や

」

寝てしまつたことに気づいたはやでだが、次の瞬間彼女が目こした  
ものは

「……え？ 真司君？」

少し離れたところに椅子に座つている城戸真司の姿。

「…………へ？ ちよ、ちよこ待ち？ まさか…………」

反射的に自らの着てゐる服を確認するはやで。……特に乱れてはい  
ない。

と、その時。

「ん……ふわ～あ。……あれ、俺寝りやつたのか

「つー？」

真司が田を覚まし、はやては思わずビクつぐ。

「……あ、はやて。起きてたんだ」

「あ、あの……真司君、なんぞ」「…………」

恐る恐る尋ねるやうでだが、対する真司はあつせらかと答へる。

「ああ、ちよつと書類みたいなものを拾つたからせやうに畠山によりうけられたんだけどさ。ここに来てみたらはやてが寝てたんだ。それで、とりあえず俺の部屋の毛布をかけておいて、あんまり長い間眠つてゐようから起きてベッドに行かせようと思つてたんだけど……途中で俺も寝ちゃつたみたいだな」

「…………ああ、やつこひ」と

安堵の息をつくはやて。同時に、あつせ系の想像をしてしまった自分が恥ずかしいと感じじる。

そして言られて初めて、血の背中にかかるつてこる毛布に気づく。

「… ありがとな。わざわざ毛布かけてくれて」

「礼を言われるよつな」とじゅなことよ。……それよりはやく

「ん？」

「大変だらうから、困つたことがあつたら何でも言つてくれよーで  
きる限り協力するからさー」

「…………え？」

いきなりの真向の言葉に面食らひはまやけ。

しかし、徐々に彼の言いたいことを理解していく内に、自然と顔が  
ほほりこむ。

「じゃあ、気が晴れるから一発ギャグをじつぞーー。」

「えええー？ ちょ、いきなり言われても……」

はやての発言を真に受け、あたふたする真司を見て、彼女は声を出して笑つ。

「じょーだんやじょーだん。なんかあつたらその時頼ませてもいいわ。それより、拾つた書類見せてくれん?」

「……なんだ、びっくりした。えーと、書類は……あ、椅子の下に落ちてる」

そう言つて真司は書類を手に取り出す。

「…………ありがとうな」

「?.今何か言つた?」

「「ひへん、何も~」

ひとつそりつぶやいた感謝の言葉は、案の定真司の耳には届かなかつた。

## 第十六話 シグナムのシグナムによる真向のための特訓（後書き）

人生ゲーム回ではやてには散々みんなを振り回す役をさせてしまつたので、今回はちょっとぴりり女子らしい一面を描きました。

実は今回で第一章は終了です。こつからヴィヴィオ登場、そしてナンバーズとの本格的な戦闘が始まつていくため、ここの一区切りといつことです。

ここまでいかがだったでしょうか。よろしければ、今までの展開等についての評価や感想をいただけるとうれしいです。

では、また次回。

## 第十七話 機動六課のある休日？（前書き）

今回から第一章です。まあ今日はシリアルほほないですが。

## 第十七話 機動六課のある休日？

『魔法と技術の進歩と進化は素晴らしいものである。が、しかし！それがゆえに我々を襲う危機や災害も十年前とは比べものにならないほどに危険度を増している！』

なのはやはりフロイト達隊長陣と朝食をとっていた真司がふとテレビに向けると、いかにも屈強そつがない男性が演説をしている映像が出ていた。

なんとなく気になつたので、隣に座っているフロイトに尋ねてみる。

「フロイト、あのおじさんて誰なんだ？」

「レジアス・ゲイズ中将。時空管理局地上本部の総指令だよ」

「総指令？…とにかく…やっぱり偉い人なのかな？」

「ナウだね」

「こじても、このホッサンはまだこんなことを言つてゐるよ」

「レジアス中将は古くからの武闘派だからな」

レジアスの演説を呆れた様子で眺めるヴィータと、それに答えるシグナム。よくわからないが、どうやらここにいる人間は彼のことをあまりよくは思っていないらしい。

「あのレジアスさんって、なんか問題あることでもしているの？」

悪徳政治家みたいなものをイメージしながら聞いた真司の質問に答えたのははやてだ。

「いや、一概にどう、っていうわけにもいかん感じやな。実際、レジアス中将が地上の軍備を増強したことや、ミシドナルダの犯罪は減少したわけやし」

「…ただ、ちょっと考え方が極端なんだよね」

はやての言葉を引き継いだのはは、そう言って少し困った顔をする。

「ふーん…いろいろあるんだなあ

「ここに来て日の浅い真司には事情は理解できないが、きっとこの世界でも元いた世界のように様々な考えを持つた人物が国などを動かしているということだらう。」

「あ、そうだ。真司、すっかり言い忘れてたんだけど……」

何か大事なことを思い出したらしくフェイトが真司の方を向く。

「LJの前約束した買い物のことなんだけど……今日でいいかな？」

カタツ

「……どうしたんだなのは。いきなりフォーク落としたりして」

「ふえー? な、何でもないよ、こやはは……」

明らかな動揺を見せるなのはこヴィータが反応するが、なのはは笑顔を取り繕つてその場をしのぐ。

一方真司の方はうなずいて、

「もちろんいいよ。シグナム、今日はティアナ達も訓練休みだし、OKだよな」

「構わないぞ。約束していたのだからな」

フォワード陣の訓練は、今朝でめでたく第一段階を終えたようで、今日一日は羽を伸ばすことになっているのだ。そういうわけで、シグナムも快く休息の許可を貰ってくれた。

「よかつた。じゃあ、30分くらいで出かける準備してくれるかな

「はーい」

とこつわけで、しばらく経った後。

「ハンカチ持つた？ IDカード、忘れてない？」

「は、はい……」

キャロと一緒に出かけることになつていてるエリオに対し、フェイトが最終チェックを行つていた。細かいことまで聞いてくるフェイトに、エリオは何か言いたげな様子だ。

「お小遣いは足りてる

」

「フェイト姉さん、僕ももう一〇歳なんだから大丈夫だよ」

「……姉さん？」

いきなりの発言に面食らつフェイト。だが、すぐにその声がエリオの背後から聞こえてきたことに気づく。

「し、真司さん！？ なにしてるんですか！？」

後ろを振り向いたエリオはそこでしゃがんで彼の声真似をしていた者 城戸真司の存在に気づく。

「エリオの心の声を代弁してた」

「代弁って、僕そんなこと思つてな

」

あつけらかんと眞司に対し、エリオはツッ 「ハリを入れよ」とする。

「思つてるだろ。『姉さん』は冗談だけじゃ

が、それを遮ると、眞司は腰をあげながらエリオとフロイトを交互に見つめる。

「『やんなに心配しなくて、僕は大丈夫』ってエリオは思つてた。  
それは間違つてないと思つけどな」

「そ、それは…やつですけど」

「…やつなの?」

「ぐふとつなづくエリオを見て、フロイトが尋ねる。

「はー…僕も、もうお給料ももらってる身ですから…」

「男だもんな。ある程度年取つたら、自分の力でいろいろやってみたいと思うもんなんだ。だから、フュイトもナレード気にかける必要はないんだよ」

自身の子供のことが思って出しているのか、懐かしげな表情で真司は語る。

「…そつか。そういうものなんだ。じゃあ、しっかりキャロを工スコートしてあげるんだよ」

「はーーー」

小さく頷いた後にフュイトがかけた言葉に、エリオが元気に返事をした時。

「『』みんなさー、お待たせしましたー。」

支度を整えたらじきキャロが、向いから小走りでやつて来る。

「おひ、似合ひるじやん」

「かわいこよ、キャロ」

ピンクと白をメインとした、女の子らしい服装をしたキャロに、眞司とフロイトが言葉をかける。

「ありがとうございます」

「サイズは大丈夫?」

「はいーすいじばつちりです」

うれしそうに服を見せるキャロ。遊びに行かるのだが、小さな子供ならはしゃいで当然だね。

「……」

エリオはといふと、そんなキャロをぼーっと見つめている。キャロの方もそれに気づき、彼の方を見つめ返す。心なしか、2人とも頬が赤く染まっている。

「ひゅー、お一人さん、『れはお熱い』とで」

「ウエー? な、何言つてるんですか真司さんー?」

「は、はわわ……」

真司の冷やかしに、ゆでダコのように真っ赤になる2人。

「……真司、あんまりからかつちやだめだよ」

「ははは、わかつてりつて。2人とも、楽しんできなよ」

「は、はい…………やうこえば、真司さんとフエイトさんも買いたい物に出かけるんですね?」

「…………わざわざ、楽しんできてくださいね」

照れを隠すためか、多少早口で話題を切り換えるヒロオとキヤロ。  
そんな様子を微笑ましく感じながら、真司とフエイトは頷くのだった。

「……お兄ちゃん」

城戸真司がいた、もとの世界。そこに存在する、人間が住んでいるのとは違う、鏡の世界 ミラーワールド。

「真司君は、大丈夫かな」

そこにある2人の兄妹の妹が、心配そうな顔で兄に尋ねる。

「……歪みは、予想以上に肥大しようとしている。『あのカード』を使わなければ、厳しい事態に陥ることになるだろ？」

「…でも、あのカードは」

「そうだ。カード、テックとそのカードは、この世界で生まれたもの。異世界に存在していることにより、その力が発現しづらい状態になっている。それが原因で、いまの奴には、切り札のカードを使うことができない」

淡々と現状を語る兄。それを聞く妹は不安を表情に出すが、やがてそれは希望を持ったものに変わる。

「きっと大丈夫だよ。真司君なら……きっと」

## 第十七話 機動六課のある休日？（後書き）

ところが、ついで約束通りフュイトをお買い物です。次回はほほずつとフュイトのターンとなるのであしからず。ヴィヴィオは次々回あたりから登場です。

第二章はナンバーズとの戦いが主です。よろしければ、これからもこの駄作にお付き合いいただけるとうれしいです。

では、また次回。

## 第十八話 機動六課のある休日？ キャラ崩壊は免れないのかもしれない（前編）

久しぶりの投稿ですが、今回短いです。すみません。やつぱり受験まで1年切ると忙しい……

## 第十八話 機動六課のある休日？ キャラ崩壊は免れないのかもしれない

「ねえ、ティア」

「ん？ なに？」

休日を「えられた」ということで、スバルとティアナは現在街へ向かってバイクを走らせている。操縦はティアナで、手慣れた様子のハンドルを握りだ。

「ホントは今日、真司さんと出かけたかったんじゃないの？」

「ぶつー？」

もつとも、そのドライブテクニックはスバルの発した一言で一気に崩れ去ったが。

ティアナが動搖したことにより一瞬車体が揺らいだが、すぐに体勢を立て直す。

「うわっ、危ないよ～」

「あ、あんたがいきなり変なこと言いつからでしちゃうが！」

スバルに對して怒鳴るティアナだが、顔を照れで真つ赤にしているためまつたく迫力がない。

「でも実際そなんでしょ？ フェイトさんが先に約束取りつけなかつたら誘つつもりだつたんじゃないの？」

「そ、そんな」と……あるといえはあるけど……」

小さく首を縦に振るティアナに、スバルはさらに追撃をかける。

「やつぱり、今2人が何してるか気になつちやつ？」

「…………」

「え？ ハンジンの音で何言つてるか聞こえないよー」

「…………よ」

「う～ん？なーに？」

さうにからかわれ続けた結果、ティアナは

「あああ！あーそうですよ気になりますよ！本当は今すぐバイク全  
力疾走させて真司さん達追っかけたいわよ！…それってストーキン  
グですか？知らないわよそんなもの、我ながらどうかと思うけど  
この気持ちはどうしようもないのよコノヤロー！…！」

一言で表すと、壊れた。

「ちょつ、ティア！？なんかおかしいよ？なんか大切なものが外れ  
ちゃってるよ？落ち着こひ、ね？」

「そうね、まずは居酒屋にでも行つて酔いつぶれるのがいいわね」

「何の話！？私の話のどこを聞いてたの！？ていうかそれ以前に私  
達未成年だよ！」

実は先ほどのからかいの言葉、はやてから仕込まれたものだ  
ったのだが、思った以上の効き目に実践しなければよかつたと感じ  
るスバルであった。

「ひょっとして、今日の一件でフュイートちゃんが真司君に惚れる、あるこさせその逆、いやあるいは両方が起きてしまつかも…と思つて

血ひる墓穴を掘つたのは元へはやてばにやつと笑みを見せる。

「すがすがしい血爆つぶりをどいつもあつがとう」

「え? わ、私、別にフュイートちゃんと真司君が何してるかな~なんてこと考えたりしてないよ?」

「なのはなちやんどうしたん? セリフからほーっとして。……わたく

一方、機動六課では。

るん?」

「いや、さすがにそこまでは……だって、一緒に買い物に行くだけだよ?」

額に汗をかきながら、ながば自分に元気に聞かせるように首を横に振るなのはだが。

「あめ――――――――――――」

「ふ、古いー?しかも使い方が違つよませひやんー・高速のワゴン車が突っ込んでくるよー。」

「甘いでなのはちゃん。『時々理屈に合わない』と zwarうのが人間なのよ』と、かの有名なお風呂大好き小学5年生も言つとるんやで」

「いやだからそれも使い方間違つてるよー・今度はタイムリーなセリフだけどー・もつすぐ映画だけどー。」

「あの名言を一字一句正確に再現せんか?たら怒るで。ただでさえあのシーンが改変確定で残念やつていうのに……」

「せめておやんじん語がわれてこないね。」

「シッコミに疲れたのか、なのははだらけた表情でそうつぶやく。それを聞いて、はやても本来の話題を思い出したよつだ。

「」ほん。……とにかく、恋愛を甘く見たらあかんでなのはちゃん。種は知らず知らずのうちにまかれてるもんや。あとはちょっとイレギュラーな出来事が起きたら、もしかしたらもしかするかもしれん

「ええ、おやじがやん、それ本物？」

「ウソ」

ズコーツ！と床に滑りこむなのは。どうやら本気で2人のゲート（みたいなもの）を心配しているらしい。

「うどいよはやいかやん。私本当に氣にしてるんだから……」

「そんなに心配せんでも、漫画やアニメじやあるもーし、やつ簡単  
に恋愛感情が芽生えるなん！」とはないー断言すの」

「そ、そりがな……」

で、話題の当人達はといつ。

「ふーん。ヒリオやキャロ達にケーキを作つてあげたい、ね

「うん。いつも頑張つてるから、何かしてあげたくて。でも私、あんまり料理とかしたことないから、真司に力を貸してもらいたいの。料理、上手なんでしょう?」

「いや、俺は餃子を上手に作れるだけで、ケーキなんてこじゃれたものまちやんとできるかどうか……」

フェイトの言葉に、申し訳なさそうに返す真司。

「そうなんだ……」

……とはいって、かわいい女の子が困っているのに手助けしない理由はない。

「でも、とりあえずは頑張つてみるよ。2人で力を合わせれば、どうにかなるでしょう」

「…ありがとうございます、真司」

うれしそうな笑顔を見せるフェイト。それを見て、真司は新鮮な感覚を覚えていた。

「（思えば、OREジヤーナルには令子さんを始め、普通じゃない女性ばかりだつたからな）。…フェイト達みたいな純粋な女の子つて、やっぱりいいよな」

その頃、フォワード年長2人組は。

「……ティア、さつきから何食べてるの？」

「ウイスキー・ボンボン」

「……いや、確かに酒入ってるけどさ……」

次回に続く。

## 第十八話 機動六課のある休日？ キャラ崩壊は免れないのかもしれない（後編）

といつわけでほぼ話が進まずに1話終わりました。すみません、ヴィヴィオは次々回になりそうです。つかフェイトのターンとか言ってたのはなんだつたんでしょうかね…次回は絶対フェイトのターンです。

あ、ちなみに改変されたあのシーンとは「いいわ、撃つて！」のあたりです。わかる人だけわかつてください。というか、新キャラ投入すればいいってもんぢやないと思うんだけどな……見る前から文句言つても仕方ないですけど。とか予告に1カットも出てないってことはミクロス存在抹消ですかそうですか。

感想や評価などあれば、いつでもお気軽に寄せください。

では、また次回。

## 第十九話 機動六課のある休日? ハラグットのせ知りか知りかのつぶやき

前回ハラグットしかしていなかったので、今回は早めに次回投稿せられる  
をえまい、といつて。

## 第十九話 機動六課のある休日？ フラグってこののは知りや知りやのひがた

「……ところわけで、とりあえず材料をそろえるといつまでは完了」と

デパートで本屋に行き料理本を買う。おいしそうでかつ作れそうなケーキを選ぶ。本に書いてあるレシピの材料を購入する、というある意味お決まりの行程を終えた真司とフエイトは、近くにあつた公園のベンチに座っていた。

「買い忘れとか、ない？」

「うん、大丈夫だよ。手伝ってくれてありがとう、真司」

軽く頭を下げるフエイトに、真司は頭をかきながら首を横に振る。

「いやいや、これ罰ゲームだからわ。お礼言われる理由なんてないよ」

「そりがもしれないけど、本当に助かったから。……エリオやキャロ達、喜んでくれるかな……」

心底うれしそうな顔をするフエイト。せつと、みんなのことを本当に大事に思っているんだろう。今朝のやりとりを見るに、エリオやキャロについては特にその傾向が強いようだ。

「エリオやキャロって、まだ10歳なのにすごいよな。……2人とも、親と離れてホームシックになつたりしないのかな」

真司としては、勇敢に戦っている少年少女を気づかっての何気ない一言だったのだが。

「…………それは」

フエイトの表情が変わり、そのままはざむか遠くに向けられる。

「……本人の許可なしに話せるようなことじやないから、詳しく述べないけど……色々あつて。2人とも、生みの親に会えるような状態じやないんだ。今は、私が2人の保護者になつているの」

「あ…………そう、なのが」

聞いてはいけないことを聞いてしまつた。せつ思い、真司は言葉の歯切れが悪くなる。

ティアナもそうだったことを考へると、機動六課のメンバーには辛い過去を背負っている者が多いようだ。うつかり人の心に土足で踏み入るような真似はしたくない。これからは注意するべきだ。

「……だから、なんとかあの子達に寂しい思いをさせないよ」と、普通の子みたいに楽しく生活してほしい。そう思つて、頑張つてゐつもりなんだけど……うまくできているかどうか。今朝だつて、ちよつとエリオに過保護になつちゃつたし

「やつぱり不安を吐き出してこべフロイト。

「やの点、真司ます、」

「え?俺?」

「私よりもずっと短い間しか接していなくとも、あの子達は真司を慕つている。ティアナのことだけ、真司がいなければ問題がこじれちゃつたかもしれない。……私も、あなたみたいに

「

「買い被りすぎだよ」

フロイトの言葉を遮り、真司は話し始める。

「Hリオ達が心の底で頼つているのは、間違いなくフュイトだと思うよ。俺なんて、まだまだ『近所の面白い大人』くらいの認識でしょ。……そもそも、そこまで気負わなくたって、フュイトのその思いやりだけで、あの子達は満足できるんじゃないかな。もつと力抜いていいと思つよ」

「…………そりがな」

やはり心配事が残るのだろうか、フュイトの表情は微妙に晴れない。真面目な彼女ゆえ、つい考えすぎてしまうのだらう。

「どうしたものかと思つ真向だが、急に何かを思ついたようにぽんと手を叩く。

「それじゃ、レーリーよう

妙案だと考へつつ、真向は口を開く。

「フュイトはHリオとキャロのお姉さんみたいなもんだろ?…だったら、俺があの子達のお兄さんになるよ」

「…………え？」

いきなりの突拍子もない発言に、フュイトは一瞬硬直する。

「フュイトは女の子らしくエリオ達を優しく……なんかいつ、包み込む？みたいな感じで、俺が男の観点から足りないところを補つていく。どう、いいアイデアでしょ？」

「で、でも…………」

「別にフュイトがひとりで背負わなきゃいけないことでもないんだしさ。これから頑張るから、ようしくー！」

半ば強引に話を持つていった真司は、最後にフュイトに向かって笑いかけた。

「（あれ…………？）」

フェイトは、城戸真司という青年を高く評価していた。おつりよこ  
ちよいなところはあるが、純粹に他人のことを思つて行動できる点  
は、なかなか他の人間にはないものだ。

だが、あくまでその評価は客観的なものであつて、それ以上の感情を彼に抱いているわけではなかつた。彼女の評価は、真司がなのはやティアナといった『自分以外の者』に向けた優しさによつて築き上げられていたのだから。

しかし今、その優しさを『己』に向けられたその時。

「（…なんだか、変な感じ……？）」

フェイトは、今まで感じたことのないような何かが心に存在するこ  
とを認識していた。

「そりそろ帰るつか？」

「ふえ？あ、うん……」

真司の言葉にドキッとしたながらも、フェイトは帰途につくためご  
ンチから腰を上げた。

「帰ったら早速挑戦してみようか」

「やうだね

先ほどの心の異物は少し経つてなくなつたため、フロイトは平静に戻つて真向と言葉を交わしていく。

「（やうのは一体何だつたんだ？…………ちよつと疲れてるのかな。真向の言つとおり、もう少し肩の力を抜いてみようかな）

などとフロイトが心の中で考えていたその時。

「突撃！街角のカップルにインタビュー……」

「…………は？」

いきなり田の前に現れた若い女性アナウンサーとカメラマン達に、意図せずフロイトと真司のセリフが被る。

「突然ですみませんが、来週のテレビ番組『』でカップルの方に対するインタビューの映像を流させていただきますのでご協力ください！」

「あ、あの～、申し訳ないんですけど、俺達は別にカップルじゃ

「

「ちなみに拒否権はありませんー」

「ないんですか！？」

「どうわけでインタビュースタート－カメラ回しまーす」

人の話聞けよー」と内心思いながらも、真司は事態がどうぞん進んでいることを感じ、急いでフロイトに耳打ちする。

「フロイト、ビーヴィルのまま走って逃げるつて声もあるんだ……」  
「……つてあれ？」

ある程度話したところで、真司はフロイトの様子に警戒すべく。

「か、かかカツプルつ！？かかかつ！？」

「なんかおかしくなつてる～～つー！？」

頬を朱に染め、明らかに混乱している状態のフロイト。カツプルと間違えられただけでこうなるということは、余程その手の方面に疎いのだろうと真司は予想する。

「じゃあまず第一の質問ー！」

予想してこむ間にインタビューが始まってしまった。

「ああもうこいや、とつあえずトキターに答えて」

「ABCのDJもこきましたか？」

「いきなり何聞いてんの……？何時に放送する気なんですか」このインタビュー…？」

初っ端から危ないといふかほアウトの内容の質問に思わず突っ込む真司。

「へ？ 7時からですか？ なにか問題でも？」

「ミッドチルダ大丈夫なのコレ…？ エリオ達が大人びてるのこれが原因じゃないの…？」

どう答えるべきか真司は戸惑いつ。 …というか、カッフルと聞いただけであれだったフヨイトは今一體どういう状態に

「ひです」

「ええええー…？」

普通に滅茶苦茶なことを答えていた。

「（ちゅうひ……）タイトをーん？ひょっとして胸の大きさのー」と聞かれてるとでも思ったの？違うから、この人達もひとひどい話題口にしてるからー。」

「おおお。では次の質問。『初めて』はこいつですか？」

「（また何でこと聞いてんだこの人はー。）」

「先週です……」

「（そしてタイトはなんで答えるのー？一体何と勘違いしてるのであれば見当がつかないよー。）」

普段の彼女はどこくやら、完全に冷静さを欠いてしまっているタイトに困惑する眞面目。訂正する機会もなく、話がどんどん進んでいくてしまう。

「では、お互いのどちらかといふに惚れたのでしょ？？」

「（なんだこりに来て普通の質問なんだ、いつも質問を最初に行

うべきなんじやないのか?……いや、そもそもああこいつ質問する」と  
自体が間違ってるんだけど」

「（フ）「…………」あるが、初めて出たまともな質問だ。とつあえず、  
これはフュイトのこいといふを言つておけばいいだろ?と真司は考  
える。

「えーっと……美人で、眞面目で、優しいところですかね」

本心から思つてることなので、特に言葉で詰まるところもなく答へ  
る。

一方フュイトは

「え、惚れたところ…………えと、その、あの…………はつひ……」

「（フ）「…………」これはカッフルを装つてテキトーに答へようつてい  
う作戦なんだけど。どうしてそこで顔を赤らめるんだ?…どうしてそ  
んなにもじもじしてるんだ?」

「正直かなり可愛い仕草なのだが、眞司としてはこの妙な空気こ  
耐えることができない。

「彼女の方は照れちゃつますね～。では、次が最後の質問です」

よし、と心の中でガツッポーズをする真司。次さえ乗り切れば、このよくわからない空間から解放され

「愛のキスを交わしてくださいーーー！」

「（つてこれ質問じゃないんだけどーーー）」

もはやただの要求となつたインタビュ－。こんな言葉をぶつけられたら、フ－イトが……

「ほんつー！

「…………あゆーーー！」

「…………汗剥いてるーーー！」

顔は真っ赤、しかもてっぺんからは湯気が出てこるフ－イトを見て、

もう限界だと感じた真司は。

「さこならつ……」

「あ、ちょっと待ってください」

インタビュアーの制止の声を振り切り、フェイントを抱えて全力疾走したのだった。

しばらく経った後、2人は再びそこのベンチに座っていた。

「……フェイント、もう大丈夫?」

「……う、うん」

ゆでだこ状態からは脱却したものの、いまだ若干顔の赤いフェイト。真司の呼びかけに答えられるレベルにはなったが、頭の中はひとつのことについてぱいだつた。

「（真司のことを想えると、胸がドキドキする……もしかして、私は……）」

真司のことを、好

「（つ！ないない！）」これはその、親しい男の人の数が少ないから、なんかその、アレが……だ、大体、人を好きになるつてもつとはつきりわかるものなんぢやないのかな。うん、そうだ、きっとそう……」

とかなんとかフェイトが結論を出しつとしていたところ。

事件の発生を告げるアラームが鳴り響いた。

「「つ……」

続いて聞こえてきたのはキャロによる通信だった。ロストロギア『レリック』を持つて地下水道から出てきた少女を発見したというのだ。

「行こう、フェイト」

真司の声に、フェイトはひとまず頭を切り替え、じくじくとつなづく。

そうして、2人がともに走り出した時だつた。

「うわっ」

曲がり角から人影が飛び出したと思った瞬間、それと真司が衝突した。互いに尻餅をついたが、見たところ大事には至っていないようだ。

……至っていないように、見えたのだが。

「真司…………？」

相手の顔を見た瞬間、真司の動きが止まった。

「なつ……」

うつかりぶつかってしまった相手を見た真司は、信じられないといった表情になる。

「あいたたた……」

なのはより少し低い背丈に、髪型はツインテール。黒髪の少女。

白い眼帯。

「あの時の、夢の……。」

## 第十九話 機動六課のある休日? フラグって何のは知りや知りやのひがひが

ところへとではやでが立てたフラグを回収しました。一応、フェイ  
トにフラグが立つような雰囲気 자체は結構前に作っていたんですね  
……やっぱりこうじうのは苦手です。

それとラストに謎の少女登場。誰こいつ?と思つたあなた。人生ゲ  
ーム回の前篇をご覧ください。あからさまな伏線をはっていますw  
というかいつも思うのですが、後書きつてどう埋めればいいのでし  
ょうか。何かコーナー的なもの作った方がいいんでしょうかね  
まあいいか。

感想や評価などあれば、いつでも気軽に寄せください。

では、また次回。

## 緊急告知（前書き）

初めに書かせていただきます。

……本当に申し訳ありません。ただ、それだけです。

## 緊急告知

はやて「……本当に突然のことで、誠に申し訳ありませんが、『このままではストーリーが破綻する』など、その他諸々の理由により…『魔法少女リリカルなのは Strike Liger 龍の影を纏いし騎士～』は、急遽最終回を迎えることとなりました」

真司「……ですが、あまりに突然のことだったので、最終回の脚本が仕上がつていません。そういうわけで、今からみんなで最終回の終わらせ方を考えていこうと思います」

はやて「集まつもらつたのは、私と真司君の他に、なのはちゃん、フェイントちゃん、スバル、ティアナ、エリオ、キャロです。ヴォルケンリッターのみんなは、今急用で出かけています」

なのは「まだかこんなことになるなんて……」

フロイト「懲りるよ…」

スバル「まだやつていない」とが山ほどあるのに…」

ティアナ「仕方のないこと…なんでしょうが」

エリオ「終わつてほしくないです…」

キャロ「……今はとりあえず、いい最終回を考えましょ～」

真司「……じゃあ、早速始めよつか。誰か意見のある人、いる？」

はやて「はーー」

真司「じゃあはやて、どうだ」

はやて「こらこら考えたけど……まあ、このくらいが妥当やと思つ」

龍騎「チクショ オオオ！…くらえクラットロード必殺ドーラゴンライダーキック！」

クラットロード「さあ来なさい龍騎！実は私はどっちかって言ひと參謀タイプだからそんなに強くないぞオオオ！」

クラットロード「うわあああ！…こ、このナンバーズ四天王と呼ばれたクラットロードが、こんな仮面野郎に…」

ウーノ「クラットロードがやられたようね」

ドウエイ「ふふ…奴は四天王の中でも最弱…」

トート「人間」ときに負けるとは面汚し…」

龍騎「くらえええーー！」

四天王「ぐああああ」

龍騎「やつた、ついに四天王を倒したぞ……これでスカエリッティのいる場所への道が開ける！」

スカエリッティ「くくく…待っていたよ、仮面ライダー 龍騎」

龍騎「スカエリッティ！？」、「ここにいたのか…」

スカエリッティ「龍騎、ひとつ言つておくことがある……君はサバイブのカードがないと私を倒せないと思つていいようだが…別にくても倒せる」

龍騎「な、なんだって！？」

スカエリッティ「それとルーテシアの母親、メガーヌは私が目覚めさせ、その辺の病院に入院させておいた。あとは私を倒すだけだな、ふふふ…」

龍騎「フ、上等だ…俺もひとつ言つておくことがある。なんだか夢で出てきて現実でも出会つた謎ありげな女の子がいたような気がしたが、別にそんなことはなかつたぜ！」

スカエリッティ「さあ来い龍騎！！」

龍騎「うおおおー！」

龍騎の勇気が世界を救うと信じて…」愛読ありがとうございました。

真司「うて悪いつきりどりかで見た」とあるんですねね！

1

せめて「うーん? うーん?」

真司「しらつばくれるなーてこつかクアットロとかウーノとかどつかりやんな名前出てきたんだよー?」

はやて「いや、なんだかいきなり電波を受信して…熱でもあるんかもしけんなあ」「

真司「なら今すぐ病院行つてきて！頭を検査してもらつてきてよ！」

ヒロオ「やつですよ、最終回に向くなつたるのにはやむをえは危ないネタが多すぎます」

真司「エリオ?」

エリオ「次は僕が意見を言います。こんなのはどうぞ」

まああれからなんやかんやで僕達の戦いは終わりを告げ、僕はキヤ

口と一緒に楽しい日々を送っていた。

だがある日、僕の目の前に現れたのは腕だけの怪人！  
そして人の欲望から生まれる化け物たちを倒すべく、僕はその腕だけ怪人と手を組むこととなつた！

「乐して助かる命がないのは、どこでも一緒だな！」

タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ、タトバタ・ト・バ！

メダルを使って変身するライダー、仮面ライダー オーズ！僕の新たな戦いが始まる！

真司「俺達が微塵も出てこないんだけど！」というかさらっと新たな展開だけ示唆して終わるってただの打ち切りじゃんこれ！しかもまたパクリだし！どつから情報仕入れてきたの…？」

エリオ「だつて、僕だつて『変身！』とかかつよく言つてみたidisし……それに一難去つて新たな敵、が少年漫画の醍醐味でしょう！」

キャロ「エリオ君……一緒に楽しい日々を送っている、なんて…」

真司「……なんか、みんなキャラおかしくない？」

はやて「せりやまあ、最終回やし、この一次創作の作者もやけになつてゐるんやろ」

ティアナ「まつたく……」「うらでひとつ、私がまともな意見を出しまじょひつ」

私、ティアナ・ランスターは、私立都築高校に通う高校2年生。唯一の肉親である兄を失くしてから、何にでも意地を張つて強がるような性格になつてしまつた。

「転校してきた城戸真司です。よろしくお願いします」

そんな折、突然やつてきた転校生が隣の家に住むこととなつた。最初はやたらとかまつてくるそいつを煙たがつていた私だけ……

「な、なんなの、この胸の高鳴りは……べ、べつに、あいつのことなんて、なんとも思つてないんだから……」

認めたくない。

だけど、心は自然とあいつに惹かれていく。

「真司……」

いつの間にか。

「ティアナ……」

私達は、恋しちゃつてたんだ。

ティアナ「へな感じド、ビリドショウー」

真司「ビリドショウつて何ー?ビリジガまともなんだよ、もう完全に今までの設定をなかつたことにしてるじゃんこれ!…なんで魔法少女アニメから学園恋愛モノに華麗に転身しちやつてんの!…」

ティアナ「大丈夫です!『学園エヴァ』ならぬ『学園なのは』ですから!」

真司「勝手に新ジャンルを開拓しようとするなあ…あ、でもすでに学園モノをやっている偉大な作者様もいることにいる…てなことは置いといて!」

なのは「やうだよティアナ。勝手に世界観を変えて、あまつさえ自分がヒロインになつて真司君とラブラブなんて……駄目だよ?。(黒笑)」

フヨイト「ああ…なのはから禍々しい妖氣みたいなものが……」

なのは「最終回つてこいつのせ…」こんな感じにするべきだよ」

私の名前は高町なのは。一流企業に勤めるキャリアウーマンだ。今まで、男の人との恋愛などには少しも興味を持ったことがなかった。

だけど、ある日の夜の社内で、すべてが崩れ去った。

「高町さん……もう俺、我慢できません」

「あ、城戸君……ダメだよ、そんな、いきなり……ああ」

始まってしまった、上司と部下の禁断の愛。

「城戸真司君。君には会社を辞めてもいい」

「…真司がいなくなるのなら、私も一緒に行く」

愛に溺れていく男と女。

「俺達はただ…互いがいれば、それだけでいい」

果たして2人を待ち受ける運命は…?

真司「重いわああああ…やつをよりひどく…なんで悪化してんの…?なんでこんな生きしそうなストーリー展開になるのか…?」

なのは「だって、ティアナが純情ものだつたから、私は大人の恋愛にじよりうと」

真司「だからじよりうして張り合う必要が…？それとなのはは大人の意味を勘違いしてゐる絶対！」

フェイト「やつぱりもつと普通にするべきだよ。長く厳しい戦いが終わった後と言えば、みんながそれぞれの道へ進んでいくつていうのが定番だと思つ」

真司「おお、やつともどもな意見が。たとえばどんな感じに？」

フェイト「『私、本当は魔導士じやなくて……演歌歌手になりたかったんだ』みたいな感じかな」

真司「それ中の人がネタだろ！声優としてキャリアを積んだり2年連続紅白出たりしてどんどん違う方向に才能を發揮しつつも着実に夢に近づいていつてる人のことだろー！」

フェイト「そこまで言われると、照れちゃうな」

真司「別にフェイトが照れる必要はないんだよ……」

スバル「はいはーいー…じゃあ、精神世界で自分の存在意義を見出した私がみんなから『おめでとう』の嵐を受けるつていつのまじうじょうう！」

真司「エヴァを引っ張るな！ていうか存在意義なんて難しいこと考えるキャラじゃないでしょスバルは」

スバル「ええ～？そんなことないですよ～。」いつ見えていろいろ抱え

キヤロ「つたくよお～、さつきから黙つりや テメーら好き放題言い  
やがつて…ふざけんな、私の意見聞かなきや始まらねえだろつが」「  
真司「…え？ キヤ、キヤロ…？ 何これ、酔つ払いみたいにな  
つてるんだけど」

ヒリオ「いや、せつしきウイスキー ボンボンを食べたら急げ」

真司「そつかなるほぢウイスキー ボンボンか… つておかしいだろ！  
そんな微量の酒飲んただけであんなことになるかあ…？」

キヤロ「おこー聞こてんのかそこ…」

真司「は、はい、すみません！（やばい、逆らえる雰囲気じやない  
…）」

キヤロ「大体なあ、おかしいと思わねーのか。魔法少女だぞ？ 魔法  
『少女』なんだよ。だつたら若い私が主役張るべきだろーが。エリ  
オと一緒にクロウカード封印するべきだろーが！」

真司「途中からひぐらしあやになつてる…」ヒリオは小狼君なのか、  
小狼君なのか…？」

キヤロ「それなのによお、なんで19歳の年増がメインでびくびく  
した闇に立ち向かわなくちゃなんねーんだよ。戦闘アニメなのは許  
せても、これじゃ魔法少女じゃなくて魔法軍人だらうが！」

なのは「なつ……こくら酔つてるから」ではないんじゃないかな？」

ティアナ「16歳は、ギリギリセーフよねー。さつとー。」

フロイト「わわ、みんな落ち着いて……」

わいわい、がやがや。

真司「……あの、なんか收拾つかなくなってるんだけど。肝心の最終回なのに、みんなキャラ崩壊してめちゃくちゃなカオスになってるんだけどー。ビックさんのはやでーーー？」

はやて「しゃーないな。じゃ、次回からまた真面目にやるってことで」

真司「…………え？ はやて、今なんて」

はやて「え？ 次回からまた真面目」

真司「…………ちよっと待つて。これ、今回で最終回なんだよな」

はやて「そりゃで。第一期は今回で終わり。作者の受験が終わった来年から第一期スタートや。ま、作者が浪人したら別やけど」

真司「はああああー！？え、いや、だって、このままだとストーリーが破綻するって」

はやて「そんなん最初からや。今更恐れてどうすんだや」

真司「そんなのアリかよーといつかこれほとんビ騙しじゃん！一次創作に一期も二期もあるかよー嘘つくならエイプリルフールにやれよ近いんだしー！」

はやて「何を言つとんや。私は嘘つこいのつもりないし……エイプリルフールにやつたら、誰も信じてくれんや（黒笑）」

真司「最悪だーなんここと考えてるんだー」

はやて「せやけど、実際嘘でもええから最終回でもせとど、1年も間隔開けるのは問題や。筋くらいは通わんと、誰かひも忘れられてしまつで」

真司「俺には今までのやつ取りのびー」  
筋が通りてるのかわからな  
い

はやて「とにかく、これにて当作品は長い充電期間に入ります」

真司「強大な敵との戦いや龍騎のパワーアップがこの先控えているので、再開した時にはまた読んでいただけうれしい限りです」

全員「では、また次の機会に」

## 緊急告知（後書き）

本当に申し訳ありません……前書きと後書きの「」の言葉、印象はかなり変わりましたでしょうか。

本当、こんなにキャラ崩壊させて申し訳ありません。第一期ではこの回はなかったことにするので、どうか許してください。  
前々から散々言っている通り、高三になるので更新はストップいたします。皆さんのが理解をいただければうれしいです。

では、いつになるかはわかりませんが、また次回。

## 番外編 クロノ・ハラオウンが背負つモノ（前書き）

更新停止とか言っていたのですが、GW中で少し時間ができたので  
続きを投稿します。

といつてもタイトル通り今回は番外編。クロノ視点の一人称で描か  
れます。結構真面目な話だと思います。

もし、クロノがMOVIE1stでプレシアの心境の変化に気づいていたら。

## 番外編 クロノ・ハラオウンが背負つモノ

「……あれからもう10年経つのか」

あの時はクラウディアの先代の船・アースラに乗っていたことなどを思い出しながら、僕 クロノ・ハラオウンは足を進める。仕事中というわけではなく、プライベートである場所に向かっている途中だ。

「あの後もいろいろ大変なことがあったが 」

やがて目的地に到着した僕はそこで立ち止まり、視線の先にある『ある人物の墓』を静かに見つめる。

「あなたの娘は今も元気だ」

『プレシア・テスターッサ』の文字が刻まれたその墓に、僕は先ほど買ってきた花をゆっくりと供える。

「…………」

……ひとりで墓参りに来たはいいものの、よくよく考へると、特に彼女に話すことはないよつたな気がする。フロイトの最近の様子についてなら今でもたまにここに来ているらしい本人が話しているだろうし……

といふか、そもそもプレシアと僕は犯罪者とそれを追う者という関係で出会い、そして彼女はそのまま死んでいったのだから、話題などなくて当然だ。

……では、なぜわざわざ仕事の合間に縫つてこじて足を運んだのか。実を言つと、僕自身もはつきりとはその理由を知らない。ただなんとなく、近くに来たから寄つてみたい というより、『寄らなければならない』ような気がしたのだ。

「…………罪滅ぼしのつもりか？」

だが、そう考へることもなく結論へしきものは出た。自分の中のある気持ちに気づいた僕の口から、自然と自嘲するよつたな笑いがこぼれる。

10年前。プレシア・テスタークサはロストロギア『ジュー  
エルシード』を利用し、失われた都『アルハザード』にたどり着こ  
うとした。一步間違えれば複数の世界に多大な影響を及ぼしかねな  
かつたこの事件は、後に首謀者の名を取つて『PT事件』と呼ばれ  
ることとなつたのだが、僕はこの事件を追う中でフェイトやなのは  
達と出会つたのだった。

最後には焦燥に駆られたプレシアがジューエルシードの数が足りない  
ままアルハザードへ向かおうとし、僕たちはそれを阻止するために  
戦い……結果として、プレシアは虚数空間の中へ落ちていった。一  
度落ちれば一度と戻つてはこれない場所に、愛する娘とともに。

そういうわけで、遺体は見つかっていないが、生きているとも考え  
られない。だからここに、何も埋まっていない墓を建てることにな  
つた。

「…………あのとおり

自分がやつたことが間違つていたとは思わない。なくした肉親を取  
り戻そうとする気持ちは僕にもわかるが、だからといって他人に迷  
惑をかけるようなことは当然許されない。だからこそ、彼女に罪を  
償わせなければならなかつた。

「……」  
「う、生きたまま、捕まえなければならなかつたんだ。

フレシアが虚数空間に落ちる時、僕は目を見張つた。今まで狂気に満ちた表情をしていた彼女の顔が、ほんの一瞬だけ変わったのだ。

たとえるなら、優しい母親のよつな顔つき。

それは僕の単なる勘違いだつたのかもしれない。フレシアは最後までフェイトを憎み、アリシアと過ごした過去に執っていたのかもしない。

……だけど、もしさうでなかつたとしたら。もし、あの最期の瞬間、フレシアの心境に変化があつたのだとしたら。

もし、その変化が、フェイトにひとつでも幸せなものだつたとしたら。

「届かなかつたのか……？」

自らの右手を見つめながら、僕は虚空に向かつてつぶやく。答えがない問いだとわかつていながら、それでも誰かに答えを求めるかのように。

あの時既に僕は傷だらけで、その場にいながら何もできなかつた。虚数空間に落ちていくプレシアに、手を伸ばすことさえしなかつた。

この手が、彼女に届いていたなら。僕に力が残つていて、素早く動いて彼女を助けられたのなら、一体その後どうなつたのだろうか。  
……ひょっとしたら、フュイトとプレシアは、本当の意味での親子になれたのだろうか。

……今となつては、その答えは決して出ない。プレシアはあの時死に、一度とフュイトと言葉を交わすことはなかつたのだから。

その後、フュイトは僕の母さんが養子として引き取ることになり、僕とフュイトは兄妹になつた。当初はぎこちなさもあつたが、今は普通の仲の良い家族になれていると思つ。

でも。

「……だからって、罪が消えるわけじゃない

心の中で、僕はこう思つているんじゃないのか？『フュイトと家族として、兄妹としてうまくやつていけている。彼女の心に空いていた穴を埋めることができている』　だとしたら、とんだ勘違

いた。彼女の本当の母親がプレシア・テスター・ロッサである」と、そして僕が彼女を生かせなかつたことに変わりはない。

「おっ」と僕は、一生この十字架を背負つていくことになるだらう。フォイトに近づけば近づくほど大きくなる、背中にのしかかるこの大きな荷物を

「……お兄ちゃん?」

「えつ……」

不意に背後からかけられた声に驚いた僕が振り返ると、そこには先ほどからずっと思つていた妹の姿があつた。

「フォイト……」

「母さんのお墓参りに来てくれたんだ。ありがとう」

「…まあ、当然だらう。大事な妹の母親のお墓なんだから」

僕の言葉を聞いたフォイトはふふ、と笑い、手に持つていた花束を

供え、周りの掃除を始める。

「…………

僕はとこうと、そんなフォイントの姿を見ながら、再び思考の海に沈んでいた。

「…………ん…………ちやん」

「…………

「……お兄ちやん!」

「うわい

ぼーっとじていてフォイントの呼びかけに気づかなかつた僕は、大きな声を出されて驚いてのけぞる。

「…………変なこと考えてるでしょ」

「…………っ!-?」

だが、直後の彼女の見透かしたような言葉と田つ毛ひやうに驚いた。まさか、僕が何を考えていたのかわかるのか？

「何年お兄ちゃんの妹をやつてると思ってるの？何を考えてるかは大体顔を見ればわかるよ」

そう言つて少し間をおいた後、フェイトは言葉を紡ぎ始める。

「…母さんが死んだのは、お兄ちゃんのせいなんかじゃない。私が止められなかつた……それだけのこと。罪だと思う必要なんてないんだよ？むしろ私は感謝してる。私に、温かい家族をプレゼントしてくれたんだから」

ありがとう、と笑顔を見せるフェイト。……まつたく、この笑顔には勝てないな。

「……危つく忘れるといけだつたよ」

死の十字架よりも先に、もっと大切な、背負うべきものがあるじゃないか。目の前にいる妹、母、妻、子、そして大事な仲間達。一番に背負わなくちゃいけないのは、今生きている者なんだ。

なのはほびじやないが、フロイトも大概無茶をするタイプだ。しつかつ支えてやらないと、すぐに背中から滑り落ちてしまいやう。

「……重いな」

「えつー…お、重いって…た、確かに最近ちょっと体重が増えたけれども、そんな、ストレーントに言わなくとも……」

僕の言葉を勘違いしたらしくフロイトがあたふたし始める。「ううううううは、まだまだ子供のままだ。

「やうこつ意味じやないよ」

「…………え…じゅ、じゅあじうこ…………」

大切な荷物ほど重くて、背負ひのが大変だ。でも、だからこそ背負いがいがある。

などとこう聴きかしことを言えるはずがない。ソリは適当ソリまかしておこう。

「 まあね」

「 まあねって…… ちやんと教えてよ」

納得がいかない様子のフュイト。…… まあ。

「 フュイトにいい夫ができれば、少しは軽くなるかな」

…… 僕としては、本当に軽い気持ちで冗談を言つたつもりだったの  
だが。

ボンッ

瞬間、フュイトの顔がゆでだこのように真っ赤に染まった。

「 も、もおおお、もつとー?」

……あれ?なんだこの反応は。

「 ……フュイト、まさか

「ち、違つよ！私があの人に片思いしているだけ……あ

僕の妹は良くできた妹だ。こうして聞きもしないことを勝手にしゃべってくれるのだか。

「フェイト……兄として、僕はそのあたりの事情は詳しく知つておきたいんだ。わかるだろ？」「

笑顔を取りつくろつてフェイトに優しく声をかける。ひょっと顔が引きつっているような気もするが、まあ大丈夫

「わ、私そりいえば用事があつたんだーじゃあまたねー！」

「あ、待て！」

僕が認めた男でないと、交際することなど許しはしない！

逃走を図ったフェイトを追いかけるべく走り出した僕は、ちらりと墓に自分が供えた花を見た後、またフェイトの方に視線を移す。

僕が供えた花は、白いエリカ。

花言葉は、『幸せな愛を』。

## 番外編 クロノ・ハラオウンが背負つモノ（後書き）

とこ「うわけで番外編でした。え、花言葉つて地球の文化じゃね？つて思ったそこのあなた。細かいことは気にしない。ほら、クロノは地球で生活していた時もあるわけだし……

珍しくシリアスな雰囲気でしたが、最後は結局コメディ調になります（笑）だってこうしないとオチ作れないし… フェイトの『あの人』とはもちろん真司のことです。なので、この話は本編の現時点より少し後に入ることになります。

なんでクロノの話を書いたかというと、一言で言えば僕がクロノ大好きだからです。ぶっちゃけなのはキャラの中じゃなのはもフェイトも差し置いて一番好きです。

本編のプロットでも後半はクロノが結構出張つてくる予定なんですが…あいつ六課にいなから出しづらい！でも後半からいきなり出番増えるのもなんだかなあ…あ、じゃあ番外編で出せばいいんだ！……というアホみたいな結論に至り、この話を書いたというわけです。

番外編なので本氣で本編の話ではない無印（というか劇場版）のHPソードを採用。もしクロノの勘が鋭くて、プレシアの気持ちになんとなく気づいていたら、といつ設定で書いてみました。

感想などあれば、どうぞ気軽に送ってくださいね」とうれしいです。

では、今度こそいつになるかわかりませんが、また次回。

## 第一十話 機動六課のある休日？ てかもつ休日じゃないのかもしれない（前書き）

気分転換に続き書いてみました。

## 第一十話 機動六課のある休日？ てかもう休日じゃないのかもしねない

夢に出てきた、顔も知らない女の子。あの夜に目が覚めた直後は眠かつたというのもあってさして気にも留めていなかつたのだが、その後も彼女の顔は不思議なほどはつきりと真司の脳裏に焼き付いていた。それでもその子がどこの誰なのかは本当に覚えがなかつたため、今まで特に行動を起こしたわけではなかつたのだが。

「……」

その少女が今、現実に自分の目の前に存在している。彼女は一体何者

「あ、あの……私の顔、何かついてたりします？」

「え？」

……淡いエメラルドの瞳に疑問の色を浮かべた少女から放たれた一言で、真司の頭は一気に冷やされた。

考えてみれば、こちらが勝手に夢で彼女の姿を見ただけなのだ。道を歩いている時にふと目に入ったその容姿がなんとなく記憶に残つ

ていて、無意識のうちに夢に現れた なんのことはない、少し不思議なだけのどこにでもありそうな話ではないか。

「（）」うちに来てからアーメみたいな展開が多すぎて、ついついそつちの方に頭がいつちやつてたな。こついうなんでも大げさに捉えちゃうのが巷で流行りの中一病つてやつか。これから氣をつけないと」

勝手に脳内で始まりかけたシリアスな妄想を打ち切り、真司は尻餅をついたままの姿勢から立ち上がる。

「ううん、なんでもないよ。ぶつかって」「めん、怪我とかない？」

「あ、はい、大丈夫ですけど…」

少女の方も立つてスカートをぱんぱんとふるこながらせうなづく。

「えつと…そうだ。あっちの方は危険になるとになるかも知れないから、近づかないようにな。それじゃー！」

「あつ……」

くるりと回れ右をして走り始めた真司を少女が呼びとめようとするが、聞かないふりをしておいた。確かに少し気にはなるが、今はキヤ口達と合流するのが先決だ。

「いのんフハイテ、時間取らせちゃつて」

「いのん、それはいいんだけど……それきの子、知り合になの？」

「えっと……まあ、中一病にひまつをつけることだよ」

「？？」

夢がどうこうと説明するのもなんとなく面倒だったので、テキトーにじこまかして真司は現場へと向かっていく。

「あー、フロイトさん、真司さん…」

連絡を受けた場所に到着すると、エリオが少し安堵した声で呼びかけてきた。

「この子がやつを叫んでた……」

「ロストロロギアを持っていた女の子だね」

真司の言葉をフロイトが引き継ぎ、2人は泥やすすで汚れてしまつてこるその女の子を見つめる。顔立ちは整つていて、こんな格好をしていなければいいといふのお嬢様みたいだと叫つてもいいくらいかもしけない。

「ほんと可愛い子が、なんでこんなところに……」

「今のところはなにもわからないけど、とりあえず色々調べてみないと」

真司が素直な感想を口にする一方、フロイトはすでに仕事モードに移行済みだ。

その後、そう時間を置かずにティアナとスバルが駆け付け、続いてなのはヒシャマル、リインがやって来た。

「……うん。大丈夫、特に体に異常はないし、危険な反応もないし…心配ないわ」

この手の分野に詳しいヒシャマルがそう判断したことで、一同もほつと胸をなでおろす。

しかし、ほどなくして複数箇所にガジェットの出現が確認され、真司はフォワードの階とともに地下水路へ行くことになった。

はやてから指示を受け、それぞれが動こうとしているをなか、真司は先ほどから少し気にかかっていたことを尋ねる。

「……といひでティアナ、さつきからちゅうと顔が赤いよつな氣があるんだけど……」

「えつ？あ、いや、それは……」

「それは」に来る前ウイスキー・ボンボンを鼻血が止むほど

「あああ――――つ―――、今何か言ったスバル?なんにも言つてないわよね!」

スバルが答えたのを露骨に遮るティアナを見て、真司の興味は増していく。

「いや、明らかに何か言つてたよ。スバル、悪いけどもう一回」

「ど、どうでもいいじゃないですかそんなこと!・それより、真司さんの方はどうだったんですか、フェイトさんとのトーク!・」

無理やり話を逸らそうとするところを見ると、よほど話したくない」とりしこので、真司もこれ以上の追求はあきらめる。

「別に買い物しただけ……って、それ以前にドートじゃないっての。なあフェイト」

「…………」

「なんで無言なのー?ちょっと前からのその微妙な態度はなー?」

なぜか顔をうつむけるフロイト。彼女の反応を見て真司をジト目でじらむティアナ。

「せりみんな、今はやつこいつ話をじてる場合じゃないでしょ？」

「……だなのはがもつともな注意をする。助かった、と思つた真司だが。

「……ね？ 真司くん？」

「……あの、なのはさん？ なんで俺の方をそんなんじらさでるの？」

「なんでだらづね」

結局あんまり助かっていなかつた。

場所は変わつて地下水路。なのは達と別れ、今ここにいるのは真司とフォワードの4人 + フリーードだ。

途中、ティアナがスバルの姉である『ギンガ・ナカジマ』と通信で会話して、彼女と合流することになったようだ。真司もいつだつたかスバル本人から姉に関する話をされたことがあり、いつか会つてみたいと思っていたのだが、こんなところで会えるとは正直意外だと感じていた。

「どんな人なんだろうなあ

「すつじく強い人だから安心してください！」

そう胸を張つて言うスバルの様子からすると、おそらくかなり姉を慕つているのだろう。そして強いというのもほぼ間違いないだろう。これだけ強い妹がそう言つているのだから。

「スバルのお姉さんがどんな人かはもうすぐわかるとして……気に

なるのせめつけの女の手のことだよな

半ば独り言のように真司がつぶやいた直後、それに答えるかのよう  
なタイミングで驚くべき事実が通信によつて告げられる。

なにやら知らない単語が耳に入つてくる中で、真司がはつきりと認  
識したのは『人造魔導師』といつ単語。

スバルによると、その言葉の意味するとこねはしきだ。

「優秀な遺伝子を使って人工的に作り出した子供に、投薬とか、機  
械部品の埋め込みで、後天的に強力な魔力や能力を持たせる。…そ  
れが、人造魔導師」

「…そんなことまでできるのか、この世界って」

「でも、倫理的な問題もありますし、今の技術じゃどうやつても色々  
な部分で問題が生じるんです。コストも合わないし……だから、  
よつぼじどうかしての連中じゃないと手を出さないんですけど

「

動体反応確認。ガジェットドローンです。

ティアナの言葉を遮るように、キャロのデバイスが敵の襲来を告げる。

「つー来た！」

ガジェットには魔力を阻害するAMFというバリアのようなものが搭載されているらしい。だが、

### Sward Vent

「らあつーーー」

『龍騎』は、魔力云々ということにはまったく関係ない。スバル達と協力しつつ、さほど苦労することもなく敵のせん滅は完了した。

「ふうーーー」

シグナムが仕事でいない時などにちょくちょくフォワード陣の練習に混ぜてもらっていたのが少しは功を奏したようだと真司は思う。一応、足を引っ張らない程度には連携ができたためだ。……もっとも、4人が彼に合わせてくれているところが大きいのだろうが

ドガアアアン！！

「のわあつー？」

そんなことを考えていたさなか、突然真司の真後ろの壁が轟音とともに崩れた。あまりに不意を突かれたために、思わず足を滑らせてしまひ。

「遅くなつて」めん…… つて、あれ？」

土煙の向こうから現れた少女の言葉が、目の前で格好悪く尻餅をついている仮面の騎士を視界にとらえたところでストップした。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

「スバル、ティアナ。……えっと、それで、こちらの方は？」

スバルとティアナに挨拶をした彼女

ギンガは、再び真司に視線を戻す。

「ギン姉、この人は城戸真司さんって言って、民間協力者として一緒に戦ってくれてるんだよ」

「ど、どうも… 城戸真司です」

「はじめまして。ギンガ・ナカジマです。……あの、驚かせてしまつたみたいですみません。壁を通るのが最短ルートだったので」

「いやいや、別に全然大丈夫だよ。それにしてもさすが姉妹って感じだね。スバルとそっくりだよ（主にゴーカイさが）」

「そうですか～？ギン姉と似てるだなんて照れるな～」

「……スバル。多分ここはあんまり喜ぶところじゃないわよ

素直にうれしがるスバルに、ティアナが冷静にツッコミを入れていた。

## 第一十話 機動六課のある休日？ とかもつ休日じゃないのかもしね（後書き）

謎の少女（「ヴィヴィオじゃない方」）はすぐに再登場しますので安心してください。今回は顔見せだけでしたが。ちなみにイメージCは名塚佳織さんってことにしています。有名な声優さんなので知っている方も多いのではないでしょうか。

感想などあれば、毎日田を通していくるのでお気軽に寄せください。

さて、次回はいつになるのでしょうか。（オイ

いや、だって一回の半分くらいは勉強せわるくえないし……

## 第一十一話 声（前書き）

前書きを何に使うのか？それはとっても難しいことだと思います。で、色々考えた結果がこれです！

『雑談コーナー』！

つまりこの作品の登場人物たちがあるネタに対して雑談をするわけです。……え、意味不明？ そうですよね……まあ、続けてほしいと いう声があれば続けます（ないと思つけど）

～お題『魔法少女まどか マギカ』について～（ネタバレ含みます）  
はやて「最近は魔法少女でもこないなひどい目に遭つんやな…… 気  
いつけよ」

フェイト「魔法少女アニメに新しい風を吹き込んだ作品だね」「  
真司」「それはリリカルなのはも同じだと思つけど。だつて魔砲少女  
だし」

はやて「せやけどアニメ一期の8ヶ月前にガチ戦闘系魔法少女もの  
のプリキュアがスタートしどつたしなあ……」

なのは「新しい風」というと、カードキャプターさくらとかもそうだ  
よね。いわゆる『萌え』の魔法少女文化を拡大させた要因だし」「  
真司」「そういうえば、桜ちゃんの衣装はただのコスプレだつたんだよ  
な」

フェイト「NHKって本氣出すとすげんだね」「  
はやて「関係ないけど、この作品の作者は初代プリキュア1話の変  
身シーンで初めて性的興奮を覚えたとか」

スバル「ねえティア。なんだか話があさつての方向に向かつてない？」

ティアナ「仕方ないわね。ここは私達フォワードが代わりに語りましょう」

キャロ「……悲しいお話ですよね。結局最後はあんなことになつて」

エリオ「特撮ファンからは『龍騎+剣+ネクサス』と評されることが多い気がしますよね。決してパクリというわけじゃなくて、それらの要素をうまくまとめてるって意味ですけど」

スバル「まじかと剣崎さん、どっちの方が悲惨なんだろう……」

ティアナ「どっちもとても辛いと思うけど、自分自身で選んだ道なんだから後悔はしていないと思うわよ。……それにしても、深夜アニメとはいえ、あんな可愛い絵柄でこんな残酷なストーリーを開発するなんてね……」

エリオ「…それを言つたら、日曜朝のスーパークロータイムで『俺のことを好きにならない人間は邪魔なんだよ!』とかやつてる平成ライダーも十分……」

ティアナ「え?…い、いやでも最近は抑え気味だし!Wは正統派ヒーローものだつたし、オーズは主題歌からして軽快な……え?終盤に来て鬱展開?」

## 第一十一話 声

ギンガも加わりさらに戦力アップした真司達のグループは、その後も現れるガジェットを倒しながら奥へ進んでいった。

「あっ、ありました！」

そこでキャロが目的のケースを発見し、後は戻るだけと思われたその時。

「きやあつー？」

突然キヤロに魔力弾が襲いかかる。姿を消していた敵が攻撃してきたのだ。

現れたのは、黒い装甲を纏つた竜。さらにその隙を突かれ、こちらもさきほどまでいなかつたはずの少女にケースを取られてしまった。

「くわー！」

ドラグセイバーを握りしめ、真司は竜の方へ走り込むが、直前でするじとかわされてしまう。

「…………！」

「がつ……」

直後、竜の蹴りが真司に命中する。なんとかこらえたものの、重い衝撃が体を支配する。

「速くて力持ちって、そりゃないだろっ！」

思わず素直な言葉が口をついて出でくるが、真司は再び敵に攻撃を仕掛ける。スバルとギンガも加わり、徐々にこちらが優勢に

ドガアアアアアン！－

不意打ちと呼べるタイミングで鳴り響いた轟音により、真司達は思わず耳をおさえて動きを止めてしまう。

「な、なんだあれ？ リインの色違いか？」

なぜか小さな花火を打ち上げているその小さい生物は、自分のことをアギトと言つて竜（ガリューといふ名前らしい）と紫の髪の少女（ルールー…？）に話しかけている。

「オラオラ、お前らまとめて、かかつてこいやあ！」

その言葉とともに、アギトが紫の炎を飛ばす。すんでのどこので回避した真司達だが、間を置かずには煙の向こうからガリューが突っ込んでくる。

ガキイン！

「やつぱ男はアリーンでしょー。」

ガリューの刃を止めたのは真司だ。パワーがある敵と相手をするには、装甲の硬い自分が適任だと感じたため、真っ先に弓を受けたといつわけだ。

「はあつー。」

続いてスバルもガリューの相手に回り、2対1での戦闘が始まる。アギトとルールーの方も気になるが、そつちは仲間に任せ、真司は目の前の敵に集中する。

「（相手の動きをよく見て……）」

狙うはシグナムから教わったカウンター。相手の攻撃の勢いを利用して、逆に重い一撃を浴びせる戦法。

スバルとともにガリューの攻撃に耐えつつ、真司はチャンスを探る。

「（　今だ！）」

向こうが腕を振り上げた瞬間の隙を狙い、真司はドラグセイバーを

ドガアーン！！

「えつ……」

思わず音のした方を見ると、通路を壊してやつて來たらじいヴィータとリインの姿があつて。

ヴィータは既にガリューに向かってハンマー型の『バイス』『グラファイゼン』を構えて急接近していく。

少し距離を取つているスバルはいいとしても、今まさに斬撃を入れようとしていた真司はほぼガリューと密着していく。

「吹っ飛べええええ…！」

「のわあああああ…！」

ドゴホオオオン…！

「…………」

ヴィータのパワフルな一撃はガリューに命中。一方、間一髪で避けた真司は彼女の方をじっと見つめる。

対するヴィータも真司を見つめて。

「…………おひ、待たせたな」

「殺す気があああーーー?」

微塵も悪びれる様子のないヴィータに全力全開でツツコむ真向。

「何言つてんだ。ちゃんと避けられたんだから別にいいだろ」

「ギリギリだつたら一当たつてたら俺も今頃壁にめり込んでたよー。」

「もしそうなつていたら、所詮お前はそこまでの間だつたつてことだ」

「なんかかつこよべ言つてゐつもりかもしけないけど全然意味わかんないからなー。」

「いいじゃねーか、男が細かいことに突つ込むなつて」

「そりは言つてもなあー。」

「あ、あのー……敵、逃がしちやつたんですけどー……」

2人の口喧嘩に割つて入るのをためらいながら、エリオが控えめな声で言つと。

「「なんだつて！！」

同時に驚き、互いの顔を見て。

「「お前のせいだ！！」」

声をはもりせて理不尽なことを言ひ合ひ真向とヴィータだった。「息ぴつたりだね」とはこの2人のやりとりを初めて見たギンガの言葉である。

その後、崩れ始めた地下水路からスバルとギンガのウイングロードで脱出し、一同の見事な連携によりあれよあれよといつ間に目標の捕獲は完了した。

「……展開が速すぎて何もできなかつた」

まだまだ素人同然の真司はその間ほとんど棒立ちだった。やつぱりプロは違うよなあとか一種の感動を覚えつつ、何かできることはないかと考えるも、特に思いつきもしない。

「取り調べの邪魔するわけにもいかないし……そういうば、なのは達は大丈夫かな」

と、彼が漠然と別行動中の仲間のことを考えていたその時  
だつた。

『……て』

「？」

誰かの声が聞こえたような気がした真司は周りを見るが、みんな捕まえた少女たちの方を向いていて、こちらに声をかけた様子はない。

それに今の声は、まるで

『…………されて』

そう。まるで、頭の中に直接響いているかのようだ。

「な……なんなんだ？」

『…………上うぢあ…………されて』

壊れかけのラジオから出るようなノイズ交じりの声。辛うじて声の主が女性だとこいつことがわかるくらいだ。

それでも、真司にはなぜか、その声が『上うぢあ』がどの方向

を指して「このかなんとなく理解できた。

「……行ってみるか」

この場は自分がいなくても大丈夫だろうし、何より気がかりだといひことで、真司は声の導く方へ動き始めた。

「…………で、ここまで来たんだけど………」

謎の声に従つてたどり着いたのは、とある廃ビルの屋上だった。だが、辺りを見回しても、特に何かあるというわけでもない。

「… 一体君は誰なんだ?」

先ほどから声の主と会話しようと試みて「このもののつまづこかず、ただ向こうから声が聞こえてくるだけだ。

『…………あ……ない……』

「え？」

相変わらずノイズが入っていて、一回ではなかなか意味を理解することができない。

『…………あぶない』

「危ない？なにが？」

次に聞こえてきた言葉に、真司の動きが一瞬止まる。

『ヘリが、危ない』

「真司がいない？」

「はい、気づいたら姿が消えてて……」

一方その頃、捕らえた少女から情報を聞き出そうとしていたヴィータは、真司がいつの間にかいなくなっているとこことをティアナから告げられていた。

「何かあつたんでしょうか？」

「わからねえ。もしかしたらこいつの仲間に……おこ、どうなんだ」

厳しい表情で目の前の紫の髪の少女を睨みつけるも、向こうはまったく動じていない。その様子を見て、ヴィータはさらに不審感を強めた時だった。

「…逮捕は、いいけど」

今まで何を言つても無反応だった少女が口を開き、言葉を紡ぎ始める。

「大事なへりは、放つておいていいの？」

「つー？」

その言葉に、全員が息を詰まらせる。

「あなたはまた、守れないかもね」

その瞬間、保護した少女やシャマル達が乗っているへりに向けて、強力な砲撃が発射された。へりの姿が見えないような位置にいる以上、助けに入るのが間に合つはずもない。

そんな、全員の頭が一瞬真っ白になつたさなか。

『えつ……龍騎！？』

通信から聞こえてきたのは、予想外の人物の乱入を知らせるものだ

つた。

遡ること、ほんの少し前。

ドラグレッダーに乗った真司は、全速力でヘリへ向かつて突き進みつつ、次に使うカードを取りだしていた。

「つーもう発射されるのかよー?..」

遠田に見える魔力の収束が一段と大きくなつたのを見て、真司は焦る。確かにこのタイミングならヘリと砲撃の間に割つて入ることはできるが、そこから攻撃に移れる時間がほとんどない。

ゆえに、『ファイナルベント』のカードをあきらめ、違うカードを挿入する。

## Strike vent

右腕にドラグクローファイサーが装着され、ドラグレッダーに口に炎が溜めこまれていく。

そして、ヘルの前にようやくたどり着いたところで、砲撃が発射された。

「だああああっ……」

真司も腕を前に突き出し、『ドラグクローファイサー』を発動させる。

次の瞬間、炎と魔力がぶつかり合い、周囲の空気が大きく震え始める。

「ぐつ……」

……押されている、と感じる真司。事実、向こうの光線はじつじつと

「ひりに近づいてこる。

「くわい…………」

負けるわけにはいかない。今の自分の背中には、へりに乗る人たち全員の命が乗つかっているのだから。

「踏ん張ってくれ、ドラグレッダー！――」

渾身の力を込めながら、彼はドラグレッダーに叫ぶ。

「ウオオオオソン――」

そして、それに呼応するかのように赤き龍が雄たけびを上げると。

「う――炎が…………」

炎の中に黒い稻妻が走った瞬間、威力を増したそれが砲撃を押し返していく。

ぶつかり合っていた2つの攻撃は、轟音を上げて互いに打ち消し合

つた。

「はあっ、はあ……」

息を切らしながら、真司は今しがた炎の中に見た黒い光がなんだつたのかについて思いを馳せる。

が、それも一瞬のこと。

「『ドラグレッダー』めん、もつちゅうとだけ頑張ってくれ

そう言つと、ドラグレッダーはいかに田配せをしてから再び動き始める。まるで『これが終わったらふく食わせろ』とも言つているかのように真司には感じられた。

「わかった。はやてに頼んでみるよ」

今日ははやても戦ってるみたいだから魔力をたくさん分けてもらえるかはわからないけど、と付け加えて、彼は砲撃が飛んできた方向を見据える。

戦いは、まだ終わっていない。

## 第一十一話 声（後書き）

……雑談「コーナー必要なんでしょうか。よろしければ「続けてほしい」とか「書くだけ無駄」とか感想で伝えてください」とうれしいです。

さて、本編の方はちょっとだけストーリー進行。アニメ本編とは違つてなのはは砲撃に間に合わなかつたつてことで解釈してください。あと謎の声は真司が電波になつたわけではありません（笑）

感想や評価などあれば、お気軽に寄せください。

では、また次回。

## 第一十一話 眼帯少女の正体（前書き）

そこそこ好評だったみたいなので、雑談コーナーは不定期でやつて  
いきたいと思います。今回は後書きでオリキャラのプロフィール的  
なものを書くのでお休みです。

## 第一十一話 眼帯少女の正体

「…………やつぱり駄目だったか」

すぐに駆けつけたのはトフュイト、そしてはやてとともに砲撃してきた人物2名を捕まえようと奮闘した真司（とこかほほドラグレッダー）だったが、やはり先ほどの撃ち合いで疲労が溜まっていたのだろう、ドラグレッダーの動きは鈍ってしまった。さらに敵側に救援が入ったせいで、最終的にはなのは達も相手を取り逃がしてしまったのだった。

「それにしても、相手が全員女の子って……なんかやりにくいなあ

ヘリを撃ち落とすとまでした連中なのだから、おそらくまた戦うことになるだろう。今回真司が直接戦ったのはあの竜っぽいモンスターだけだったが、次は

「……いやいや。悪い」とする奴に男も女もないよな。ちゃんと捕まえないと

そんなことを考えながら、真司はどうあえず地上に降りて変身を解き、なのは、フェイントと合流する。

「逃げられたやつたな

「うん……でも、くつを守れたのは真司くんのおかげだよ。ありがとうございます」

「でも、じつして砲撃に間に合ったの？」

スバル達と一緒に行動したはずのこと、と不思議そうに尋ねてくるフロイト。

「ああ、それは……」

「おー！本物の魔導師さんだ。初めて見たなあ～」

真司が説明しようとした瞬間、少し間の抜けたような声がその場に響く。

「え？ って、君はー？」

そこへいたのは、ロストロギアが見つかったという連絡をキャラコに。もう一、現場に向かおうとした時にうかりぶつかってしまった。

「どーも、またお会いしましたね」

真司の夢に出てきた、白の眼帯をつけた少女だった。

「なんだとなといふ……」

「なんだと呟きながら、私の家がこの辺ですし、ついでに呟つと面白そうなことがあつたら首を突っ込みやがるを得ないのでホイホイ様子を見に来た次第なのですよ」

「あ、ああ……わうなんだ。まあ、もう戻りは収まつたからいいんだけどね」

なんだか活発そう、ところの印象を受けるその子の顔を見ながら、真司は気になつていてることを呟つべきかどうかを考える。

「あの子、真司くんの知り合いなの？」

「えつひ、やつれ真向まむきが道みちでぶつかつた子こなんだナビ……」

フロイトがなのはに説明してこる間に、とつあえず聞いてみると  
いつ結論に達した彼は、少女に向かつてあることを尋ねた。

「……ヒーリング。俺、城戸真向しろとまむきってこうんだけビ…前にビリカド会  
つたこととかつてないかなー… つて思つたり思わなかつたりして」

「それは質問ですか？ 独り言ですか？」

「あ、ああ…一応質問」

その言葉を聞いた彼女は、じさまりへ無言で真向まむきを見つめる。

「……」

もじかして、とこつ予感が真向まむきの頭かしらによれる。

「……アラウ」

すると、彼女はおもむりに携帯を取り出しだす。

「あ、もしもし管理局ですか？ちょっと変な人にナンパされてしまつて……」

「ちょっと待つてえええーーー？」

自分が痴漢の現行犯になろうとしていることに気づいた真司は、あわてて声を張り上げる。

「なんですかペド紳士さん」

「城戸真司なんだけどーーーほとんどの名前が原形と違めてないんだけどーーー」というか管理局はやめ

「かけてませんよ」

「…………え？」

「だから、管理局になんてかけてません。時報を聞いていただけです。使い古されたネタですよ？」

あつからかんと離つ少女に、真向むせられた、と額に手を当てる。

「やめてくれよ、寿命が縮むくらごびくつしたんだから……」

「あははは、大げさな人ですねー。……まあ、それはそうとして。私があなたと会ったのは派手にぶつかってしまったあの時が初めてです。ナンパがうまくいかなくて残念でしたね」

「…………ああ、そう（初めからそれだけ言つてくれればよかつたのに。しかもナンパじゃないし）」

はやてもやつだが、最近年下にからかわれる」とが多い気がする。

「それにして、管理団にわざわざ電話しなくとも、あなたの後ろのお姉さんには捕まえてもうつた方がよせうですしね」

「？」

彼女の言葉の真意がつかめないまま、後ろを振り向く。

「…………そつかあ（ヒヒヒ） 真司くん、ナンパなんてするんだあ……

……（ヒヒヒ）」

「なんか恐ろしいモノが降臨してー?」

張り付いた笑顔が恐怖でしかない、高町なのはがこちらを覗いていた。フロイトは隣で、「こつものなのはじやなこ……」とか言いながらおろおろしている。

「なんだかよくわからないにこび恐れしこになつてますねえ」

「なんだかよくわからぬにこび分類のせいだと思つんだ俺はー」

「ああ、やつこえはそろそろやばん塾の時間だつたよつな気がするよつなしなこよつな」

「どうちだよーつてか事態をややこしくしたまま帰るつむつー?」

「うなみに私のこの眼帯は趣味ですかー海賊ですかー派手にこべやー?」

「別に聞こてなこよー気になつてはいたけれどー?」

完全に回りのペースで会話が進み、真司はぜえぜえ息を切りしな

がらツッ 「ミを入れる始末。これでも一応ついにわざと尊い命をひとつならず救つた戦士だつたりする。

「そういっわけで、私は帰らせていただくのですが」

「……いたたくのですが?」

もうひとつでもいいという感じで真司が聞くと、彼女はにこりと笑みを浮かべる。

「シホです」

「へ?」

「ですから、私の名前。シホ・ジンキッドっていいます。ナンパとはいえ、そちらの名前を教えてもらつた以上こちらも教えるのがスジつてもんでしょう」

「ああ、それは『一寧にじづも』って、だからナンパじゃないって

「シホちゃんかシホ様かご主人様かシホ大宇宙神様と呼んでください」

「じゃあシホちゃん、ようこそ」

「む。ペドさんはつまりない人ですね」

「城戸だよ」

疲労により真司のツツコミがローテンションになつたことで、その少女 シホは少し残念そうな顔つきになる。

「仕方ないですね。また会つたらキレのいいツツコミを期待しています。では！」

そう言って軽く頭を下げる、彼女は走つて帰つていった。

「はあ……疲れた」

色々気になる」ともあるし、早いところ六課に帰りたいとため息をつく真司だったが。

「す」「いね真司くん。今日会つただけの人ナンパして、あんなに

仲良さそうに話ができるなんて。私びっくりしちゃったなあ（満面の笑み）

まだ問題は解決していなかつた。

「なのは……あの、これにはわけが」

「結構軽い男だつたりして」

「がはつー」

真司のピュアな心（本人談）に冷たい言葉の矢が突き刺さる。思わず本当にやろめきながら、真司は『これじゃまるで浮氣したことを彼女に攻められる彼氏の図じやないか……』とか心の中で考えていた。一方なのはも同じようなことに思い至つており、『彼氏彼女かあ……にやは』と、最終的に怒つてんだか喜んでんだかよくわからぬ表情になつていた。乙女心は複雑である。

「なのは……わけがわからないよ」

ちなみに、ひとり蚊帳の外なフェイトがこの展開についていけなかつたのは言つまでもない。

一方、元気に走り去ったシホは、急に足を止め、まだ真司達がいる  
であろう場所の方を振り返る。

「城戸…真司、か。ふふつ」

そうつぶやいた彼女の顔つきは、どこかうれしそうだった。

## 第一十一話 眼帯少女の正体（後書き）

ペド…「ペドフライア」の略。幼児・小児に対する性的嗜好を持っていること。簡単に言いかえればロリコン。

紳士…普通はジョンナルマンの意味だが、「変態」などといふ単語と組み合わせることで「変態を意味する言葉になる。今回もちらりと後者の意味。

つまりペド紳士とはロリコンです、ここ変態ってことですね。

とこつわけプロフライルいつてみよー！

シホ・ジンキッド

年齢：16

性別：女

身長：158cm

体重：よんじゅうわなにをするやめ（røy

特徴：黒髪ツインテール、瞳の色はヒメラルド。右目に白い眼帯をつけている。

趣味：不明

本人より一言…「「一カイジャーッておもしろいですよねー！」

……自分でも書いてて思つたんですけど、なんだコイツ。途中から完全に僕の手を離れて勝手にセリフを話しえましたよ。本当は今回でドラグレッダーの黒い稻妻に関して考察を入れて、ヴィヴィオのところにいく直前あたりまで進めようと思つてたのに終わつてみれば7割以上無駄な漫才で構成されていたよ！

ま、なにひとつもあれ、これでようやく僕の作品にもオリキャラが登場したというわけです。活動報告などでも出番が多くなることでしょう。…あ、名前が変なのは気にしないでください。いろいろテキトーに考えた結果ですので。

次回はヴィヴィオのところまで行ければいいなあ……

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第一二三話 進化と謎と（前書き）

久しぶりにアクセス解析を見たら、そろそろPVが40万に到達するようです。総合評価も900間近だし、その時まだ夏休みが終わってなければティアナ（と真司）メインの特別短編でも書こうかな……

## 第一二三話 進化と謔と

機動六課に帰還した後しばらくして、はやてに呼ばれ部隊長室に入った真司を待っていたのは、なのは達3人の隊長陣だった。

「さて、早速真司くんから話を聞くついでに御覧なさいよナゾ……その前に

はやての皿を細める仕草に、彼は何かよくない話が来ると直感的に感じた。

「結果的にヘリを救つたにしろ、連絡なしでの単独行動をしたことに関しては叱つとかなあかんな」

「あ……それについては反省してる」

勝手に隊を離れたせいで、ヴィータ達を心配させたのは事実なので、真司は申し訳なさそうに顔を下に向ける。

「みんな捕まえた子達の方を気にしてたから、なんか言いだしづらくて。一応、向ひから通信が入つたら説明しようと思つてたんだけど……」

「…その通信機が壊れてたことに気づかなかつたんだね」

途中から言葉を引き継いだのは、彼はその通りですと言つて  
に小さく頷く。

民間協力者とはいえ、真司も機動六課の一員である以上、当然作戦  
時にはみんなと連絡が取れるよう通信機が手渡されていたのだ。だ  
が、手首についていたその通信機は、地下水路でのガリューとの戦  
闘中に壊されてしまっていた。それを知らないまま、真司はひょこ  
ひょことひとりで声に従つて行つてしまつたというわけだ。

「まさかあのドリーパンの鎌の餌食になつてたなんてな」

「真司、報告によるとそれは召喚虫だつたらしいんだけど」

「…………え、やうだったの?」

てつきり竜同士の対決だと思つていた真司は、フロイトの言葉に僵  
然とする。

「…………まあ、試作品を渡しあつたにもかく責任はあるし、今日は  
これ以上言わんけど、次からは気をつけてな」

「はい」

「それじゃあ、そろそろ本題にはいるか。……真司くん、なんでへりが襲撃されたことがわかったのか、詳しく述べてくれん？」

\*

「頭の中から声が聞こえた、か……」

一通り真司が説明を終えると、3人はそれぞれ思案の表情を見せる。

「ひょっとして、みんなが使つてゐる『念話』つてやつなのかな？」

自分なりに考へてたゞついた推論を口にする真司だが、はやては首を横に振る。

「念話をうためには、自分と相手の両方がある程度の魔力の資質を持つことが最低条件や。真司くんにはミッドナルダに来てすぐの

時に検査をしたんやけど、資質はゼロやつた

「仮に何らかの方法で真司くんに念話を送れたとしても、問題は誰がそれをやつたか、だね」

「あの時ヘリを狙っている人物がいたことを知つていて、しかもそれを真司に伝えることができた人物……今のところは検討もつかないね」

なのは達でも、あの声に関することはほとんどわからぬようだ。

「ドラグレッダーの黒い稻妻みたいなやつの」ともよくわからぬしないあ」

「あ、それについては私が原因かもしれん」

「え?」

はやての言葉に首をかしげる真司。なのはとフュイトも同様だ。

「今のドラグレッダーの餌は私の魔力やろ? ひょっとしたらそれによつてあの子の体に変化が起きてるのかもつて」とや

「つまり、はやてちゃんの魔力を吸収してパワーアップしてる。そういうことでいいのかな」

「……でも、このまま魔力を『え続けて悪影響が出ないのか、ちょっと心配だね』

「うーん……あいつも自分の害になるようなものは食べないだろうし、大丈夫なんじゃないかな。今のところは、新しいドラグレッダー、『超ドラグレッダーV2』の誕生ってことで」

「ちょい待ち。『超ドラグレッダー人3』の方がよくない?」

「何段踏み飛ばしてるんだよー?しかも無理やり過ぎるしー。」

はやての命名に明らかな不備があることを指摘する真司。それを聞いて、彼女も考えを改めたようだ

「しゃーない。『超ドラグレッダー人2』で我慢しよか。髪が伸びたら3つことで」

「訂正するとこちゅーじゃないだろー?」

とりあえず『人』という単語を外すよう説得する真司だった。

「……『全力全開ドラグレッダー』とかどうかな」

「私は『ソニックドラグレッダー』がいいと思つんだけど……」

結局、ドラグレッダーの新名称は保留のままとなつた。

「ああフェイト、ちよつといいかな」

途中から命名戦になつていた話し合いが終わつた後、フェイトは

真司に呼び止められた。

「真司。……あ、もしかしてケーキのことかな」

「やつやつ。」んなことになっちゃって今日は作れなかつたけど、どうする?」

「えつと、どうしようかな……」

先ほどまですっかり忘れていたが、今日は真司を誘つてケーキの材料を買いに行つていたのだった。その後テレビ番組のインタビュアーに会つて、そこで

「……」

カアア、と顔全体が熱くなつていいくのがわかる。

「……フェイト?顔赤いけど大丈夫?」

「えつ!?.い、いや、なんでもないよ?ち、近いうちに作りたいと思つから、時間が取れたらその時言つね。そ、それじゃつ」

それだけ言つと、フロイトはすぐわざわざ右をじて耳足で逃げるよつと出でてこぐ。

「（えりつけやつたんだる、私……）」

自分の行動が理解できぬ。どつして眞司と二人きりになると恥ずかしくなるのだろう。

「（……本当に、変な感じ）」

「……行つちやつた

なにやら様子のおかしかつたフロイトは、一通つ言つことを言つた

後どこかへ行ってしまった。何か悪いことしたかな?と考える真司だが、特に思い当たる節はない。

「……」ヤーヤー

「……シャーリー。この間にいたんだ。ついでにベッドにヤーヤーしているんだ」

微妙な距離を取つてこちらを眺めていたシャーリーに声をかけると、彼女は相変わらず一ヤーヤーしたままで歩み寄つてくる。

「真司さんも罪な男だねえ~」

「……どうしてだよそれ」

「それは教えない。見てて面白こから」

彼女の言葉の意味がまったく理解できず、真司は頭にマークを浮かべる。

「まあ、それはそうとして。あの通信機、やっぱり壊れちゃったみたいだね」

「ああ、『めんな。折角作つてくれたの』」

「謝ることないよ。私の腕が甘かつただけだから。他のみんなの通信機はバリアジャケットにある程度守られてるし、万一壊れても念話が使えるけど、真司さんは違つからね。もつと強度の高いものを用意しなこと」

グッと拳を握るシャーリー。じつめに満々の力だ。

「じゃあ、お願ひするよ

「解。……あ、そういう。むつひとつ作つてあるのがあるんだけど、もうすぐ見せられたと思つた

「わひとつ~それつて

「秘密。それじゃあね」

秘密ばかりで何も教えてくれないなあと想いながら、真司はシャーリーを見送つた。

「ふう……なんだか気になる」とばつがだな

あの時聞こえたノイズ交じりの声や、今日戦った女の子達のこと。フェイトの様子がおかしいことも気がかりのひとつであるし、そして。

「……あの子、大丈夫かなあ」

路地裏でロストロギアを持って倒れていた、小さな女の子のことを考えながら、真司は自室へ戻つていった。

## 第一二三話 進化と謎と（後書き）

今回は特にストーリー上の動きはありませんでした。たまには一呼吸置かないとな！いつもほとんどの話が進んでない気がするけど！

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。

では、また次回。

## 第一一十四話 曲がりくねる聖域（前書き）

ちよびちよび書いためにいた最新話が50000文字ほどに達したので、とりあえず投稿します。

ちよびちよび書いためにいた最新話が50000文字ほどに達したので、とりあえず投稿します。

## 第一十四話 優れめの聖域

地球人から見れば『近未来都市』と言つて差し支えないであらう。ツドチルダの道路を疾走する車が1台。

「でも、本当に俺も行つていの? その聖王教会つじじいが管理してゐる病院に」

隣に座つてゐるのはに、真司は不安そうな顔つきで尋ねる。ちなみに車の操縦はシグナムが行つてゐる。

例のレリックを持つていた女の子は、現在『聖王教会』という教会の方で保護してゐるらしいと聞いた真司が、「様子が気になるなあ」とつぶやいたところ。

「なら、真司くんも来る? 今から迎えに行くんだけど」

「え? いいの?」

とこつ次第で今に至る。女の子のことを心配していた真司に、つては、早く彼女に会えるのは喜ばしいことなのだが、どうにも『聖王教会』などといふなんともすうしたな名前に尻すくみしている状態だ。

「全然大丈夫。真司くんは小さい子のお世話とか上手そうだし、むしろ来てくれた方がありがたいよ」

「ならいいんだけど」

そんなに子供の相手ができるわけでもないけどな、と付け加えつつ、とりあえず安心する真司。

「しかし、検査が済んで、何かしらの白黒がついたとして、あの子はどうなるんだろうな」

「当面は六課か教会で預かるしかないだろ? ね……」

シグナムが発した言葉に、歯切れ悪くのはが答える。

「（確かに人造魔導師…だったよな）」

そんな2人のやり取りを見た真司は、地下水路でスバルから聞いた話を思い出す。

初めから魔導師になるべくして生まれ、そのための処置を施された、文字通り『作られた存在』。倫理的な問題はもちろんあるだろ？」「いろいろ警戒されそうだといつのは真司でも理解できた。

「（……でもまあ、普通の子だってお父さんとお母さんが人体鍊成して生まれるわけだし、普通に接すればいいよな）」

多少全年齢推奨ではないことをイメージしながら、彼がそう結論づけた時。

「騎士シグナム。聖王教会、シャツハ・ヌエラです！」

通信機から聞こえてきたのは、真司には覚えのない声。話しかからして、かなり焦っているのは明らかだ。

「どうされました？」

「すみません、こちらの不手際がありまして……検査の間にあの子が姿を消してしましました」

「…………」

それを聞いた途端、3人とも表情を変える。が、真司がただ驚いているだけなのに対し、なのはとシグナムの顔つきは厳しいものだ。そんな2人を見て、彼も遅れて事態の深刻さに気づく。

「どうか、あの子は人造魔導師だから

」

「誰かが利用しようとして、危害を加えるかもしれない。そういうことだね」

真司の言葉を引き継ぎ、なのはがうなずく。確かに、あんな小さな女の子が誘拐でもされたら大変だわ。

「とにかく、病院へ向かうぞ」

シグナムの言葉とともに、運転する車のスピードが上がった。

「申し訳ありません！」

病院に着いた真司達を待っていたのは、先ほど通信を行ったシスター・シャツハであり、彼女は開口一番に謝罪の言葉を口にした。

「状況はどうなっていますか？」

「はい。特別病棟とその周辺の封鎖と避難は済んでいます。今のところ飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません」

「外には出られないはずですね？」

「はい」

なのはヒシャツハの会話を聞きながら、やつぱり手当たり次第に探すことになりそうだなど真司は考える。

「とりあえず、2手にわかれて探してみる?」

真司がそう提案したといふ、なのはは首を縦に振る。『ひつやひ回り意見らしい。

「それじゃあ、私と あつ」

そこまで言ったといふと、なのはは真司を見つめるシャツハの視線に気づいた。

「紹介がまだでしたね。こけら、現在民間協力者として機動六課に協力してもらっている城戸真司さんです」

「あつ……、ど、どうもはじめまして。城戸真司です」

「うわらわはじめまして。聖王教会所属、シャツハ・ヌエラと申します。……では、あなたが件の『龍騎』だったのですね」

「は、はい、そうですけど……つていつか、俺ってなんか噂になつたつしてゐんですか?」

シャツハの言葉を聞いた真司は、素直に浮かんだ疑問を口にする。

「はい、有名だと思ひますよ。一部では『機動六課の隠し玉』と呼

ばれていくやうです

「……知らなかつた」

「私も色々お話ししたい」とがあるので、それはまた今度にしましよう

「今はとつあえず、あの子を探さなきゃいけませんね」

ひとまず会話を打ち切り、4人は消えた女の子を捜索を始める。

「……それで。とつとつ俺の秘奥義を使う時が来たみたいだな」

「……秘奥義?」

捜索隊その1・真司＆なのはチーム。

捜索隊その2であるシグナムとシャツハと別れてすぐに、真司が意味ありげな笑みを浮かべていた。

「ああ。使うのは中1以来だな。それ以来かくれんぼなんてやつでなかつたからな~」

「?…あ、もしかして秘奥義って人を見つける方法のこと?..」

「そりそり。これでも俺、子供の『ひは』『かくれんぼのバカ真司』と言わされて恐れられていたんだよ」

「にゅはは……そつなんだ」

『そんなもの、誰が恐れるんだろう』という言葉は胸の奥にしまい、なのははとりあえず笑つておく。……そもそも、恐れている相手の名称に『バカ』は入れないだろ?、多分。

「ひひのはな、相手の視線を考えることが大事なんだ。だから」

そう言ひてしゃがみこんだかと思つと、真司はそのままつづぶせになつて体を地面につける。

「これで探す

そうして、草むらの中をほふく前進で進み始めた。小さな木も多く植えてあるので、確かに小さな子の視線に合わせるのは間違いではない……のだが、その体勢ではむしろ視線が低すぎるのではないかとは感じる。

「待つて真司くん、服汚れちゃうよ~」

「へーへーへー。」のへりこどりついて」と いつ

「どうしたの?」

なのはが呼びかけるが、しばらくたつても返事がない。現在、真司が草をかきわけて進んでいたため、彼女からは彼の足しか見えていない状態だ。

「真司くん?」

少し不安になり、なのはが真司の上半身があるであらつ場所に進むと

\*

時間は少し巻き戻る。

「へーあーあー。」のへりごどひひへー」と

「いひ

女の子を探そうと草むらをほふく前進で進んでいた真司は、服が汚れてしまつといつなのはの声を聞き、体を前に進めながらもなのはが立つてこるのであらう方向に顔を向けて返事をしようとしたのだが。

よも見をしていたせいで、前方にあつた何かに気づかずぶつかってしまつ。

「（……？なんだこれ）」

驚いて顔を前に向けた真司だが、視界はゼリリコウわけかほとんぜ白一色になっていた。目に映っているのは……白い布のようなもの。真司の頭はこれにぶつかつたらしい。

そして少し目を横に向けると、やうにほなきれいな肌色の

肌色のふとももがあった。

「ひゃう！」

なにやら上の方向で子供のおびえる声が聞こえたかと思つと、太ももと白い布がもぞりと動ぐ。

「（…………え？あれ？待つて、待て待て。俺が今見てるのって、まさか）」

そつあつてほしくないと願いつつ、真司は体を後ろへ後退させ、ゆっくりと顔を上げていく。

そこにいたのは、明らかにおびえた目つきをしている、真司達が探していた小さな金髪の女の子。よく見ると左目と右目で瞳の色が違うが、今はそんなことさせどりでもよくて。

……服がめぐれて無防備にさらされている彼女のふとももと白いパンツが、真司の精神を地獄へ叩き落とした。もしかしてもしかしながら、今しがた彼が頭を突っ込んでいたのは、いたいけな女子の『聖域』であったことを認識したからだ。

「あ、あのう、えっと……これはその、あの……」

とつあえず何かを言わなければ、と脳内で口にするべき言葉を検索する真司。だが、脳の大半が「ちよつ、ええええええ！……？？」という言葉で覆い尽くされた大混乱状態であるため、まともな答えは返って来ない。

「…………く」

とその時、女の子が何かを言おうと口を開いた。相変わらず目はおびえたままだが、もしかするとこちらの言わんとすることを察してくれたのかと淡い期待を抱く真司。

「へ……」

自分の気持ちを表す言葉を探すよつた様子を見せる女の子。真司は黙つて言葉を待つ。

「……へん、たい」

純粹な女の子が一生懸命絞り出して発したその言葉を聞いた真司の心は、地獄からさらに下の未知なる領域に突き落とされた。

「がはつ……」

なまじ正直なかわいらしき子供からの言葉の矢がどれだけ鋭く深く真司の心を抉ったかは、今さら言つまでもないだろつ。

\*

「真司くん、どうしたの」

草むらをかきわけて進んだ先でなのはが見たのは、まるでこの世の終わりともいうような表情でがっくりとひざをついてうな睡れている真司と、そんな彼の姿を見て少しおびえている様子の件の女の子の姿だった。

そつぱりわけがわからない。

「…………えっと、これは一体どういった状況？」

とつあえず思つたことをそのまま口にして、なのはは真司に説明を求めたのだが。

「…………最低だ、俺…………クズだ、ゴミだ……いや、一酸化炭素吐き出す分ゴミよりもタチが悪いじゃないか…………」

「…………あ、あの～、真司くん？聞けよてる？」

ぶつぶつと呪詛のよじこゑの言葉を並べ続ける真司。田から光が消えてくるよくな氣もする。……！」それでも、わすがに本氣で心配になつてくる。

「真司くん？何かあつたのなら話してられないかな。そんなに自分を卑下しないで」「

「最低だ……なのはのパンツならともかく、こんな小さな子のパンツに頭を突っ込むなんて……」

本当に卑下するほど最低だった。

「なつ…………！？！？」

なのはの動きが固まり、みるみる顔が真っ赤になつていぐ。

「なつ、なななな、なにを言つてゐるのかな真司くんは！わ、わわ私のパンツ見るのも十分最低だよ！……あつ、でも別に、ゼッタイ見られたくないってわけじゃなくて、物事には順序といつものがあつて、ちゃんと段階を踏んだ後なら……むしろ見られたい……つて、セーフじゃなくつて一つまり……」

「ああ、最低だ……」

「きれこせつぱつ全部無視してるー!-?」

混乱して相当とんでもないことを口走っていたのだが、そんなのは言葉をすべてスルーして落ち込み続けている真司。しばらくは放つておいた方がいいのかもしれない。

そつ思つて、一旦真司から視線を外してみると。

「…………??？」

緑色の右田と赤色の左田で不思議そうに彼女達を見ている女の子が目に入った。

「(やうだつた……)の子を探してたんだよね」

真司とのやり取りですっかり忘れてしまっていたが、『病室を抜け出した女の子を見つける』といつ目的は達成できたようだ。

「(あれ……おびえていなー?)」

女の子が病室からいなくなつたといつ話を聞いた時、なのははその理由を『いきなり知らない場所に連れて来られて怖くなつたのではないか』と推測していた。実際、なのはが最初にここに来た時は、彼女は真司を怖がつてゐるようなそぶりを見せていた。それが今は、『この人たちは何をしてゐるんだろう?』といつようなものに変わつてゐる。……漫才のよつなかけあいを見せられて、心象が変わつたのかもしれない、となのはは考える。

……ともかく、怖がられていなければいけないとしてもありがたいことには変わりない。

「『いわんね。びつべつせひけはつたかな』

ゆつくりと女の子に近づき、なのはは彼女の服についている汚れを優しく払つ。

「さじめまして。高町なのはつてこります。お名前、言えるかな」

「……ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオ……いいね、可愛い名前だ」

この出会いが、彼女達にどれだけの影響を与えるものになるのかは、まだ誰も知る由がなかった。

## 第一一十四話 優れぬ聖域（後書き）

ところがついでいつも通り話が前に向いて進みませんでした。W丸1話かけて、ヴィヴィオと会つまでしか進まないなんて……

そしてなのはもキャラ崩壊。ギャグシーンだとみんなのキャラがかしくなるのはもうどうしようもないのかもしません。タイトルもシリアルっぽくしておいて中身を見て『聖域』の意味に呆れかえった読者様も多いことでしょう。

今回の冒頭で真司が下ネタに近い発言をしていましたが、R-15指定くらいはした方がいいのでしょうか？でもまあ最近の子はませてるから問題ないような……

感想や評価などあれば、お気軽に寄せください。ちなみに今の目標は50万PV＆総合評価1000ptです。どちらも僕にとっては大台となるものですので。

では、いつになるかわかりませんが、また次回。

P・S・タイトルの元ネタはあるカードゲームのとあるカードの名称なのですが、わかつた人はいますでしょうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1868n/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～龍の影を纏いし騎士～  
2011年11月30日18時54分発行